南葵音楽文庫紀要

第4号

和歌山県立図書館

目次　CONTENTS

■論文・調査報告

・徳川頼倫試論（1）── ひと・仕事・時代 ──.....7
林淑姫

・南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究
──その沿革とカミングス文庫「音楽書」目録──.....15
佐々木勉

・高野武郎──徳川頼貞『薈庭樂話』の口述筆記者──.....25
泉健

■資料紹介

・リスト《フン族との戦い》.....36
近藤秀樹・井戸慶治

■関連歴史資料

・南葵音楽堂の建築について
──ヴォーリズ建築事務所に遺された建築図面──.....44
芹野与幸

・喜多村進宛徳川頼貞書簡.....57
竹中康彦

■収蔵資料　目録と紹介

・南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定.....68
・南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録.....72

・南葵音楽文庫　活動の記録.....86
・南葵音楽文庫　ミニレクチャー【一覧】.....89

論文・調査報告

徳川頼倫試論（1）
― ひと・仕事・時代 ―

林　淑　姫

幼年時代

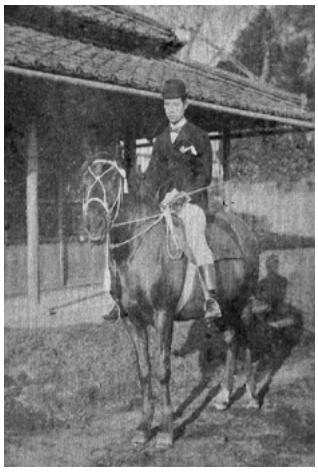
徳川頼倫は明治 5 年 6 月 27 日（1872 年 8 月 1 日）、東京本所の田安徳川邸に生れた。田安家八代当主徳川慶頼の六男で、幼名を藤之助といった。兄に家達（1863 ～ 1940 年、徳川宗家十六代）、達孝（1865 ～ 1941 年、田安徳川家九代当主）がいる。明治 5 年という年は、明治政府が近代社会の形成に向けてさまざまな取り組みを開始した画期的な年代である。学制頒布、新橋横浜間の鉄道開通、太陽暦への改暦、そして、のちの頼倫の仕事との関係でいえば図書館（書籍館）が設立されている。1880（明治 13）年 2 月、男子のいなかった紀伊徳川家に養嗣子として迎えられ、名を頼倫とした。

紀伊徳川家の当主は茂承（1844 ～ 1906 年）。彼もまた養子で、紀州藩支藩であった伊予西条藩九代藩主松平頼学の子として生まれ、紀州藩主慶福（家茂）の十四代将軍就任後、紀伊徳川家に迎えられ家督を相続。1869（明治 2）年版籍奉還により和歌山藩知事、1871（明治 4）年廃藩置県により出府。時局に通じた英明な人物であったようで、藩主としての治世 13 年の間に抜本的な藩政改革を行い、1878（明治 11）年には維新後の困窮にあえぐ旧藩士救済のために「徳義社」を設立している。1884 年華族令により侯爵叙爵。1890 年帝国議会開設とともに貴族院議員に就任。

頼倫は茂承のもとで漢学、国学とともに語学をはじめとする洋学教育を受けて育った。頼倫の他界直後に編まれた『南葵育英会会報』の「故總裁徳川頼倫侯略年譜」(1) から彼の教育歴を追ってみると、8 歳の時から旧会津藩士秋月悌二郎（胤永、1824 ～ 1900 年、のち熊本五高教師）の学塾に通い、成瀬大域（1827 ～ 1902 年）に書を学ぶ。13 歳で学習院に入学。家庭教師に迎えられた津田うめ（梅子、1864 ～ 1929 年、当時華族女学校教師）や来日したばかりの聖公会宣教師アーサー・ロイド Arthur Lloyd（1852 ～ 1911 年）に英学を学んだ。1888（明治 21）年学校生活に馴染まなかったとみえ、成績振るわず学習院を中退。直後から山井重章（号清渓、通称幹六、1846 ～ 1907 年）が徳川邸内にひらいた「養成塾」で旧藩士子弟と起居をともにして勉学の日々を送る。

徳川頼倫（1872-1925）
1896 年　ロンドンにて
（茨城県立歴史館蔵）

徳川茂承（1844-1906）



馬上の頼倫（茨城県立歴史館蔵）

(1)『南葵育英會會報』30 号（「故總裁徳川頼倫侯追悼號」1925.9）.

妻・久子（1873-1963）
（茨城県立歴史館蔵）

頼倫は 1890（明治 23）年 9 月、18 歳で茂承長女久子（1873 ～ 1963 年）と結婚するが、その後も教育は続けられた。結婚の翌年より鎌田栄吉（1857 ～ 1934 年、のち慶應義塾長）が教育掛に迎えられた。鎌田の教育方針は人格教育を目指すもので、教科のほかに政治や社会問題を取り上げ、開会したばかりの帝国議会の参観、また国内各地の産業、史蹟、制度への批判的理解を深めるための旅行が推奨された [(2)]。和漢洋に通じた近代日本の理想的な「貴族」の育成にかける茂承の帝王学ともいうべき教育方針が窺える。

頼倫は茂承のもとで教養を積みつつ健やかに育っていった。生来の聡明さに加えて眉目秀麗、挙措端正にして身丈 6 尺の長身、柔術、馬術を能くし、膂力にも富む好青年として成長する。1896（明治 29）年の欧米旅行に随行した鎌田栄吉は西欧社会にあっても引けをとらない彼の姿を伝えている。

> 歐洲に於ける侯は風貌容姿の端麗なる上に坐作進退盡く節に叶ひ、自然と貴公子の態度備はり實に立派で上品で如何なる人にも敬意と好感を與へ、一見して其凡ならざるを思はしめた、從て種々の方面の人との交際の機會を得るのに至極便宜でありました [(3)]。

教育掛の面目ここにありというべきか。青年頼倫を誇らしげに眺める鎌田の表情が目に見えるようだ。

1896～1897年 欧米旅行旅程

1896（明治29）年3月8日　横浜出航
上海経由、マルセイユ着（4月1日）、パリ（同2日）
4月～9月　ロンドン滞在（8月1日～21日スコットランド）。
10月1日　パリ着。【ベルギー】ブリュッセル、アントワープ【オランダ】ロッテルダム、デン･ハーグ、アムステルダム、ライデン【ドイツ】ケルン、ハノーヴァ、ベルリン【ロシア】（11月）サンクトペテルブルク、モスクワ【ポーランド】ワルシャワ【オーストリア、ハンガリー】ウィーン、ブダペスト【ブルガリア】ソフィア【トルコ】コンスタンティノーブル【ギリシャ】アテネ、オリンピヤ、パトラ、ナフプリオ（ペロポネソス）【エジプト】アレキサンドリヤ、カイロ【イタリア】ナポリ、ローマ、フィレンツェ、ヴェニス、ミラノ、トリノ【スイス】ジュネーヴ、ベルン【フランス、モナコ】リヨン（2月16日）、アヴィニョン、ツーロン、ニース、モナコ、モンテカルロ、マントン、アンチイブ、マルセイユ、セット【スペイン、ジブラルタル】バルセロナ（2月28日）、マドリード（3月3日）、トレド、コルドバ（3月11日）、ジブラルタル（3月13日）、ロンダ、セビリャ（3月16日）【ポルトガル】リスボン、シントラ【フランス】ボルドー、パリ
1897（明治30）年4月4日 ロンドン帰着
9月まで滞在。9月末リヴァプール出航【アメリカ】ニューヨーク、ワシントンDC、ボストン、ボルチモア、フィラデルフィア、ナイヤガラ、シカゴ、デンヴァー、ソルトレーク、サンフランシスコ、シアトル、ポートランド【カナダ】バンクーバー（出航）
1897年11月21日　横浜着

欧米の旅

1896（明治 29）年 3 月、23 歳の頼倫は欧米の旅に出る。随行者は鎌田、斎藤勇見彦（1859 ～ 1917 年）である。旅のきっかけは天皇の代理としてニコライ 2 世の戴冠式に出席する伏見宮貞愛（さだなる）親王（1858 ～ 1923 年）の誘いによるもので上海まで一行と同行、その後南回りの航海で、スエズ運河を通ってマルセイユに着いたのが 4 月 16 日。日を置かず英国に渡りケンブリッジで政治、経済学の聴講およそ半年、同年 10 月より各地の視察旅行に赴いた。旅程は左表に記した通りでヨーロッパ各地を隈なく歩いた [(4)]。この欧米の旅はケンブリッジでの勉学を含めて全体がいわば「修学旅行」である。各地の政治、行政、産業、文化に対する理解を深めるために準備された要人との会見をこなすとともに、関係施

(2) 鎌田栄吉談「御教育に就いて」（前掲書）.
(3) 同上。
(4) 鎌田栄吉『歐米漫遊雜記』（博文館 , 1899）による。別表の地名は今日の表記に改めた。

設や名所旧跡を丹念に巡っている。その合間にアルプスの氷河登攀などが入っているのは運動好きの頼倫の希望だっただろうか。

ロンドン滞在 2 年目の春に頼倫は南方熊楠の案内で大英博物館を見学した。熊楠は当時大英博物館の資料整理を手伝っており、東洋部長ロバート・ダグラス Sir Robert Kennaway Douglas（1838 ～ 1913 年）とも懇意だった。頼倫とは前年 7 月ロンドンのレストランで開かれた紀州出身者による歓迎の集いで初めて会った[5]。案内の際に熊楠が説いた図書館設立の勧めは既にヨーロッパ大陸各地の博物館、図書館見学を重ねてきた頼倫の胸に強く響いたようだ。熊楠は 5 年後の 1902（明治 35）年、南葵文庫開庫を新聞報道で知って書く。彼の進言はその後の頼倫の人生に少なからぬ影響を与えた。少し長くなるが引用する。

ロンドンにて（1896）
鎌田栄吉（後列右）、斎藤勇見彦（前列）

> 徳川頼倫（家達公の実弟にて紀州侯の世子たり）龍動（ロンドン）に在し日、予をしばしば招き色々話しさせて聞かれたり。予も始めは固辞せしが、色々と請るるから往るなり。此人学問は嫌ひなりといふ。予思ふに指導其法を得ざるに出ることにして、総て貴人は愚昧の黎民よりは性質の優れたるものありと思ひ、諸処の文庫、博物館等へつれゆき、分りやすく大体の道理を条（すぢみち）立てて話せしに、中々呑み込みよく早さとりの人にて、一つかどの智識を得たりと悦ばれぬ。予言ひしは、欧州ただ見て雲烟過眼（うんえんかがん）で帰たりとて何の益なき夢かパノラマ見しと異なることなかるべし、所志を貫き一事を成すとか、終夜不眠して発明して世を益するとかは貴人のなすわざに適せず、一番此行を無にせぬことは書籍多く買ひ来り、人に見せてやり、其得たる話して聴きて自ら楽まれよと申せし。果して其通りに多々書籍を買ひ入れ、旧来の蔵書と共に飯倉町の邸に南葵文庫といふを公開し、旧臣の子弟を集め縦覧せしめ居る由新聞にて見たり。これは施餓鬼や奉捨などにまさること万々にて、実に貴人の相当の楽みなる上、自来旧臣の子弟より人物多く出ることは期して待つべし。
>
> （土岐法龍宛書簡　明治 35 年 5 月 3 日付[6]）

南方熊楠家訪問　1921 年 5 月 27 日
（南方熊楠顕彰館蔵）

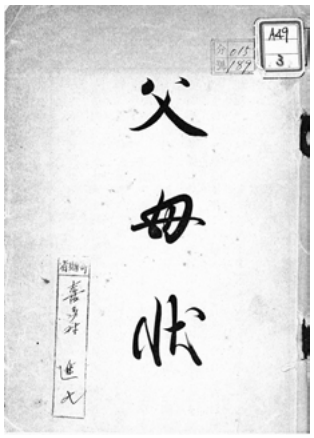
熊楠が頼倫に勧めたものは図書館設立ばかりではなかった。勉学が苦手という頼倫に向かって貴族階級に属

(5) 吉永武弘「徳川頼倫と南方熊楠の出会い ― ロンドンにおける紀州出身者の集いとその日付問題」『関西英学史研究』創刊号（2005.12）.
(6) 奥山直司、雲藤等、神田英昭編『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土岐法龍宛 1893-922』（藤原書店 , 2010.3）.

するものがするべきことは何か、何も学問的業績などにこだわることはない、その階級に属するもののみが出来る社会的実践を自らの悦びとして行うこと、それが貴族としてのありようだと率直に説く。「早さとりの人」頼倫は熊楠の言わんとすることをよく理解した。彼の文化運動推進の志はこのとき胚胎したといえるだろう。

南葵文庫

頼倫は旅中図書館設立の構想を周囲にしばしば語っていた。鎌田も斎藤も大賛成だったようだ。帰国後茂承の了解を得て「南葵文庫」を設立する。明治 31（1898）年 5 月 20 日のことである。名称は旧藩地南海道紀州に家紋の葵を合して作られた。その後、主幹斎藤勇見彦、顧問鎌田栄吉のもとで家伝来の書籍を整理、建物の竣工を以て開庫式を挙げたのが 4 年後のこと、その折に紀伊徳川家の祖頼宣が制定した教訓状『父母状』を刊行している。次いで勝海舟や依田学海など故人の蔵書や一般書を受入れ、建物を増築して一般公開に向けて開館したのが 1908（明治 41）年 10 月、翌 11 月に一般向け閲覧等の業務を開始した。この一般に公開された私立図書館は蔵書の質、運営方針、整理方法、また環境や調度品なども含めて揺籃期にあった当時の図書館界の注目を浴び──図書館のいわば「理想型」として憧憬の的となったといってもいい──、人びとは庫主頼倫に信頼と期待を寄せた。頼倫は公開時から主幹斎藤を日本図書館協会（1892 年設立、当時「日本文庫協会」）評議員に送り込み活動を支援、経済的な協力も惜しまなかった。1913（大正 2）年 6 月に和田萬吉（1865 ～ 1934 年、東京帝国大学図書館長、日本最初の図書館学者）、市島謙吉（1866 ～ 1944 年、日本図書館協会初代会長）らの慫慂により「協会」初代総裁に就任。その秋に大阪で開かれた全国図書館大会初日（10 月 23 日）に頼倫は就任挨拶を兼ねた演説をしている[7]。「人間一生にかかわる圖書館事業は實に愉快なる事業」と結ばれたこの演説は彼の見識をよく示している。要約すれば、（1）社会教育機関としての図書館の重要性の確認、（2）郷土資料蒐集の観点、（3）図書館をめぐる社会状況とその要請の理解、（4）図書館員育成、（5）博物館設置の提唱、である。（2）と（5）は次に述べる「史蹟名勝天然紀念物保存」運動と密接な関係をもつ。



『父母状』（足立四郎吉評釈）
南葵文庫　1902 年刊
（和歌山県立図書館蔵）

和田萬吉（1865-1934）

(7)「第八回大会席上に於る總裁の演説」『圖書館雑誌』19 号（1914.1.25）p.153-161.

史蹟名勝天然紀念物保存協会

1911（明治 44）年、頼倫は「史蹟名勝天然紀念物保存協会」を結成し、会長に就任、熱心な活動を展開した。文化財および自然保護を一括して訴えたこの運動は社会の急激な「近代化」によって取り残され忘れられ、破壊されがちな旧来の「善美」に対する焦りにも似た衝動に突き動かされたものである。頼倫は述べる。

> 史蹟、名勝、天然紀念物の此三方面に対しまして、我邦固有の善美、並に特長とも稱すべきところを尊重しまして、外国に無き物は最も十分に之を保護し、たとひある所の物に致しましても、将来に絶えんとする虞れのある物は之を保存致しまして、充分に是等の眞価値を発揮致したいといふので御座います。若しも此保護保存が、一日遅れると致しますれば、其善美を発揮致すことも、亦一日遅れまして、時には最早や取り返へしの出來ないやうなことも多々あらうと考へます。我邦固有の寶藏が、一日保存が遅れ数日保護が遅れた爲めに荒らされて、最早や回復が出來ぬといふやうなことは、実に殘念な事で御座います。それ故に最も熱心に此保護に努めなければならぬ筈で御座います。（史蹟名勝天然紀念物保存協会「第一回講演會開會の辞」大正 3.10.8）(8)

史蹟名勝天然紀念物保存協會趣意書

曾テ聞ク其墜ヲ愛スル者ハ其樹ヲ香クス、惟フニ我邦ハ國トシテ風ニ宇内ニ比類ナキ、金甌無缺ノ光輝アル特色ヲ有セリ言フマデモナク此特色ハ實ニ二千五百有餘年ノ史業ヨリ發揮シ來リタル者ニ外ナラズ、既往モ然リ、將來モ亦同シク吾等民族ノ性情ガ必ラス正史ノ美蹟ニ由リテ、永遠ニ養成セラル可キヲ疑ハズ、宮址ヤ城壘ヤ、古刹ヤ靈廟ヤ或ハ古戦場或ハ名君賢相ノ足跡或ハ忠孝節義ノ舊蹟或ハ碩學書窗ノ故蹟ナドニシテ今ニ尚ホ其形ヲ留メ其地亦今ニ尊ネ得ヘキモノ少シトセス、此等ノ史蹟既ニ全國ニ遍ネシ況ンヤ加フルニ寒熱雨露ニ亘レル世界珍異ノ花卉樹木ト竝ニ此種ノ禽獸魚介トニ富メルヲヤ況ンヤ

史蹟名勝天然記念物保存協会趣意書
第一回報告書　1911.11.25

『史蹟名勝天然紀念物』創刊号
史跡名勝天然紀念物保存協会　1914.9
頼倫題字　「祝福と冀望」寄稿

先述の講演における郷土資料蒐集と博物館設置への言及は史蹟名勝天然記念物保存運動（以下「保存運動」）と関連している。「保存運動」とはどのようなものであったか。

明治初年代にみられた「廃仏毀釈」は国宝級の仏堂伽藍の激越な破壊を引き起こしたが、国民国家としての制度整備が進むにつれて反動的にそれらの保護、保存の必要性が認識される。1897（明治 30）年 6 月の歴史的建造物保存のための「古社寺保存法」の公布はそれをよく示している。同法は「特ニ歴史ノ證徴又ハ美術ノ模範」たる建造物を国宝に指定するというもので、文化財保護法の端緒をなす。

上山春平はかつて日本社会の外来文化に対する反応として、(1) 外来文化をナイーブに受け入れる時期と、(2) 外と遮断して、それまで受け入れたものを内部的に消化してゆく時期の交互発現が歴史的に見られるとして「600 年周期と 20 年周期」説を提起しているが (9)、明

(8)『史蹟名勝天然紀念物保存協會第二回報告』(画報社 , 1914.11; 復刻版 不二出版 , 2003.6).
(9) 上山春平「日本文化の波動――その大波と小波」、梅棹忠夫 , 多田道太郎編『日本文化の構造』所収（講談社 , 1967.2）.

治期の交互発現「20 年周期」はその通りである。維新から「鹿鳴館の舞踏会」に象徴される明治 20 年代初頭までを（1）の受容期とすれば、「教育勅語」発布以降は（2）の「消化」時代といえるだろう。それは西川長夫の国民国家成立過程における「欧化」と「回帰」と言い換えることもできるが[10]、そうした流れのなかに「史蹟名勝天然紀念物保存協会」（以下「保存協会」）もある。

三好學（1862-1939）

1910（明治 43）年 7 月、頼倫は南葵文庫掌書・戸川安宅（やすいえ）（殘花、1855 ～ 1924 年）に東京市内及び近郊の史蹟老樹名木等の調査を命じた。同年 12 月、実兄徳川達孝とともに開いた調査報告会の名称は「史蹟史樹保存茶話会」である。いわゆる文化財（建造物、宝物）の保護は既に前述の「古社寺保存法」として法制化されていたから一旦除外されている。「保存協会」がその初段階において「史蹟」に加えて歴史的名木の保存を主眼としたのは、直接的には植物学者三好學（1862 ～ 1939 年、東京帝大教授）が当時伐採され放題だった名木史木の保護について貴族院議員三宅秀（ひいず）（1848 ～ 1938 年、医学博士・東京帝大名誉教授）に相談、三宅が頼倫に持ち掛け賛意を得たという経緯による。

三好は明治 20 年代にライプツィヒ大学で植物学を学び、産業革命後の近代化にともなう自然破壊に対してヨーロッパで展開されていた自然保護運動を知った。1906（明治 39）年 10 月、『東洋學藝雑誌』に「名木ノ伐滅并ニ其保存ノ必要」を発表し、日本国内の憂慮すべき状況とヨーロッパの自然保護運動を紹介している[11]。「保護運動」は建造物、宝物に限定した「古社寺保存法」に対して、文化財と自然を歴史的遺産として一体化して捉え、ともに保護するべき対象とした。「古社寺保存法」が美術品に限定することなく、そうした視点を多少とも考慮していれば、三好論文の 2 か月前に発布された勅令「神社寺院仏堂合併跡地ノ譲与ニ関スル件」も異なる性質のものになったであろう。「勅令」が奨励した「神社合祀」は自然環境と村落共同体の破壊を引き起こし、それに対して南方熊楠は猛烈な反対運動を展開している[12]。

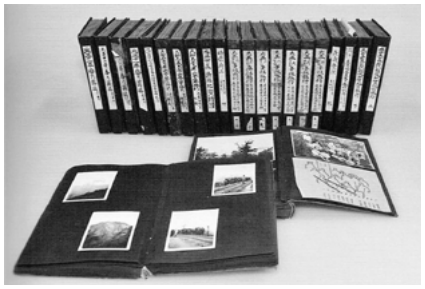
1911 年 3 月、「茶話会」の頼倫、達孝をはじめとする貴族院議員 4 名の発議者および 175 名の賛成者を以

(10) 西川長夫『増補 国境の越え方』（平凡社 , 2001.7）（平凡社ライブラリー 380）.
(11) 三好學は「天然記念物」を最初に用いたことでも知られるが、当該論文の中ではドイツ語 Naturdenkmaler を「自然紀念碑」と訳しており、初出は、翌年の「天然記念物保存の必要並に其保存策に就て」（『太陽』1907 年 1 月～ 2 月）。三好は 1911 年 1 月の南葵文庫学術講話会でも「日本紀念植物の保存に就て」を講演している。
(12) 柳田国男編纂による有名な『南方二書』がこの間の事情を語る。参照のこと。

て、貴族院に「史蹟及天然紀念物保存に関する建議案」が提出された。その後「史蹟天然紀念物保存研究会」を経て、12 月 7 日「史蹟名勝天然紀念物保存協会」が発足した。会長徳川頼倫。副会長徳川達孝、阪谷芳郎（1863 ～ 1941 年、当時東京市長）。本部を南葵文庫に置き、幹事に戸川とともに、東京地学協会（1879 年設立）から異動した橘井清五郎（1876 ～ 1947 年、のち南葵文庫掌書長、主幹）を配した。

「保存協会」は文化史蹟と自然保護を対象としていたから、そのための調査は大小取り混ぜて広範囲にわたった。平城京大極殿祉、博多の元寇史蹟から東京日本橋の迷子碑に至る史蹟調査、富士山、日光、吉野山などの景観調査（名勝）、千葉県における「光藻」「貉藻」の発見から桜川の桜（茨城）、芝公園、上野公園の枯木調査と大気汚染測定に至る調査が展開された。そのほとんどを頼倫は自らカメラ持参で巡っている [13]。日本図書館協会が毎年各地で開催する全国図書館大会にはほぼ毎回出席、基調講演、関係者との懇談等をこなす一方で、その前後に「保存協会」総裁として健脚に任せて調査に歩き回る。「保存協会」は学術研究に基づく保護実践を目的としているから政府や地方への働きかけも必須である。日露戦争後から内務省が中心になっておこした「地方改良運動」の推進団体「中央報徳会」の活動にも積極的に参加している。

「保存協会」は 1919（大正 8）年 3 月 8 日、第 41 回帝国議会に「史蹟名勝天然紀念物保存法案」を提出、同年 4 月 8 日「保存協会」の名称そのままに「史蹟名勝天然紀念物保存法」が発布され、国家規模での保存活動が保証されることになった。今日の文化財保護法、自然環境保全法の前身である。



頼倫の写真アルバム
（和歌山市立博物館蔵）

(13) 橘井清五郎、宮澤宗助「故徳川侯爵保存事業年表」『史蹟名勝天然紀念物』1 集 5 号（1926.5）.

徳川頼倫略年譜

明治5	1872		6.23(7.28) 田安徳川家八代当主徳川慶頼の六男として生れる。幼名藤之助。兄に家達(徳川宗家十六代)、達孝(田安徳川家九代当主)。
明治13	1880	8歳	2.10 紀州徳川家十四代当主徳川茂承の養嗣子となる。頼倫と改める。
明治18	1885	13歳	4. 学習院に入学。 津田うめ(梅子、当時華族女学校教師)に学ぶ。 翌年、アーサー・ロイドに英語を学ぶ。
明治21	1888	16歳	学習院中退。 山井重章(号清渓、通称幹六)に漢学を学ぶ。 翌年、山井が徳川邸内に開いた「養成塾」で旧藩臣子弟と起居をともにして勉学。
明治23	1890	18歳	9.14 茂承長女久子と結婚。 翌年より鎌田栄吉、教育掛となる。
明治25	1892	20歳	7. 北海道旅行。 8.16 長男頼貞誕生。
明治29	1896	24歳	3.8 英国ケンブリッジ大学での修学および欧米各国視察のため出立。 鎌田栄吉、斎藤勇見彦随行。 7. ロンドンの紀州出身者の歓迎会で南方熊楠に会う。10.29 三男治誕生。
明治30	1897	25歳	欧米各地を視察。 2.16 リヨンで陸軍軍楽隊長シャルル・ルルーと会見、ルルーより自作のピアノ曲を献呈される。 5.26 南方熊楠の案内で大英博物館を訪問、東洋部部長ロバート・ダグラスと会見。 9月末渡米。各地を巡り、バンクーバーより帰国の途につく。 11.21 横浜着。
明治31	1898	26歳	5.20 「南葵文庫」設置。蔵書の整理および建築にとりかかる(翌年落成)。
明治35	1902	30歳	4.12 南葵文庫開庫式挙行。徳川頼宣制定の教訓状『父母状』刊行(南葵文庫刊行物の最初)。
明治38	1905	33歳	5. 南葵文庫書庫、新館増設工事に着手。
明治39	1906	34歳	8.20 父茂承死去 8.21 家督相続 9.7 襲爵、貴族院議員 9.5 日露講和条約締結
明治41	1908	36歳	10.10 私立図書館「南葵文庫」開設(11.3より一般公開)。『南葵文庫概要』『蔵書目録』刊行。 11.25 第1回学術講演会「儒教と今後の道徳」(井上哲次郎)。
明治43	1910	38歳	7. 東京市内及びその近郊の史蹟老樹名木等の調査を開始。 12.7 有志による「史蹟史樹保存茶話会」を開く(於南葵文庫)。
明治44	1911	39歳	5. 南葵育英会創設。 3.4 貴族院に「史蹟及天然紀念物保存に関する建議書」を提出。 12. 史蹟名勝天然紀念物保存協会創立、会長に就任。
大正2	1913	41歳	3.1 三男治急逝。 6.15 日本図書館協会初代総裁に就任。 9.2 長男頼貞、英国留学のため出立。 10.23 第8回全国図書館大会出席、基調講演。
大正4	1915	43歳	1. 第十五銀行取締役就任。 4.25 頼貞の音楽堂建設計画(パイプオルガン設置を含む)について南葵文庫附属の講堂建設として承諾の旨、書簡。 12.7 頼貞帰国
大正5	1916	44歳	7.25 頼貞、公爵島津家息女為子と結婚。 この頃、南葵文庫に音楽資料室を置く。
大正6	1917	45歳	1.14 内務省「地方改良講習会」で講演「郷土愛護と地方改良」。 3.24 南葵文庫、講堂建設着工。
大正7	1918	46歳	5.25 聖徳太子一千三百年御忌奉賛会会長に就任。 10.27 南葵文庫附属大礼紀念館(南葵楽堂)開館。南葵文庫に音楽部設置。 12.27 嫡孫頼韶誕生
大正8	1919	47歳	2.4 外遊中の徳川家達に代って貴族院仮議長を務める。 4.10 史蹟名勝天然紀念物保存法公布、調査会委員を依嘱。 5. 台湾旅行。 8. 貴族院会派「研究会」筆頭常務委員に就任。
大正9	1920	48歳	4. 和歌浦の別邸双青寮竣工。 8. 北海道全島旅行。
大正10	1921	49歳	1.27 頼貞夫妻渡欧(〜11.3)。 4.16〜21 第16回全国図書館大会開催(奈良、和歌山)。 4.21 双青寮に参加者(180名)招待。 10.15 和歌山県中小学校教員のための廣胖会を組織。
大正11	1922	50歳	5. 東京地学協会会長に就任。 6.3 宮内省宗秩寮総裁に就任。 10.22 奈良大極殿址(平城京址)、史蹟指定。
大正12	1923	51歳	9.1 関東大地震。楽堂損壊。 12. 震災により焼失した東京帝国大学に南葵文庫寄贈を決定(音楽関係蔵書を除く)。 震災善後会協議員依嘱。
大正13	1924	52歳	5.5 代々木上原に転居。 7.4 東京帝大と文庫授受書を取り交わす。 南葵文庫閉鎖。 10.2 頼貞所管音楽関係蔵書のための「南葵楽堂図書部」設置。 11. 狭心症の発作、白浜で療養。
大正14	1925	53歳	4.1 帰京。宮内省に出仕。 5.19 死去。 5.26 告別式。 6.3 菩提寺長保寺に埋葬。戒名樹徳院殿麓城高節大居士。従二位勲一等。

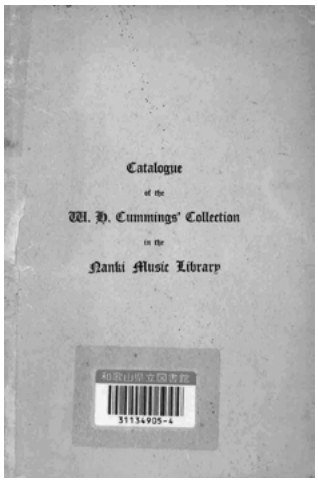
南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究
──その沿革とカミングス文庫「音楽書」目録──

佐々木勉

『南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録』を本紀要の巻末に収録した。

カミングス文庫については、1925（大正14）年にその唯一の目録となる *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*（以下『カミングス文庫カタログ（1925）』と略記）(1)が編纂されたが、刊行から長い年月が経過して入手が困難となり、さらに今日に至るおよそ100年の間に失われた資料もあり、現状を反映した最新の目録の作成が喫緊の課題となっていた。1970（昭和45）年にはカミングス文庫を含む、南葵音楽文庫の貴重書全体を対象とする大木コレクション･南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）*Catalogue of Rare Books and Notes*』(2)が編纂されたが、いずれの資料がカミングス文庫に属するものであるのか記載されていないため、これをカミングス文庫の目録とみることはできない。

カミングス文庫は、世界的にも貴重な資料を含む、南葵音楽文庫の中核に位置する重要な資料群である。主に楽譜と音楽書から構成され、それぞれに手写資料と刊本資料がある。数は多くはないが、音楽とは直接関係のない一般書も含まれている。総資料点数はおよそ700点、資料数（冊数）は400点を超える。今回の『カミングス文庫「音楽書」目録』が対象としたのは、それらから手写本および楽譜、そして一般書を除いた122点（101冊）の音楽書である。そして『カミングス文庫カタログ（1925）』に掲載されているが、現在所蔵を確認することができない音楽書14点の一覧も付した。



Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library **(Tokyo : Nanki Music Library, 1925) タイトルページ**
和歌山県立図書館蔵

（1）カミングス文庫購入の経緯

カミングス文庫と、それが南葵音楽文庫に収蔵された経緯については、これまでにいくつかの論考で明らかに

(1)*Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library* (Tokyo: Nanki Music Library, 1925). なお、1929 年には *Catalogue of the Nanki Music Library, Part 1 Musicology* (Nanki Music Library, 1929) が刊行されたが、カミングス文庫については、すでに 1925 年に目録が刊行されているという理由で除外された。また兼常清佐と辻荘一の共著による『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』（南葵音楽図書館 , 1926, 非売品）は、カミングス文庫の蔵書を網羅的に解説したものではない。

(2) 大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）*Catalogue of Rare Books and Notes*』（東京音楽文化センター , 1970, 非売品）.

されてきた[3]。収蔵の経緯を記した歴史的な資料である『カミング［ス］音樂文庫競賣残餘図書購入顚末』[4]も公開されている。購入から今日に至る沿革を概観しておこう。

晩年のカミングス
出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:William_Hayman_Cummings.jpg
（参照 2020.12.4）

南葵音楽文庫収蔵の「カミングス文庫」は、ヴィクトリア朝のイギリスを代表する音楽蔵書家の一人であるウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings（1831 ～ 1915年）の旧蔵書の一部である。カミングスは、少年期に教会の聖歌隊員として音楽教育を受け、オルガン奏者、歌手、教育者、研究者として活躍し、その間、早くも1850年頃から歴史的な音楽書や楽譜、手写楽譜、さらには絵画などの蒐集を始めている[5]。

The Musical Times 誌に掲載されたカミングスの紹介記事 "Mr. William H. Cummings"（1898年2月1日）[6]には、その蔵書の数はおよそ4500点、また『グローヴ音楽事典』第2版（1904年）における "Libraries and Collections of Music" の "Dulwich"[7]の項には「6000点余り」と記載されているが、最終的にカミングスが蒐集した蔵書の数は明らかではない。1910年に子息のノーマン・パーシー・カミングス Norman Percy Cummings（1868年～没年不明）によって蔵書目録が作られているが、刊行されたのは一部のみであり、全容を知ることはできない[8]。カミングスの死後、蔵書は競売にふされた。その際の競売目録[9]に記載されたロット数は1744である。ただし、ロットによっては

(3) 美山良夫 , 篠田大基「南葵音楽文庫所蔵資料コレクションの沿革」『Oxalis : 音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』1 号 (2007), p. 11-14.
美山良夫「南葵音楽文庫の特徴――コレクションの形成から」『南葵音楽文庫紀要』1 号 (2018), p. 9-18（特に p. 15-17）.
林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢　南葵音楽文庫の成立と展開――南葵文庫音楽部の頃」『南葵音楽文庫紀要』1 号 (2018), p. 19-28（特に p. 25-26）.
林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢　南葵音楽文庫の成立と展開（3）――南葵音楽図書館館長徳川頼貞・その形成」『南葵音楽文庫紀要』3 号 (2020), p. 15-22（特に p. 18-20）.
(4) 篠田大基 , 資料解題「カミング音樂文庫競賣残餘図書購入顚末」『南葵音楽文庫紀要』1 号 (2018), p. 88-91. なお、資料では「カミング」と表記されているが、これは「カミングス」の誤りである。そこで本論考では、「カミング［ス］」と補って表記した。
(5) 佐々木勉「カミングス文庫と W. H. カミングスをめぐって――W. H. カミングスとその生涯」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p. 35-42.
(6)"Mr. William H.Cummings", *The Musical Times*, vol. 39, no. 660 (Feb, 1898), p. 81-85.
(7)"Libraries and Collections of Music", *Grove's Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., vol. 2 (London: Macmillan, 1904), p. 702. "Dulwich"（ダリッジ）は、ロンドンのテムズ川南岸のカミングスの自宅があった地区。
(8)*The Music Library of Dr. William H. Cummings. Catalogued by Norman P. Cummings* (London, 1910). 佐々木 , 前掲書 , p. 35-36.
(9)*Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W.H.Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.* (London: Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917).

複数の資料が「抱き合わせ」になっていたため、ロット数は資料数とは必ずしも一致しない。

『カミング［ス］音樂文庫競賣残餘図書購入顚末』によると、南葵音楽文庫（当時は「南葵文庫音楽部」）にカミングスの蔵書を収蔵するきっかけとなったのは、1917（大正6）年5月に徳川頼貞（1892 ～ 1954年）が、『ミュージカル・オピニオン』誌上に競売会社サザビーズによる広告を見つけたことであった(10)。それは、カミングスの蔵書コレクションが同月、競売にふされることを告知していた。当時建築中の南葵楽堂の地下に音楽図書館を設けようと考えていた頼貞にとって、これは、まったく幸運なことであった。音楽図書館を設立するのには収蔵資料が不足しており、頼貞は、「図書を蒐集しなければならない」(11)状況にあったからである。

1913（大正2）年から15（大正4）年にかけてイギリスに留学した頼貞は、カミングスの経歴をはじめ、膨大な蔵書コレクションとその価値について知っていた可能性が高い(12)。頼貞は、「南葵文庫音楽部」の蔵書を充実させるために、ただちにケンブリッジ大学留学時代の恩師エドワード・ウッドル・ネイラー Edward Woodall Naylor（1867 ～ 1934年）博士に打電してコレクションの購入を依頼した(13)。しかし、その後届いた「音楽雑誌」には、すでに競売が終了したことを告げる記事が掲載されていた(14)。そこで頼貞は、再度ネ

592 Musical Opinion & Music Trade Review 478 July 1917

The Cummings Musical Library.

"The Cummings Musical Library" と題された記事
Musical Opinion And Music Trade Review, vol. 40, no. 478 (July 1917), p. 592.

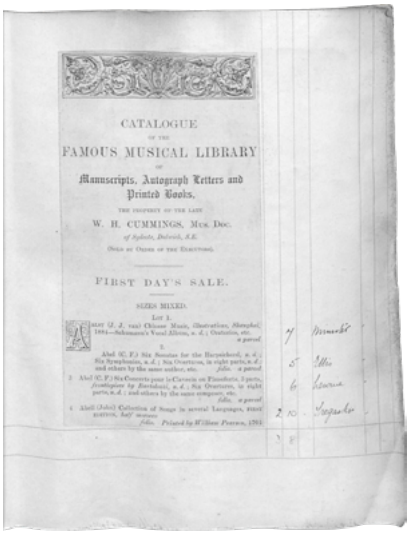
(10)『ミュージカル・オピニオン』誌とは、*Musical Opinion And Music Trade Review* (1877-) と考えられるが、頼貞が目にしたであろう告知広告は、現段階では確認できていない。

(11) 徳川頼貞『薈庭樂話』（春陽堂 ,1943）, p. 142; 復刻版 , 美山良夫校注（中央公論新社 , 2021）, p. 153.

(12) 頼貞は、イギリス留学中（ロンドン到着1913年9月末～離英1915年10月）に恩師ネイラー博士に促されて「イギリス音楽学会 The Musical Association」（現 Royal Musical Association）に入会し、定例研究会にも出席したことがあったと推測される。カミングスはその創設（1874 年）以来の会員であり、定例研究会ではしばしば司会を務め、精力的に活動していた。*Proceedings of the Musical Association, Forty-Fourth Session*, 1917-1918 (1919) に掲載された同学会の会員名簿には、師ネイラーの名とともに "Tokugawa, The Hon. Raitei (Tokyo, Japan)" の記載がある。なお、カミングスが、生前、最後に定例研究会で報告（"The Lord Chamberlain amd opera in London, 1700 to 1741"）を行ったのは、1914 年 1 月 20 日であった。そして 1915 年 6 月 15 日の研究会において、同年 6 月 6 日に他界したカミングスに向けた追悼演説が行われている（*Proceedings of the Musical Association, Forty-First Session*, 1914-1915 (1915), p. 141-143）。頼貞が、イギリスを離れたのは、上記のように同年 10 月であった。

(13)「其一部分にても当南葵文庫音楽部に収蔵せんことを欲せり、因て在英旧師博士ネラー氏に電文を発し、該文庫蔵書購入を依頼す」（筆者注：旧字は新字に改めた）。篠田 , 前掲書 , p. 89.

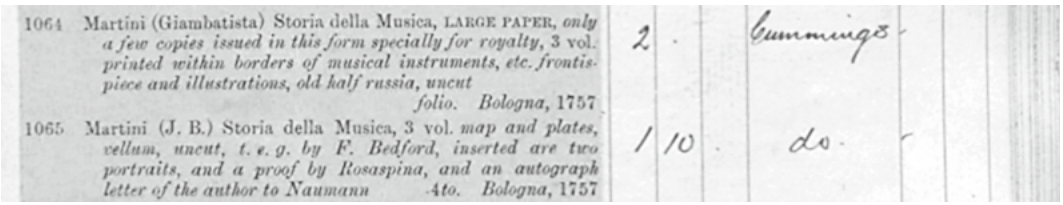
(14) この時、頼貞が目にした「音楽雑誌」の記事とは、"The Cummings Musical Library" と題された *Musical Opinion And Music Trade Review*, vol. 40, no. 478 (July, 1917), p. 592 誌上の報告であったと考えられる。記事には、1917 年 5 月 17 日から 24 日にかけて開催された競売についての簡単な報告と、出品された主要な書籍と楽譜の落札価格が記載されている。なお、後述するように、この記事には南葵音楽文庫に収蔵されたカミングスの旧蔵書も含まれている。


CATALOGUE
OF THE
FAMOUS MUSICAL LIBRARY
OF
Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books,
THE PROPERTY OF THE LATE
W. H. CUMMINGS, Mus. Doc.
of Sydcote, Dulwich, S.E.
SOLD BY ORDER OF THE EXECUTORS.
FIRST DAY'S SALE.
SERIES MIXED.
LOT 1.

Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W.H.Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E. Sold by Order of the Executors **(London: Dryden Press, 1917).**
大英図書館蔵（Hirsch 433）から競売第１日目の冒頭部分。カミングス旧蔵書の競売に際して作られた目録をページごとに切り取ってノートに貼り、落札者と価格が記入されている。

イラー博士に電報を送り、購入を断念する旨を伝えたが、8月下旬に博士から「競売終了とは雖も尚ほ有価値なる音楽作品、音楽参考資料等残余物多く且つ希望者に依れば売却すべき旨」（筆者注：旧字は新字に改めた）を伝える手紙が届いた(15)。交渉は博士の尽力によって順調に進み、購入したカミングスの旧蔵書は、大戦の戦火を避けて1920（大正9）年の初めに届けられた。

このカミングス文庫購入の「顛末」に見られる「競売終了とは雖も…残余物多く」との記述については、現在大英図書館が所蔵する、サザビーズ社が競売の当日、記録用に使用した目録(16)から裏付けることができる。そこには、手書きで落札者と落札価格が記載されている。この記録用目録では、競売において落札されなかったか、あるいは応札者がいなかったロットには、そのことを示すために "Cummings" と旧所有者の名が記されており、そうした蔵書の多くは、その後、実際に日本に届けられて南葵音楽文庫に収蔵されている。例えば、競売4日目（1917年5月22日）の記録にあるロット番号1064と1065に記載されたジャンバティスタ・マルティーニ Giambatista Martini（1706 ～ 84年）の *Storia della Musica*（Bologna, 1757）では、落札者が "Cummings" となっている(17)。


1064 Martini (Giambatista) Storia della Musica, LARGE PAPER, *only a few copies issued in this form specially for royalty*, 3 vol. *printed within borders of musical instruments, etc. frontispiece and illustrations, old half russia, uncut* *folio. Bologna*, 1757 — 2 Cummings
1065 Martini (J. B.) Storia della Musica, 3 vol. *map and plates, vellum, uncut, t. e. g. by F. Bedford, inserted are two portraits, and a proof by Rosaspina, and an autograph letter of the author to Naumann* 4to. *Bologna*, 1757 — 1 10 do.

Catalogue…W. H. Cummings, p. 101 からロット番号 1064 と 1065
なお、ロット番号 1065 には「同上」を示す "do" が書かれている。

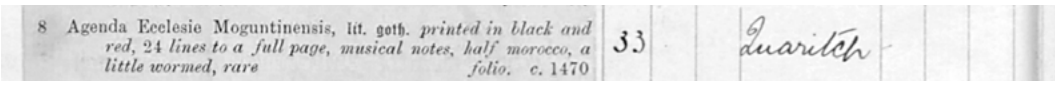
なお、この大英図書館所蔵の記録用目録を確認したところでは、落札者が "Cummings" と記入されたロットは、全1744ロット中140ロットに上る。

また、現在は南葵音楽文庫から失われているが、『カミングス文庫カタログ（1925）』に図版とともに記載された、世界的にも希少なインキュナブラである *Agenda ecclesie moguntinensis* (Straßburg, c. 1492) (18) は

(15) 篠田 , 前掲書 , p. 89.
(16)*Catalogue of the Famous Musical Library of Books, Manuscripts, Autograph Letters, Musical Scores, etc. The Property of the Late W.H.Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E. Sold by Order of the Executors* (London: Dryden Press, 1917). Hirsch 433.
(17) 前掲書 *Catalogue of the Famous Musical Library… W.H.Cummings* (Hirsch 433), p. 101. 競売では、通常、買い手が現れなかった場合に、旧所有者の名が記された。競売の方法や習慣については、ジョン・カーター『西洋書誌学入門』横山千晶訳（図書出版社 , 1994), p. 42-50 を参照。
(18)*Agenda ecclesie moguntinensis* (Straßburg, c. 1492) については、徳永聡子「南葵音楽文庫のインキュナブラ」『Oxalis：音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』1 号 (2007), p. 25-28 に詳しい。

Catalogue of the W.H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library (1925) に掲載された *Agenda ecclesie moguntinensis* (Straßburg, c. 1492) の画像

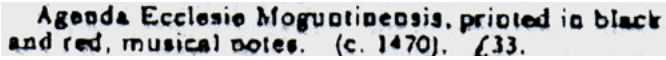
さらに興味深い。同書は、上記競売目録にロット番号8として記載され、"Quaritch" という落札者の名[19]と33ポンドという落札価格を確認できる。そして頼貞が



8 Agenda Ecclesie Moguntinensis, lit. goth. *printed in black and red, 24 lines to a full page, musical notes, half morocco, a little wormed, rare* folio. c. 1470 33 Quaritch

Catalogue…W. H. Cummings, p. 2 からロット番号 8

目にした、競売の終了を報告する「音楽雑誌」、すなわち *Musical Opinion And Music Trade Review* 誌上の記事 "The Cummings Library" にも、同書は記載され、価格も一致する。カミングスは、この典礼書を1点だけ所有しており、落札はされたものの、何らかの理由で落札者による支払いが行われずにカミングスの遺族の元に返却されたのであろう。



Agenda Ecclesie Moguntinensis, printed in black and red, musical notes. (c. 1470). £33.

Musical Opinion And Music Trade Review, vol. 40, no. 478 (July 1917), p. 592 から。

(2) カミングス文庫の到着

『カミングス文庫カタログ（1925)』の記述によると、日本に届けられたカミングス旧蔵の音楽書や楽譜などの音楽関連資料は、454点であった[20]。また、これらとは別に、音楽とは直接関係のない資料が39点あった。頼貞は、届いた資料を目の当たりにした時のことを次のように回想している[21]。

> 泰西音楽の研究には極めて興味深い資料が相当あって、私はこの文庫が南葵音楽図書館に備わり、日本の楽壇に多少の役に立つことが出来るようになったことを心から喜んだ。（旧字は新字に改めた）

すでに述べたように、1920（大正9）年の初めにカ

(19)"Quaritch"（クォーリッチ）は、バーナード・クォーリッチ Bernard Quaritch（1819～99 年）が 1847 年に創業し、今日に続く古書店「バーナード・クォーリッチ社 Bernard Quaritch Ltd」と考えられる。
https://www.quaritch.com/（参照 2020.12.15）.
(20) 前掲書 *Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library*, Preface. なお、『カミングス文庫カタログ（1925)』に記載された「454 点」という数は、基本的に音楽資料の冊数であり、中には複数の音楽書や楽譜が合本の形で製本されたものもあり、実際の音楽理論書や楽譜の数はこれを大きく上回る。
(21) 徳川 , 前掲書 , p. 143-144; 復刻版 , 前掲書 , p. 154.

ミングスの旧蔵書は日本に到着し、ただちにその調査や分析が開始され、早くも同年10月2日から閲覧に供された[22]。『南葵文庫報告』第12（大正9年10月）の「藏書報告」[23]に、以下のように記されている。

> 本文庫［南葵文庫］が購入せし図書は概ね十七世紀世紀十八世紀に刊行せる寺院音楽に関する音楽祈祷歌等多く、その数四百七十四冊にして内写本并びに自筆楽譜稿九十三冊あり、此等集書は既に納庫し、専門家を聘し、整理を終え、十月二日より公開し、音楽研究家および愛好家の為め、其の調査研究の一助の資となさんことを期す。（句読点、ルビ、［　］による補足は筆者。旧字は新字に改めた）

調査や分析を担当した「専門家」とは、新進気鋭の音楽研究者であった兼常清佐（1885 ～ 1957年）と辻荘一（1895 ～ 1987年）である[24]。彼らの研究成果は、やがて上記の『カミングス文庫カタログ（1925）』と、1926年に刊行された両名の共著による『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』[25]にまとめられた。兼常清佐は「音樂に關する著書及び器樂の譜について」を、辻荘一は「聲樂曲譜に就て」をそれぞれ執筆している。兼常清佐は、その中で次のように述べて、カミングス文庫が日本で公開される意義を強調した[26]。

> この文庫の価値は或る博物館の持つ価値であります。この文庫の日本への将来は、要するに私共がこの地に在っては決して見る事ができない大英博物館の一部分を、私共に紹介したという事であります。それが日本の学会と音楽界に貢献する処は必ず大なるものであろうと思います。（句読点、ルビは筆者。旧字は新字に改めた）

さらに、辻荘一は、1928（昭和3）年にカミングス文庫に含まれていたジョージ・フレデリク・ヘンデル George Frederic Handel（1685 ～ 1759年）の《グロリア・パトリ *Gloria Patri*》の筆写楽譜（自筆楽譜は

---

(22) カミングス文庫（カミングス旧蔵書）到着後の整理の経過などについては、以下の論考に詳しい。
美山良夫「南葵音楽文庫の特徴と魅力　承前──手沢本の世界」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p. 7-14.
(23)『南葵文庫報告』第 12 (1920), p.6.
(24)『南葵音樂事業部摘要』第 1 (1929), p. 36.
(25) 兼常 , 辻 , 前掲書 .
(26) 兼常「音樂に關する著書及び器樂の譜について」『南葵音樂圖書館所藏カミングス文庫に就て』, p.10.

1860年に焼失）による校訂楽譜を出版した[27]。これは、我が国最初の厳密な資料批判に基づく校訂報告を伴う楽譜出版であり、研究機関としての南葵音楽図書館の水準の高さを物語る記念碑的な業績であった。

（3）苦難を乗り越えて

南葵文庫は、1924（大正13）年7月に関東大震災の発生（1923年9月1日）によって甚大な被害をこうむった東京帝国大学に蔵書を寄贈して閉鎖された。しかし「音楽部」は、南葵楽堂とオルガンは被災、損壊したものの活動を継続し、「南葵楽堂図書部」を経て翌25（大正14）年10月に設立された「南葵音楽事業部」に付属する「南葵音楽図書館」として活動を続けた[28]。その後、南葵音楽図書館は、徳川家の財政悪化によって1932（昭和7）年11月末に閉館となり、翌33（昭和8）年3月、その蔵書、すなわち南葵音楽文庫は、カミングス文庫を含めて慶應義塾図書館に寄託され、4月から公開された。

慶應義塾図書館において、南葵音楽文庫は、大戦末期の1945（昭和20）年まで12年間公開された。しかし寄託契約は同年4月に解除され、5月に同図書館が罹災したこともあって、文庫の蔵書は6月に疎開のために「千葉県下の呉服屋の倉庫」に搬出された[29]。一方、1942（昭和17）年頃のこととされるが、すでに蔵書の所有権は、徳川家から債権者であった実業家の大木九兵衛（生年不明～ 1996年）に渡っていた[30]。

---

(27)*Gloria Patri, composed by Handel, Full Score edited from The Unique Manuscript Copy in the posession of Marquis Tokugawa of Kishu with an Introduction and Notes by Shoichi Tsuji, Nanki Music Library* (Nanki Music Library, 1928). 及び同書の日本語版『ヘンデル グロリア・パトリ 総譜表』辻荘一編（南葵音楽図書館 , 1928）.
篠田大基「南葵音楽図書館の出版活動」『南葵音楽文庫紀要』1 号 (2018), p. 29-40 参照。
(28) 林淑姫「ミュージック･ライブラリーの夢　南葵音楽文庫の成立と展開 (2)」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p. 15-24 及び、美山 , 前掲「南葵音楽文庫の特徴と魅力　承前――手沢本の世界」, p. 7 参照。
また、1924（大正 13）年以降の南葵音楽文庫については、下記に詳しい。
南家知子「音楽ライブラリー紹介　南葵音楽文庫」『塔』8 号 (1973), p. 7-11.
有田芳子、後藤多恵子「Document Series 1 南葵音楽文庫」『塔』18 号 (1978), p. 2-76.
正木光江「大木コレクション・南葵文庫――現在の状況および中断されている RISM AII シリーズへの協力作業について」『IAML Newsletter』4 号 (1996).
松下鈞「南葵音楽文庫の現状」『MLAJ Newsletter』19 巻 1 号 , 通巻 92 号 (1998), p. 1-4.
松下鈞「南葵音楽文庫の現状」『IAML Newsletter』9 号 (1998).
松下鈞 , 和歌山県立図書館南葵音楽文庫アカデミー（和歌山県立図書館講義研修室 , 2021 年 12 月 4 日）における配布資料 .
(29) 慶應義塾大学三田情報センター編『慶應義塾図書館史』1972, p. 180. https://www.lib.keio.ac.jp/about/publication/history.html（参照 2021. 12.20）.
(30) 有田 , 後藤 , 前掲書 , p. 44. 及び松下 , 前掲配布資料 .

その後、南葵音楽文庫は、およそ20年にわって公開されることはなく、最も困難な時代を送ることとなる。東京都への売却、米軍やアメリカ議会図書館 Library of Congress への売却、疎開途中に盗難にあった一部の蔵書が古書店で販売されているといった内容を報じる記事が、1945（昭和20）年から60（昭和35）年代前半にかけて新聞や雑誌などに散見される。この間、南葵音楽文庫の蔵書は、福島県白河市の大木九兵衛生家、アメリカ合衆国メリーランド州ボルチモアの倉庫、神奈川県小田原市の大木九兵衛私邸と場所を移しながら保管されたようであるが、不明な点が多い。詳細については、有田芳子と後藤多恵子両氏による南葵音楽文庫関連の新聞記事などの資料集を参照してほしい(31)。

1966（昭和41）年から翌67（昭和42）年にかけて、南葵音楽文庫は「再発見」された(32)。きっかけとなったのは、ドイツ、ゲッティンゲンのバッハ研究所の所長であった世界的なバッハ研究者 アルフレッド・デュル Alfred Dürr 博士（1918 ～ 2011年）からのバッハのある自筆楽譜についての所在調査依頼（1966年9月）である。博士は、それが南葵音楽文庫のカミングス文庫にあると考えていた。調査は、大木九兵衛の了解と読売新聞社の協力の下で、当時、南葵音楽文庫の蔵書が保管されていた三菱倉庫で行われた。この時、目的の楽譜は発見されなかったが、大きな副産物があった。カミングス文庫が、一部は失われていたが、日本にほぼ完全な形で保存されていたことが確認されたのである(33)。

カミングス文庫の「再発見」は驚きをもって迎えられ、国立音楽大学で整理・分類が行われる一方、1967（昭和42）年3月から4月には、読売新聞社が主催し、日本音楽学会が後援する「南葵音楽文庫特別公開」（東京展、上野松坂屋 3月14 ～ 23日、大阪展、天満橋松坂屋 4月18 ～ 27日）が開催された。この展覧会には、カミングス文庫を中心に南葵音楽文庫の貴重書500点余りが展示された(34)。

南葵音楽文庫は、日本音楽学会からの働きかけもあり、展覧会を機に公開に向けて動き出した。閉会後の6月、

(31) 有田 , 後藤 , 前掲書 , p. 45-62.

(32)「再発見」の顛末については、有田 , 後藤 , 前掲書 , p. 63-66.

(33)1970 年 5 月から南葵音楽文庫の主任研究司書を務めた正木光江氏は、前掲「大木コレクション・南葵文庫」（1996）において、1977 年時点での南葵音楽文庫及びカミングス文庫の状況について、次のように報告している。「この間の再調査の結果、残存する旧南葵音楽文庫の資料の総数は、40 年前の総数の 1/3 にあたる約 10,000 点であり、カミングス・コレクションの紛失資料は筆写楽譜 8 点、音楽書 12 点、音楽以外の文献 11 点で、ヘンデルの《グロリア・パトリ》の筆写楽譜などを除いて、ほぼ完全な状態で保管されていたことが判明した。」

(34)『南葵音楽文庫特別公開』展示目録（読売新聞社 , 1967）.

蔵書は日本近代文学館（東京都目黒区駒場）に搬入され、調査、研究が続けられた。1968（昭和43）年には、大木九兵衛から読売新聞社の正力松太郎社主に文庫の保存と公開が託され、翌69（昭和44）年、大木九兵衛と読売新聞社との間でそれを目的に「（財団法人）東京音楽文化センター」の設立が合意（同年10月末、文化庁認可）されている(35)。この間、日本近代文学館では、文庫資料の拡充が図られる一方、カミングス文庫をはじめ、旧蔵資料中の貴重資料およそ600点のマイクロフィルム化(36)が行われ、そして上記の大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）*Catalogue of Rare Books and Notes*』（1970）が編纂された。

しかし、東京音楽文化センター設立の計画は、「再発見」から10年経過した1977（昭和52）年に頓挫し、財団は解散されて文庫の閲覧は中断された。この時、文庫の蔵書（所有権）はすでに財団法人読売日本交響楽団に移管されていたが、カミングス文庫を含む、旧蔵資料は、神奈川県小田原市の大木九兵衛私邸に借り出された。それが読売日本交響楽団に返還されたのは、1999（平成11）年11月のことであった(37)。再び、南葵音楽文庫は非公開となり、倉庫（読売江東ビル）で眠りに就いた。

2016（平成28）年、カミングス文庫を含む南葵音楽文庫は、目覚めることになった。同年12月2日、読売日本交響楽団と徳川家ゆかりの和歌山県の間で南葵音楽文庫の寄託契約が正式に結ばれ、公開と利用に道が開かれたのである。その数日前には、和歌山県に東京から梱包されたカミングス文庫をはじめとする南葵音楽文庫の蔵書が届けられた。カミングス文庫の手写楽譜を含む、ベートーヴェンの手写楽譜などの手写資料が和歌山県立博物館、それ以外のカミングス文庫の印刷楽譜や音楽書を含む南葵音楽文庫の旧蔵資料、そして日本近代文学館時代に集められた新蔵資料は同県立図書館に収蔵された。2017（平成29）年12月には、およそ2ヶ月にわたって和歌山県立博物館を会場に貴重資料100点余りの企画展「南葵音楽文庫　音楽の殿様・頼貞の楽譜コレクション」が開催され、翌18年2月からは資料の整理、分析作業と並行して公開され、現在にいたっている(38)。

和歌山県立図書館書庫内のカミングス文庫

和歌山県立図書館南葵音楽文庫閲覧室

(35) 有田 , 後藤 , 前掲書 , p. 69-72.
(36) 篠田大基「南葵音楽文庫のマイクロフィルム」『Oxalis：音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』1 号 (2007), p. 46.
現在マイクロフィルムは、デジタル化され、慶應義塾大学デジアルメディア・コンテンツ統合研究センター（DMC）の「デジタル南葵楽堂」（http://note.dmc.keio.ac.jp/music-library/nanki/）で公開されている。
(37) 松下 , 前掲配布資料 .
(38) 美山良夫「南葵音楽文庫の和歌山県寄託を巡って」『IAML Newsletter』60 号 (2017).

『南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録』について(39)

本紀要の巻末に収録した『南葵音楽文庫収蔵カミングス文庫「音楽書」目録』は、すでに述べたように南葵音楽文庫が現在収蔵するカミングス文庫のうち、印刷出版された音楽書の目録である。音楽理論書、教則本、オペラなどの音楽作品のリブレット、音楽辞典（事典）、典礼書などが含まれる。

リストの記述は、著者（あるいは編者）、タイトル、出版地および出版社、刊年、ページ数およびサイズと判型、注記1（旧蔵者の蔵書票やサインなどの来歴関連情報）および2（内容と合本情報）、資料記号（請求記号）、旧資料記号、カミングス旧蔵コレクションの競売目録（ロット）番号からなる。

各資料の掲載順は、著者、編者の、著者などが記載されていない場合には、タイトルのアルファベット順による。個別に刊行されたことが明らかな複数の資料が一つに製本され、合本になっている場合、それらは個別に掲載し、「注記2」に合本されている他の資料を示した。著者名については、原則的に『ニューグローヴ世界音楽大事典 *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*』（2001）に従い、生没年を付した。タイトルは、全文を転記するように努めた。資料のサイズは実測によっており、最大値を示したが、誤差が大きいことをあらかじめ明記しておく。サイズには、『カミングス文庫カタログ（1925）』に記載されている判型を付記した。資料記号（請求記号）は、現在も使用されていることから、大木コレクション・南葵音楽文庫編『蔵書目録（貴重資料）*Catalogue of Rare Books and Notes*』（1970）に従った。旧資料記号とは、『カミングス文庫カタログ（1925）』における番号である(40)。

また目録の最後には、『カミングス文庫カタログ（1925）』に記載はあるが、現在所在が確認できない資料の一覧を付した。

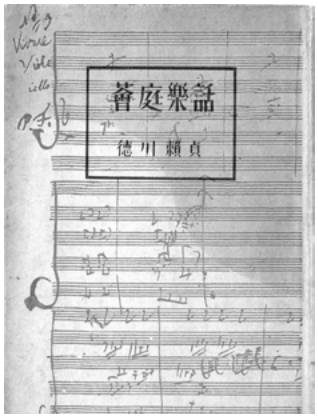
---

(39) 本目録の作成にあたっては、林淑姫氏と長谷川由美子氏（元国立音楽大学附属図書館司書）から多大な協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

(40)『カミングス文庫カタログ（1925）』における図書の分類については、下記に詳しい。
林淑姫「ミュージック・ライブラリーの夢　南葵音楽文庫の成立と展開（2）」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p. 15-24.

高野武郎
──徳川頼貞『薔庭樂話』の口述筆記者──

泉　健



『薔庭樂話』市販版カバー

徳川頼貞（1892（明治25）～ 1954（昭和29）年）は49歳の1941年に、音楽を中心とする半生の記『薔庭樂話』を著した（私家版・非公刊）。その2年後には春陽堂書店からこれを出版している（市販版）。市販版は太平洋戦争中に出版されたために種々の制約があり、私家版よりも頁数が約40頁少ない(1)。この『薔庭樂話』は、日本における明治以降の西洋音楽受容史を研究するための歴史的資料として重要であり、また1910年代～1920年代の欧米の楽壇の様子も知ることができる貴重な書籍である。本稿は、この書籍の口述筆記者である高野武郎が、種々の芸術活動をしながら次第に音楽の世界に関わっていき、徳川頼貞の口述筆記者となっていった過程を、時系列に沿って辿っていったものである。

1. 様々な人物との出会い

『薔庭樂話』は徳川頼貞が自分で筆を執って書いたものではなく、彼が口述したものを高野武郎という人物が記述したものである。この人物に関する資料はきわめて少ないが、『版画家名覧──明治末・大正・昭和』によると、高野武郎は「1920年代に音楽・演劇・文学・絵画などで活動していた痕跡を残すが、生没年など詳細は不明」と紹介されている(2)。

これを手がかりに種々の文献を探してみると、1916（大正5）年から第二次世界大戦終了の1945（昭和20）年頃までの彼の行動が、様々な人物・団体との関わりの中から浮かび上がってくる。すなわち山田耕筰、三木露風、演出家の土方与志、日本の象徴詩を確立したとされる竹内勝太郎、ヴァイオリニスト・指揮者・作曲家の貴志康一、琴古流尺八の演奏家吉田清風、オンド・マルトノの発明者モリス・マルトノ、文化の国際交流を目的として設立された国際文化振興会などである。以下、時系列に沿ってこれらの人物･団体との関わりを見てみよう。

2. 1916 ～ 20（大正5 ～ 9）年；山田耕筰・土方与志

山田耕筰（1886 ～ 1965年）は1916（大正5）年

(1)林淑姫,篠田大基「音楽とともに──徳川頼貞著『薔庭樂話』『頼貞随想』」『南葵音楽文庫紀要』 1号(2018), p. 84-85.
(2)「高野武郎（たかの･たけお）」樋口良一編『版画家名覧──明治末･大正･昭和』(山田書店版画部, 1985), p. 69.

1916 年頃の山田耕筰と山田菊尾
後藤暢子他編『山田耕筰著作全集 3』（岩波書店 , 2001）口絵

模型舞台展覧会の新聞広告
資生堂企業文化部編『創ってきたもの 伝えてゆくもの――資生堂文化の 120 年』（求龍堂 , 1993), p. 300.

資生堂ギャラリー 1928（昭和 3）年
資生堂企業文化部編 , 前掲書 , p. 301.

に村上菊尾と再婚後、東京の青山学院の側に住んでいた。彼の家は若い芸術家たちの集まる場所になっており、「成田為三、高野武郎二人は、私の家に寝とまりしていた。近衛秀麿は、その頃から私の門に学び出したのだ」(3)。「洋画家の卵だった高野武郎などは、芸術に理解のない父に追われて、ある夜半飛び込んで来、そのまま家の人となってしまった」(4)と山田は回想している。これ以降、高野は山田耕筰を通して土方与志や三木露風と知り合うようになったようである。

山田耕筰は1919(大正8)年に、M. メーテルリンク原作の「タンタジールの死」の上演（1919年12月）のために、同名の舞台音楽を作曲している。これは学習院の演劇グループ友達会による上演のための作品であった。同会の機関誌『TOMODACHI』第3号（1920年2月）は「タンタヂールの死　試演記念特別号」となっており、目次を見ると、土方与志「タンタヂールの死」、山田耕筰「「タンタヂールの死」と私の音樂」、高野武郎「「タンタヂールの死」舞臺面を見て」、楽譜：山田耕筰作曲「タンタヂールの死」などが掲載されている(5)。

演出家の土方与志（1898 ～ 1959年）は、築地小劇場を拠点に新劇運動を興した人物であるが、彼は学習院高等科在学中の1916（大正5）年に、近衛秀麿などと演劇グループ友達座（後の友達会）を結成している。土方は、当初音楽を担当していた近衛から山田耕筰を紹介され、以後この「タンタジールの死」や日本楽劇協会で山田と一緒に仕事をするようになった。彼は学習院を卒業後、東京帝国大学国文科に進学し、自宅に模型舞台研究所を作ってさらに演劇の研究を行っている。その研究成果発表の目的で、1920（大正9）年4月10日～ 15日、東京の資生堂ギャラリーで「模型舞台展覧会」を開催した(6)。この時、高野武郎は「山田耕筰作曲のバレエ「ケンタワーとニンフ」の舞台場面を制作・発表」している(7)。これは全5曲からなるピアノのための舞踊詩「若きケンタウル」（1915年作曲）(8)の舞台場面のことであろう。なおこの資生堂ギャラリーでは、高野は1920年

(3) 山田耕筰「未演奏のインテルメッツィ」初出『月刊樂譜』19 巻 10 号 . 後藤暢子他編『山田耕筰著作全集 3』(岩波書店 , 2001), p. 511. 表記は新字体に直した。
(4) 山田耕筰「山田耕筰」日本経済新聞社編『私の履歴書　文化人 10』(日本経済新聞社 , 1984), p. 22. 初出 : 日本経済新聞 , 1956 年 6 月＊日 .
(5) 紅野敏郎「「白樺」と「演劇」――「白樺演劇社」と「友達座」をめぐって」『學術研究』（早稲田大学）18 号 (1969), p. 100.
(6) 資生堂企業文化部編『創ってきたもの 伝えてゆくもの――資生堂文化の 120 年』(求龍堂 , 1993), p. 300-301, 420.
(7) 樋口良一編 , 前掲書 , p. 69.
(8) 遠山音楽財団付属図書館編『山田耕筰作品資料目録』(遠山音楽財団付属図書館 , 1984), p. 318.

6月に東京美術学校（現東京藝術大学）教授の岡田三郎助などの紹介を得て、初の個展となる「高野武郎氏洋画発表会」（9日～ 13日）を開催している[9]。

1920年には高野と山田耕筰との関係が他にも二つみられる。一つは9月26日、大阪の中央公会堂での山田耕筰指揮管弦楽演奏会である。これは9月25日に東京神田青年会館で行われた演奏会を、翌日大阪で行ったものである。これには次のような高野武郎の提言があった。「相当の練習をつみ日数費用のかかったものを東京のみで止むのも惜しく、こういうものを東京以上に切望する関西へ持ってゆきたい」[10]というものである。今一つは12月の日本楽劇協会第1回公演である。この時の解説冊子『デビュッスィーとヴァーグナー』を装丁したのが高野武郎であった[11]。

3. 1921 ～ 26（大正10 ～ 15）年；三木露風

この1920年には、詩人の三木露風（1889 ～ 1964年）が野口雨情、山田耕筰、竹内勝太郎、二宮典美などとともに「牧神会」を結成している[12]。三木は1920年5月から1924年6月までの4年間を、北海道函館の近郊にあるトラピスト修道院で過ごし、文学講師を務めており、ここには山田耕筰や高野武郎も遊びに来ていた。高野の人柄をよく伝えている文章があるので、少し長くなるが引用しておきたい。

三木露風 1962（昭和 37）年
三木露風『三木露風全集』3 巻，（日本図書センター , 1974）口絵

「東京から色んな人が遊びに来て泊って行った。山田耕筰も十日位泊った。そこで「野茨」を作曲した。高野武郎も来て半月程泊った。彼は耕筰のところへ出入りしていたので、露風が雑司谷の亀原にいた頃、一、二度遊びに来たことがあったが、ぶらりとトラピストへ来て絵を描いていた。牧場で夕立に逢い濡れて帰り、どうして傘を持って来てくれなかったかと伸子に怒ったりする程、我儘であった、彼が帰ってから間もなく山田耕筰が来遊したが、耕筰が上野駅を立つ時、高野武郎は見送りに来て菓子箱一つを託した。それで世話になった義理を済ませた」[13]。また森田実歳は三木露風のノートを研究する中で、山田耕筰の研究家である後藤暢子の教示によるとして、高野武郎が当時「耕筰のマネージャー兼付き人であったらしい」[14]と述べている。

(9)樋口良一編, 前掲書, p. 69.
(10)富士正晴「竹内勝太郎の形成（七）」『文學』（岩波書店）37巻, 7月号 (1969), p. 116.
(11)毛利眞人『貴志康──永遠の青年音楽家』(国書刊行会, 2006), p. 371.
(12)森田実歳『三木露風研究──象徴と宗教』(明治書院, 1999), p. 523.
(13)安部宙之介『続・三木露風研究』(日本図書センター , 1983), p. 52.
(14)森田, 前掲書, p. 425.

三木露風『トラピスト歌集』
（アルス , 1926）新潟大学蔵

高野武郎制作の絵画
『トラピスト歌集』口絵 , 新潟大学蔵

ベルリン・フィルを指揮する貴志康一 1934（昭和 9）年
毛利眞人『貴志康一　永遠の青年音楽家』（国書刊行会 , 2006）口絵⑤

左から貴志康一、P. ヒンデミット
毛利眞人 , 前掲書 , p. 136.

1921（大正10）年に高野武郎は、三木露風などが発行していた文芸雑誌『牧神』の第7号に表紙絵を木版（あるいはリノカット）で制作している[15]。また三木は1926（大正15）年6月15日に、トラピスト修道院時代に作った短歌755首を集めて『トラピスト歌集』をアルスから出版した。この本の口絵に高野武郎は牛の絵を描いている。明記はないがこの本の装丁も高野によるもののようである[16]。

この前年の1925年7月6日～ 8日には、高野は東京銀座の資生堂ギャラリーで「高野武郎氏素描展」を開催しており[17]、大正時代の高野には、版画や素描や絵画や舞台場面設定の分野での仕事が多い。

4. 1926 ～ 32（昭和1 ～ 7）年

(1) 貴志康一

昭和の時代に入ると、高野には音楽関係の仕事が増えてくる。1925年3月に、社団法人東京放送局（JOAK）による日本最初のラジオ放送が開始され、高野は短期間であったが、この大正時代の末期に「JOAKの嘱託として洋楽放送に関わ」っていた[18]。また彼は「欧米での豊富な経験を生かして東京音楽同好会を主宰」していた[19]。

それから高野には、ヴァイオリニスト・指揮者・作曲家の貴志康一（1909 ～ 37年）との関わりがある。貴志は、ジュネーブ音楽院（1926 ～ 28（昭和1 ～ 3）年）とベルリン高等音楽学校（1928 ～ 29年）で学んだ後、1929（昭和4）年に帰国し東京と大阪でリサイタルを行っている[20]。高野はその時に貴志のマネージャーとなっており、高野が主宰していた東京音楽同好会が、貴志のすべてのコンサートの主催者となっていた[21]。1929年9月の帰国から1930年7月のベルリンへの再出発までの貴志の演奏会の様子は、高野との関わりを含めて毛利の伝記に詳しい[22]。貴志はその後一時帰国をはさみながら、1930 ～ 35（昭和5 ～ 10）年の2度目のベルリンでは、演劇や映画などにも興味を持ち、P. ヒンデミットから映画音楽の講義も受けている[23]。しかし1935年に帰国し、指揮者としても活躍し始めてまも

(15) 樋口編 , 前掲書 , p. 69.
(16) 三木露風『三木露風全集』3 巻 , (日本図書センター , 1974), p. 1051.
(17) 樋口編 , 前掲書 , p. 69.
(18) 毛利 , 前掲書 , p. 371.
(19) 毛利 , 前掲書 .
(20) 富樫康『日本の作曲家』(音楽之友社 , 1956), p. 130-131.
(21) 毛利 , 前掲書 , p. 113.
(22) 毛利 , 前掲書 , p. 110-127.
(23) 毛利 , 前掲書 , p. 134-136.

なく、1937年に病のために夭逝している。

(2) 電子楽器オンド・マルトノ[24]

高野は、貴志康一が1930（昭和5）年7月にベルリンに出発した頃に渡欧し、パリには比較的長く滞在していたようである。そして翌1931年2月11日に帰国している。このパリ滞在中に、彼は電子楽器のオンド・マルトノの発明者であるモリス・マルトノ（1898 ～ 1980年）宅を「8月頃」訪問し[25]、オンド・マルトノの演奏を聴いた[26]。まず妹のジネット・マルトノがピアノ伴奏をし、M. マルトノがオンド・マルトノで、F. クライスラーの《愛の悲しみ》やC. フランクの《ヴァイオリン・ソナタ》を演奏した。その後、高野もM. マルトノから教わりながらオンド・マルトノを弾いている[27]。

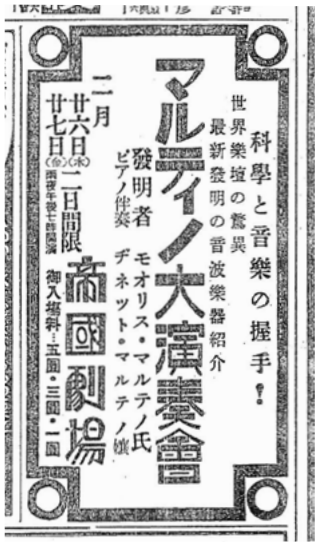
マルトノ兄妹は、米国プロ・ムジカ協会の招きで米国とホノルルで演奏旅行をした後、同協会東京支部代表を務めていた高野の紹介で日本にも来ている。到着は高野の帰国の5日後の2月16日であり、マルトノ兄妹は日本各所でオンド・マルトノの演奏会を開いている。すなわち2月21日から3月9日にかけて、日仏会館、帝国劇場、皇族の前での御前演奏、JOAK東京放送局の番組に出演、大阪中之島の朝日会館、京都市公会堂などでの演奏である[28]。

両大戦間には、テレミン（発明1920年）やトラウトニウム（同1924年）やオンド・マルトノ（同1928年）などの電子楽器が誕生しているが、実はマルトノ兄妹が来日した1931年には、楽器テレミンも輸入されていた。時期はマルトノ兄妹の来日の直前、1931年の1月であり、輸入したのは東京電気株式会社（現東芝）であった。このように「1931年は日本の電鳴楽器受容史の中でも特異な年」[29]であったと言える。

両大戦間の1930年代初頭の日本、明治維新から60年あまり経過した時代、作曲の分野では先駆的な試みがいくつかあったものの、演奏の分野では、日本はまだ古典

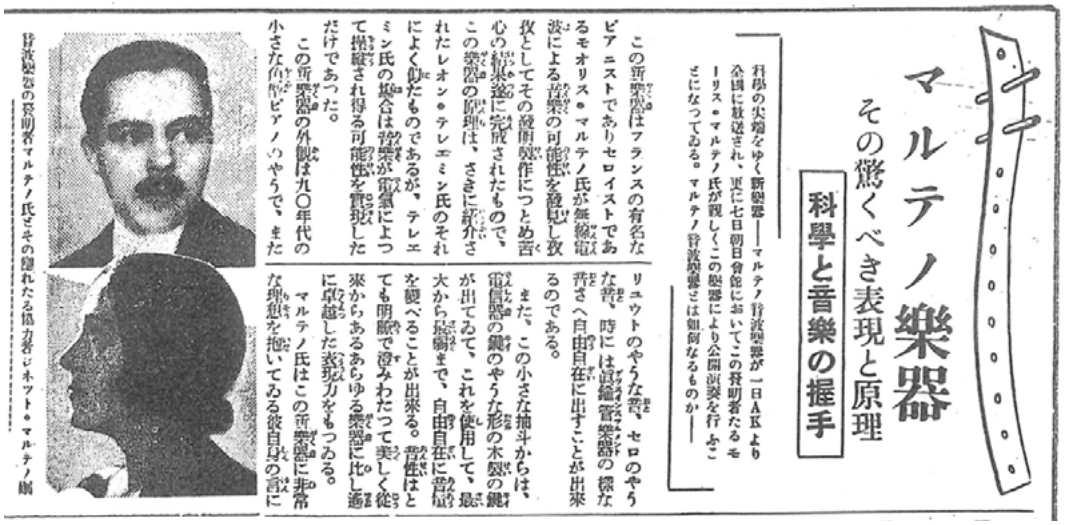
モリス･マルトノとジネット･マルトノ
高野武朗「發明された新樂器「マルテノ」を聽く」『月刊樂譜』19 巻 11 号 (1939), p. 69.

来日したモリス・マルトノとジネット・マルトノ
『東京朝日新聞』, 1931 年 2 月 17 日夕刊 2 面



オンド・マルトノの演奏会の広告
『東京朝日新聞』1931 年 2 月 26 日朝刊 9 面

(24) 楽器オンド・マルトノと発明者のモリス・マルトノ、及びこの楽器の日本における受容に関しては、大矢素子『オンド・マルトノの軌跡――日本における 70 年』（東京藝術大学修士論文 , 2004）と、同『オンド・マルトノの開発史とその作品――コンテクストから読み解く電子楽器―』（東京藝術大学博士論文 , 2012）に詳しい。
(25) 藤野純也『1926 年から 1936 年の日本における「機械音楽」としての初期電鳴楽器受容――特許文献と雑誌記事の分析に基づいて』(大阪芸術大学博士論文 , 2017), p. 149.
(26) 高野武朗「新樂器「マルテノ」をきく」『東京朝日新聞』1930 年 9 月 20 日 .
(27) 高野武朗「發明された新樂器「マルテノ」を聽く」『月刊樂譜』19 巻 11 号 (1939), p. 71-72.
(28) 藤野 , 前掲書 , p. 45-46, 150-152.
(29) 藤野 , 前掲書 , p. 37.



マルテノ樂器

その驚くべき表現と原理

科學と音樂の握手

君學の尖端をゆく新樂器――マルテノ音波樂器が一日AKより全國に放送され、更に七日朝日會館においてこの發明者たるモーリス・マルテノ氏が親しくこの樂器により公開演奏を行ふことになつてゐる。マルテノ音波樂器とは如何なるものか――

この新樂器はフランスの有名なピアニストでありセロイストであるモオリス・マルテノ氏が無線電波による音樂の可能性を發見し救救としてその發明製作につとめ苦心の結果遂に完成されたもので、この樂器の原理は、さきに紹介されたレオン・テレミン氏のそれによく似たものであるが、テレミン氏の場合は音樂が電氣によつて操縦され得る可能性を實現しただけであつた。

この新樂器の外觀は九〇年代の小さな角型ピアノのやうで、またリュウトのやうな音、セロのやうな音、時には管絃樂器の樣な音さへ自由自在に出すことが出來るのである。

また、この小さな抽斗からは、電信器の鍵のやうな形の木製の鍵が出てゐて、これを使用して、最大から最小まで、自由自在に音域を變べることが出來る。音色はとても明瞭で澄みわたつて美しく從來からあるあらゆる樂器に比し遙に超越した表現力をもつゐる。

マルテノ氏はこの新樂器に非常な理想を抱いてゐる彼自身の言に

音波樂器の發明者マルテノ氏とその優れたる協力者ジネット・マルテノ嬢

来日中のモリス・マルトノとジネット・マルトノ
『大阪朝日新聞』1931年3月4日
10面

派・ロマン派の音楽の受容が中心であった。しかし同時代の西欧の音楽界では、調性・機能和声の崩壊と拍節リズムの崩壊を経て、音楽概念の再定義や音に対する認識の変化などがあり、作曲家は各自のイディオムを構築しながら現代音楽を創造していた。高野はそのような西洋音楽の新しい息吹をパリで吸収しただけではなく、その最新の音楽と音楽家を日本に招聘していたことがわかる。

なお徳川頼貞は1929 ～ 31年の間、西欧と南米中米を旅行しており、1930年5月末か6月初め頃には、パリで声楽家のシャリアピン（F. I. シャリャーピン、1873 ～ 1938年）に会っている(30)。また7月にはロンドン、9月にはブリュッセルとそれぞれ会議に出席している(31)ので、この時期パリで高野武郎と会っていた可能性もある。

E. ロベール・シュミッツ演奏会パンフレット
1930（昭和5）年4月3日、5日、6日
出典：風船舎
https://fusensha.ocnk.net/product/966

(3) 吉田清風・宮城道雄

ところで1930年に高野がパリに滞在している頃、日本の伝統音楽を欧米に紹介するという話が始まっていた。これは、プロムジカ・ソサエティの会長で、フランス人のピアニストであるE. ロベール・シュミッツ(32)が、来日した折に宮城道雄（箏、1894 ～ 1956年）と吉田清風（琴古流尺八、1891 ～ 1950年）の演奏を聴いて非常に感激し、この演奏を是非世界に紹介したいと言っ

(30)徳川頼貞『薔庭樂話』私家版（徳川頼貞刊, 1941）, p. 344-354; 復刻版, 美山良夫校注（中央公論新社, 2021）, p. 334-344.
(31)村上紀史郎『音楽の殿様・徳川頼貞』(藤原書店, 2012), p. 332.
(32)E. R. シュミッツはパリ音楽院でC. A. ドビュッシーに学び、ソリストとしても活躍しており、1920年4月にニューヨークでプロムジカ・ソサエティを設立した（ヴィヴィアン・パーリス「プロ-ムジカ Pro-Musica」『ニューグローヴ世界音楽大事典』15巻(講談社, 1994), p. 590-591)。

たことから始まった。プロムジカ・ソサエティの支部は世界の主要都市にあり、高野は当時日本支部代表をしていた[33]。

シュミッツ Elie Robert Schmitz (1889 ～ 1949年) は1930（昭和5）年4月3日、5日、6日に、東京の帝国劇場でピアノ･コンサートを行っている。曲目はJ. S. バッハの《シャコンヌ》（ブゾーニ編曲）、《前奏曲とフーガイ短調》（リスト編曲）、C. A. ドビュッシーの《子供の領分》、《映像 第1集》より〈ラモーをたたえて〉、《前奏曲集 第2集》より〈花火〉などであった[34]。この来日時に宮城道雄と吉田清風の演奏を聴いたのであろう。

この日本伝統音楽の欧米演奏旅行は、さっそく具体化した。当初の予定は1931（昭和6）年1月5日に出発し、米英仏独伊の5カ国で演奏会を行うことになっていた。構成は宮城道雄と同夫人、吉田清風と同夫人、牧瀬喜代子の5人、それに通訳兼マネージャーとして高野武郎が全行程に付き添うということに決まった[35]。しかし直前に宮城が健康などの理由から行くのを断ったため、実際の出発は1931年10月8日になり、吉田清風（尺八）と同恭子夫人（箏・三絃）、千葉富子（唄・箏）、阪東三津美（舞踊）、高野武郎という構成で出発した。また行き先もアメリカのみ（北米大都市20カ所）となり、英仏独伊は中止になった[36]。この時、徳川頼貞は新渡戸稲造などと共に、国内でこの企画の後援をしている[37]。

この後、吉田は『三曲』誌の1932（昭和7）2月号から7月号まで、毎月アメリカ便りを載せている。しかし8月号には吉田が病気のため、ロサンゼルスから「七月九日発　同氏一行マネージャー高野氏よりの通信」として、吉田の病状が高野の筆で伝えられている。「六月二十七日発熱致し候所、二十九日に病症丹毒と判明」[38]と、病院や医師の治療やその後の状況を伝えるわずか15行の文章である。高野の絵画、版画、舞台模型などは記録に残っているが、彼の残した文章は少なく、それに接することのできる限られた例と言える。

吉田清風一行は1932年9月に帰国し、報告を兼ねて座談会が開かれた。その席で吉田は、日本人が日本の伝統音楽を軽視することへの批判を語っている。「一体日本人は妙な癖で、西洋でよかったとなると慌て出す［略］

吉田清風一行の渡米前の記念写真
『三曲』1931年9月号口絵
左より吉田清風、恭子夫人、千葉富子、阪東三津美

(33)『三曲』(三妙社)1931年2月号, p. 81.
(34)秋山龍英編著『日本の洋楽百年史』(第一法規出版, 1966), p. 454.
(35)『三曲』1931年1月号, p. 64.
(36)『三曲』1931年8月号, p. 79.
(37)『三曲』1931年9月号, p. 15.
(38)『三曲』1932年8月号, p. 69. 以下『三曲』からの引用の表記は新字体に直し、明らかな誤植は訂正した。

日本音楽に対する外人の認識を高め且つは評判をとれば日本人も［日本音楽を］大事にするだろうし、研究も発達も本気になるだろうという、それらが実は私の真の目的だったのです」(39)。

日本音楽の研究者である吉川英史も同様のことを述べている。すなわち、今回の企画に宮城道雄も同道し、英仏独伊も訪問先になっていれば、「日本人が自国の伝統音楽を軽視する間違いが、この演奏旅行の各地の反響によって、くつがえされ、日本人の伝統音楽の再認識は、約三十年も早められたかも知れないのである。そういう結果を生んだならば、日本音楽の価値を見出だして、この機会を与えた、シュミッツこそは、日本美術の価値の発見者フェノロサに較べられる人になっていたであろう」(40)と。

ニューヨークの吉田清風
『三曲』1932年6月号口絵
前列右よりM. エルマン、L. ゴドフスキー、吉田清風

一方吉田清風帰国後の『三曲』には、アメリカでの批評も掲載されている。例えば宮城道雄の《花園》（1928年作曲）に対しては、「美しい芸術を持つ日本人が何故米国及びヨーロッパのものを模倣するのかおしいと思う。［略］西洋音楽に感化されたという宮城氏の「花園」はあまりに西洋風であった」(41)というようなオリエンタリズム的批評がなされている。また、日本の伝統音楽に初めて触れたことを語る次のような批評もあった。「我々がしばしば耳にする東洋の音楽、オペラ、ミカドでナンキプーが演ずる音楽などは真の東洋音楽ではないということは16世紀に作られた古曲「六段」を聴いて知ることが出来た」(42)。

なお左の写真は、1932年1月にニューヨークで撮影されたものである。吉田がピアニストのレオポルド・ゴドフスキー（1870 ～ 1938年）宅を訪問した時に、ヴァイオリニストのミッシャ・エルマン（1891 ～ 1967年）も居合わせていた(43)。『三曲』1932年3月号の吉田の「アメリカ便り」には、後列の二人の人物の説明は無いが(44)、個人的訪問と思われるので、通訳の高野武郎もついて行ったであろう。芸術分野への進路に対する父親の理解を得られず、山田耕筰の家に起居していた1910年代後半の高野が10代後半頃とすれば、それから15年あまり

(39)『三曲』1932年10月号, p. 81.［　］は筆者挿入。
(40)吉川英史『この人なり　宮城道雄傳』(新潮社, 1962), p. 474-475.
(41)『三曲』1932 年 12 月号 , p. 28-29. レドフェルン・メーソン ; サンフランシスコ / エキザミナー紙。
(42)『三曲』1932 年 12 月号 , p. 29. アルバート・ゴルドペルグ ; シカゴ、ヘラルド / エキザミナー紙。
(43)L. ゴドフスキーは 1922（大正 11）年に、M. エルマンは 1921 年に来日し、東京の帝国劇場で演奏会を開催している。秋山編著 , 前掲書 , p. 363-364, 340-341.
(44)『三曲』1932 年 3 月号 , p. 51-52.

経ったこの時点では、30代前半頃になる。高野は、今回の演奏旅行の企画を行ったプロムジカ・ソサエティの日本支部代表でもあったので、この時一緒に写真に写っていた可能性もある。そうすると、この後列左の人物が、あるいは高野武郎であろうか。高野は今回のアメリカ演奏旅行に通訳兼マネージャーとして同行し、旅の折々に吉田清風から日本の伝統音楽の日本における状況や、このようなアメリカでの受容などを知る事により、音楽に対する視野をより広めていったことと思われる。

5. 1933 ～ 45（昭和8 ～ 20）年；国際文化振興会

1934年（昭和9）に財団法人国際文化振興会（KBS）という組織が設立された。文化を通しての国際交流を目指すという当初の目的は、1941年（昭和16）12月に太平洋戦争が始まったことにより、その性格を大きく変えていくことになった。すなわち、「創設から1941年頃までのKBSとは、外国滞在の経験があり国際的な視野を身につけた人々が、軍縮・平和という理想に向かって（あるいは少なくともそれを是として受け入れて）活動しうる場であった」(45)が、次第に外務省、情報局、軍部からの規制、戦争への協力要請が強くなっていったのである。

この国際文化振興会は1934年4月18日に発会式、5月31日に総裁奉戴式が行われている。総裁は高松宮宣仁親王、会長は近衛文麿、副会長は徳川頼貞と郷誠之助、理事は全14名で姉崎正治、山田三良、団伊能、樺山愛輔などで構成されていた(46)。高野武郎は「1930年代半ばから」(47)この組織で働いており、同会理事の黒田清とともに「現代日本音楽の夕」の企画斡旋などをしている(48)。

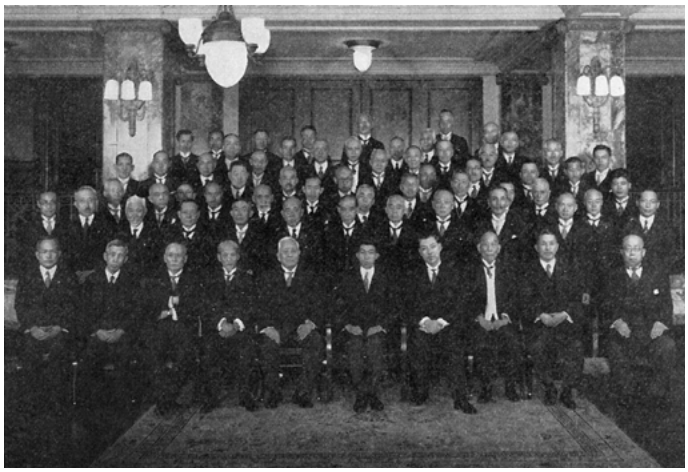
またこの会は『國際文化』という雑誌を出しており、高野はこの雑誌の第17号（1941（昭和16）年12月)と第18号（1942（昭和17）年2月）の編集を担当していた(49)。一方徳川頼貞の『薈庭樂話』の私家版は1941年11月に完成配布されている。従って高野が徳川頼貞の口述を筆記し始めたのは、その数年前だったのではないかと思われる。二人ともまさに、「外国滞在の経験が

(45) 酒井健太郎「国際文化振興会の対外文化事業──芸能・音楽を用いた事業に注目して」戸ノ下達也, 長木誠司編著『総力戦と音楽文化　音と声の戦争』(青弓社 , 2008), p. 132.
(46) 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流──国際文化振興会の創設と展開』(有信堂高文社 ,1999), p. 78-79.
(47) 毛利 , 前掲書 , p. 371.
(48) 横浜交響楽団『市民のオルガン──小船幸次郎と横浜交響楽団』(神奈川新聞社 , 2007), p. 49.
(49) 酒井 , 前掲書 , p. 156-157.

あり国際的な視野を身につけた人々」であり、国際文化振興会で共に働いたのであった。既述のように、徳川頼貞は1930年にパリで高野に会っていたかもしれない。また頼貞は1930 ～ 31年の吉田清風のアメリカ演奏旅行の後援者になっているので、その時高野は頼貞と面識を得ていたかもしれない。そしてその後のこのような国際文化振興会における両者の関係から、『薈庭樂話』の口述筆記の話も生じたものと思われる。

おわりに

1916（大正5）年から1926（大正15）年までの高野武郎の作品、仕事には、素描、絵画、版画、舞台場面設定などが多いが、1926（昭和1）年から1945（昭和20）年の期間には音楽関係の仕事が多い。彼は山田耕筰の「マネージャー兼付き人」として、日本における西洋音楽の受容の困難さと喜びを共に体験し、また貴志康一のマネージャーとして、彼との対話から、西欧のクラシック音楽界の現状も知ったであろう。さらにパリでM.マルトノを訪問し、現代音楽にも理解が深まっただけではなく、マルトノ兄妹を日本に招聘し、楽器オンド・マルトノを日本に紹介している。加えて、吉田清風一行とのアメリカ演奏旅行に通訳兼マネージャーとして同行することによって、日本の伝統音楽の世界にも目を開き、そのアメリカでの受容をともに体験している。そして「1930年代半ばから」働くようになった国際文化振興会では、副会長の徳川頼貞が、個人で西洋音楽の受容に大きな貢献をしてきたということをより詳しく知るようになった。このように、西洋音楽と日本音楽に関する幅広い経験を有する高野武郎であればこそ、徳川頼貞の音楽をめぐる実に多彩な半生の記である『薈庭樂話』を記録する人物として、まさに適任者であったと言えよう。

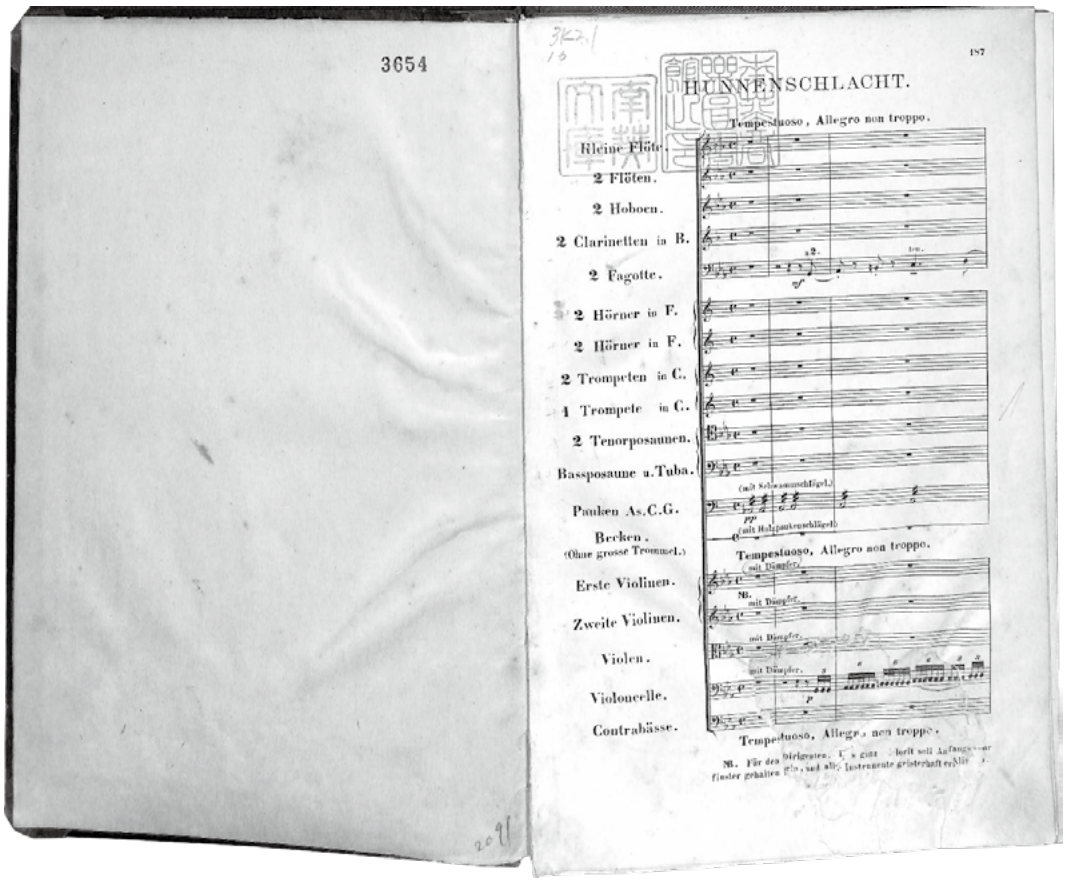


高松総裁宮奉戴式記念写真
『KBS三十年のあゆみ』（国際文化振興会, 1964）p. 11.
前列左から6人目高松宮宣仁親王、7人目徳川頼貞

資料紹介

リスト《フン族との戦い》

Liszt, Franz. *Hunnenschlacht*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1910.
1 score (98p.) ＋ 38 parts. 27cm. (収蔵番号 3K2.1/16)



作品について

フランツ・リストの交響詩《フン族との戦い》(1)。1857年作曲。交響詩第11番。「ヴィルヘルム・フォン・カウルバッハによる」。

副題に示されているように、この交響詩は、フランツ・リスト Franz Liszt（1811～1886年）の友人だった画家・彫刻家のヴィルヘルム・フォン・カウルバッハ Wilhelm von Kaulbach (1805～1874年) の絵画《フン族との戦いHunnenschlacht》（1850年）にインスパイアされた作品である。1855年にカロリーヌ・ザイン=ヴィトゲンシュタイン侯爵夫人からこの絵画の複製を渡されたリストは、これに触発されて交響詩を構想した。さらに、1856年の年末にミュンヘンにあるカウルバッハのアトリエを訪問したリストは、カウルバッハの歴史画の数々に感激し、そのいくつかを音楽化し、《フン族との戦い》と併せて「音と絵による世界の歴史」シリーズとする計画をたてた。しかし、この大規模な構想のうちで実現したのは、結局、交響詩《フン族との戦い》のみであった(2)。

カウルバッハの絵画《フン族との戦い》

(1)Hunnenschlacht は「フン族の戦い」と訳されることが多いが、この曲が作られた経緯からすると、発想源になった絵画はキリスト教の側から描かれており、また、楽譜に掲載された標題についても同じことが言える。このことは、板東俘虜収容所でこの作品が演奏されたときのポスターの構図にもあてはまる。したがってここでは曲の題名を《フン族との戦い》と訳すことにする。
(2) 福田弥『リスト』（音楽之友社 , 2005), p. 213-214. 以下も参照。Gerhart Winkler, "Hunnenschlacht", CD *The Sound of Weimar*, vol. 3（NCA 60250, 2011）の解説。

カウルバッハ《フン族との戦い》

は、西暦451年、「カタラウヌムの戦い」における、西ゴート王テオドリックの旗のもとに結集したキリスト教徒と、アッチラ王の率いるフン族の軍勢との、凄絶な戦闘を描いたもの。カウルバッハは伝説の語るところに従って、画面の上半分に、戦死した兵士たちの魂がなおも戦い続ける様子を描いている。この絵画は、現在、ベルリン美術館に所蔵されている。なお、カウルバッハは1856年にリストの有名な肖像画を描いている。

リストの交響詩《フン族との戦い》は、ベートーヴェン《ウェリントンの勝利》やチャイコフスキー《1812年》と並んで、管弦楽で戦争を描いた音楽の代表作のひとつとされる。実際、曲の前半は、アッチラの軍勢を表す主題と、キリスト教徒たちを表す主題がせめぎあうが、両者の激烈な闘争は意外に早く収まり、曲の中盤からグレゴリオ聖歌《気高き十字架 *Crux fidelis*》が奏されて、キリスト教徒たちの勝利を高らかに告げる。この《気高き十字架》はリストが好んで自作に引用したものだが、《フン族との戦い》では、最初に金管楽器で奏でられたあと、オルガンによって引き継がれる。リストは楽譜の冒頭にこの曲の標題(programme) をドイツ語とフランス語で掲げており、ドイツ語版には《気高き十字架》の歌詞の一部が引用されている。カウルバッハの絵画のなかでリストに感銘を与えたのは、地上と空に繰り広げられる戦いの描写ではなく、十字架の放つ光であり、この曲におけるリストの狙いは、この「十字架の勝利」を音楽的に表現することであった。この点でオルガンがこの交響詩の中で果たす役割は大きい。また、この曲が、ベートーヴェンの《運命》と同様、ハ短調で始まりハ長調で締めくくられる(「闇から光へ」) ことも、上記の構想と無関係ではあるまい。初演は1857年12月29日に、作曲者自身の指揮により、ヴァイマルの宮廷劇場で行われた。

発見の経緯

南葵音楽文庫には、この曲の総譜とパート譜がセットで保管されていた。総譜 は1910年 にBreitkopf & Härtelか ら出版されたFranz Liszt, *Symphonische Dichtungen für Orchester*の一部 (pp. 187-284) 。「南葵文庫」および「南葵音楽図書館所蔵」の二つの蔵書印がある。この総譜自体は、後述する表紙の問題を除けば、特に珍しいものではない。問題はむしろパート譜である。所蔵されているパート譜のほとんどは手書きで、印刷されたパート部があるのは弦楽器のみである。

◎パート譜一覧
Kleine Flöte, 1部, 手書き譜
Flöte I, 1部, 手書き譜
Flöte II, 1部, 手書き譜
Hoboe I, 1部, 手書き譜
Hoboen, 1部, 手書き譜
Fagott I + II, 1部, 手書き譜
Clarinette I in B, 1部, 手書き譜
Clarinette II in B, 1部, 手書き譜
Horn I, II, III, IV, 各1部, 手書き譜
Tromba I in B, 1部, 手書き譜
Tromba II in B, 1部, 手書き譜
Tromba III in B, 1部, 手書き譜
Tenorposaune I, 1部, 手書き譜
Tenorposaune II, 1部, 手書き譜
Bass Posaune (u. Tuba), 1部, 手書き譜
Pauken as, c, und g, 1部, 手書き譜
Pauken as, c. g. Becken, 1部, 手書き譜
Becken ohne große Trommel, 1部, 手

書き譜
Orgel oder das Harmonium, 1部, 手書き譜
Violin I, 7部（印刷譜 3部, 手書き譜 4部）
Violin II, 3部（印刷譜 3部）
Viola, 2部（印刷譜 1部, 手書き譜 1部）
Violoncello, 4部（印刷譜 1部, 手書き譜 3部）
Bass, 1部, 手書き譜

筆跡は複数あり、写譜の仕方(1頁あたりの小節数、譜めくりの箇所) もまちまちである。使用されている五線紙は日本製(JUGIYA等の印あり)。

各パート譜には多くの書き込みがある。演奏上の指示にかかわるもののほか、後述のように、人名らしきものが横文字で書かれているものあり、また、複数のパート譜に、日付と場所の書き込みが見られる。たとえばテナートロンボーンⅠの楽譜には、「Bando Japan, 16, Nov.19」と記されてい る。「16, Nov. 19」 は「1919年11月16日」であろう。日付がパート譜によって若干前後する (テナートロンボーンⅡの楽譜では11月21日) ところをみると、この日付は演奏会の日ではなく、写譜が行われた日と考えるべきであろう。

なお、日本語の書き込みはなし。すべて横文字である。

以上のような楽譜の状態からみて、この楽譜は実際に演奏で使用されたものである可能性が高いと思われた。演奏の時期は1919年末。五線紙が日本製であること、「Bando Japan」と記されていることから、写譜が行われたのは日本であり、演奏されたのも日本であろう。しかしながら南葵楽堂での演奏会の記録 (『紀要』第2号参照) には、リストの《フン族との戦い》は含まれていない。では、この時期に、リスト《フン族との戦い》を日本国内で演奏した管弦楽団があったとしたら、それはどこか？

手がかりは「Bando Japan」の「Bando」である。第一次大戦で徳島県の板東 (現在の鳴門市大麻町桧) にドイツ軍の俘虜収容所が設けられたこと、この収容所内では捕虜たちによるオーケストラが結成され、収容所内で盛んに演奏活動を行っていたこと、このオーケストラによって、日本で初めてベートーヴェンの交響曲第9番が演奏されたことは、近年、映画『バルトの楽園』等を通じて広く知られるようになった。実は、この板東俘虜収容所のオーケストラが、1919年12月1日に、リストの交響詩《フン族との戦い》を演奏していたのである。

M.A.K.オーケストラ・エンゲル・オーケストラ 第2回共演コンサート
指揮者：パウル・エンゲル海軍2等歩兵
公開総稽古：1919年11月30日（日）
演奏会：1919年12月1日（月）7時開演
板東俘虜収容所

南葵音楽文庫所蔵のリスト《フン族との戦い》の楽譜は、このときに使用された楽譜であると考えられる。後述するように、楽譜に書き込まれた人名等からも、このことは裏付けられる。

所蔵の経緯

《フン族との戦い》は、いつごろ、南葵音楽文庫に収蔵されたのであろうか？ 南葵文庫の楽譜目録を見ると、《フン族との戦い》の楽譜は1917年刊の楽譜目録第1版には見当たらない。1920年8月刊の楽譜目録第2版に1点、ライプツィヒで出版された楽譜が掲載されている。これが問題の楽譜であろう。これらの事実から、《フン族との戦い》が収蔵された時期は、1917年以降1920年8月までの間であると推測される。板東捕虜収容所が閉鎖されたのは1920年4月である。

リスト《フン族との戦い》の楽譜が南葵音楽文庫に収められるに至った経緯は、現段階では不明であるが、板東俘虜収容所閉鎖の際に徳川頼貞が買い取った (あるいは譲り受けた) ものではないかとも考えられる。俘虜収容所閉鎖時に、ドイツ人たちは収容所で使っていたさまざまなものを日本

人に売り払っている。一方、徳川頼貞は、俘虜収容所での音楽活動のことを知っていた。すなわち、板東でベートーヴェンの《第九》が演奏されたと知った頼貞は、1918年8月13日に俘虜収容所を訪れ、収容所のオーケストラの演奏する《第九》の第1楽章を聴いているのである。したがって収容所で用いられた楽譜が売りに出されたと聞けば、頼貞がこれを買おうと考えてもおかしくはないし、収容所の方から連絡を取ったかもしれない。もしそうだとすれば、《フン族との戦い》と同時に、それ以外の作品の楽譜も購入した可能性が出てくる。果たして「バルトの楽園」からの楽譜はひとつきりなのか、それとも他にもあるのか、興味の尽きないところだが、現時点では、板東俘虜収容所から来た楽譜は《フン族との戦い》以外には確認されていない。

（近藤秀樹）

板東俘虜収容所の音楽活動

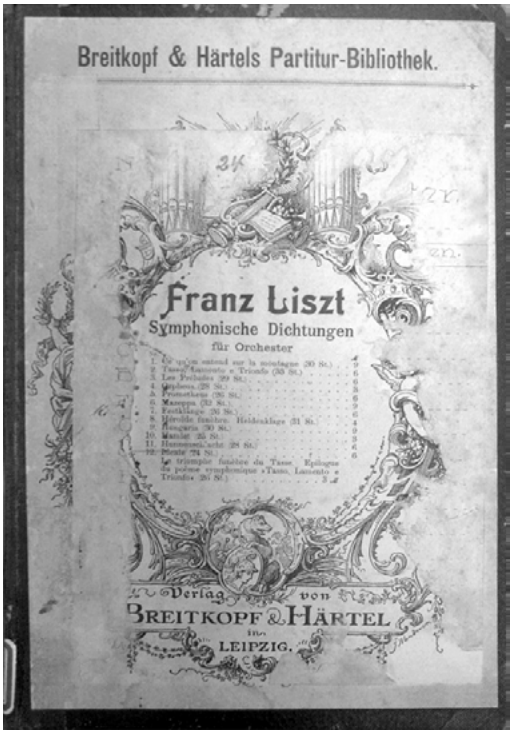
第一次世界大戦中ドイツ兵捕虜がいた板東俘虜収容所（1917年4月～1920年4月、現在の鳴門市大麻町）では、彼らの立場に配慮した松江豊壽所長のもと、捕虜たちの文化活動、とりわけ音楽活動がさかんにおこなわれた。ここには四十数名規模のオーケストラが二つあった。膠州海軍砲兵隊Matrosen-Artillerie Kiautschouの軍楽兵曹ヘルマン・ハンゼンを指揮者とする「徳島オーケストラ」（1918年9月より所属部隊の略称からM.A.K. オーケストラと改名）と上海の楽団にいたプロのヴァイオリニスト、パウル・エンゲルを指揮者とする「エンゲル・オーケストラ」である。

板東収容所のエンゲル・オーケストラ
ケーバーラインのアルバムより（鳴門市ドイツ館蔵）

その他、上記楽団の成員からなる室内楽団や吹奏楽団、またマンドリン楽団や二つの合唱団もあった。総員約1000人の収容所の中で、音楽の演奏に携わった捕虜は全体の2割弱もいたことになる。演奏会の頻度は平均10日に1回ほどであった。演奏曲目ではベートーヴェンとヨハン・シュトラウスの曲がほぼ同数で首位を占め、ドイツ・オーストリア系の作曲家の曲が比較的多い。他にロッシーニ、ビゼー、グリーグらの曲や現在ではあまり演奏されないマイナーな作曲家や当時のドイツ語圏での流行曲と思われるものも取り上げられている。楽器の練習も頻繁で「騒音」を喜ばない捕虜もいたため、音楽練習室は収容所南側の運動場のはずれに造られた。起床・就寝・点呼・食事の時間が決まっているだけで捕虜たちの自由時間は有り余っており、楽器の初心者であっても上達は早かった。地元の人々には毎日のように収容所から楽音が聞こえてきたという。ただし、バラック兵舎内の会場で催されたコンサートへの日本人市民の入場は許されていなかった。日本人向け演奏会については徳島市で3回催され、日本語のプログラムや写真も残されている。また、西洋音楽に関心のあった日本人有志の依頼で、エンゲルは徳島市で演奏を教えている。板東で演奏された曲のうち最も有名なのは徳島オーケストラと合唱団によるベートーヴェンの交響曲第９番で、全曲演奏としてはアジア初演とされる。ただし、女声パートはハンゼンが男声用に編曲し、ファゴットがなかったためハルモニウムで代用された。この他、上記二つの楽団によって演奏された曲のうち、ベートーヴェンの交響曲第4番とヴァイオリン協奏曲、《レオノーレ》序曲第3番、ヴァーグナーの《リエンツィ》序曲、ヨハン・シュトラウス《ジプシー男爵》序曲などが、日本初演の可能性が高い(3)。

(3) 鳴門市ドイツ館の元館長川上三郎氏のご教示による。

第2回合同コンサート（1919年12月1日）のプログラム
27.6×19.85cm（鳴門市ドイツ館蔵）



総譜の冊子『フランツ・リスト オーケストラのための交響詩集』
（南葵音楽文庫蔵）

楽譜と板東収容所の関連

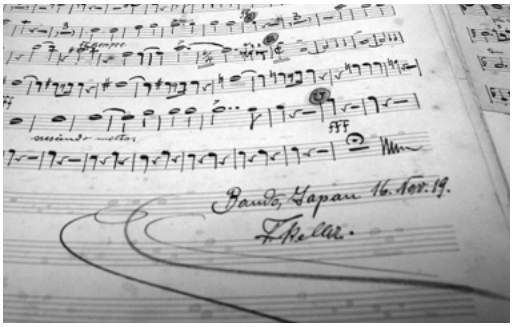
リストの交響詩《フン族との戦い》は、1919年12月1日の第2回（エンゲル・オーケストラとM.A.K.オーケストラの）合同コンサートで演奏された。この演奏会のプログラムが残されているが、それによれば他にベルリオーズの歌劇《トロイ人》より〈トロイ行進曲〉、ベートーヴェン《アテネの廃墟》序曲、リストのハンガリー狂詩曲第2番も演奏されている。

問題の楽譜に戻ると、まず通常の出版された小型冊子の総譜（リストの交響詩12曲）の表紙には文字が印刷された紙（19.7×13.7cm）が貼られていたようだが、はがされて周辺の部分のみ残っている。その部分の文字は謄写版印刷のもので、右上部分には"…ter"という綴りが見え、Orchesterの末尾と推測できる。演奏会用のチラシのたぐいらしきこの紙片はプログラムよりも小さいが、その字体はプログラムと同様板東収容所の印刷物のものと思われる。左下の方には Fl-, O-などの綴りが見え、楽器の名前のようだ。

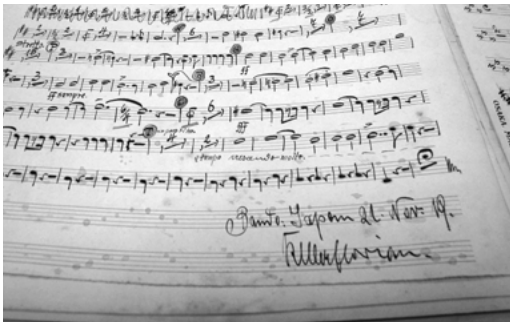
"…ter" の綴りが見える。

Fl-, O-などの綴りが見える。楽器の名前か？

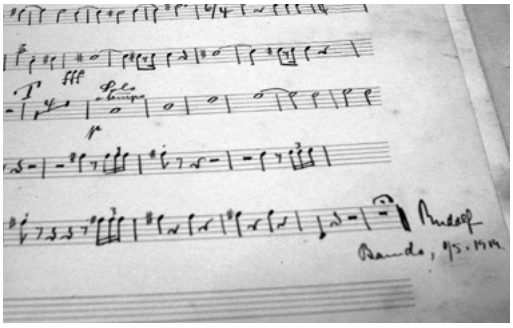
写譜されたパート譜については各部分で筆跡が異なるので、何人かで手分けして書いたのだろう。所々、用紙の末尾に筆写担当者らしき人の署名がある。最も鮮明に判読できるのは、Bandoという場所、1919年11月16、21日という日付け（演奏会の2、3週間ほど前）とともに記されたF. Keller、Kellerflorianという名前である。写されているのはトロンボーンのパートだが、フローリアン・ケラーという捕虜がM.A.K.オーケストラでトランペットを担当していた。他にRudolf, Sottorf, Moltrechtという名前も判読できる。いずれもエンゲル･オーケストラのメンバーで、グスタフ･ルドルフはトランペット、フルート、ホルンを、ベルンハルト・ゾットルフはホルンを、パウル・モルトレヒトはヴァイオリン、ヴィオラを担当していた(4)。またモルトレヒトは、マンドリン楽団や彼の名を冠した合唱団も率いていた。これらの署名から、二つのオーケストラのメンバーが手分けして写譜をおこなったと推測できる。



F. Kellerの署名があるパート譜
1行目はBando, Japan 16.Nov.19.と読める。
（南葵音楽文庫蔵）



Kellerflorianの署名があるパート譜
1行目はBando. Japan 21.Nov.19.と読める。
（南葵音楽文庫蔵）



Rudolfの署名があるパート譜
2行目はBando, 1.5.1919.と読める。（南葵音楽文庫蔵）

解放間近の時期

1919年12月1日の合同演奏会は、板東では最後から二つ目の演奏会である（12月25日には565名が、翌年1月には364名が解放され、板東収容所はその使命をほぼ終える）。それまでそれぞれ競うように演奏会を続けてきた二つの楽団がここで合同したのはなぜか。講和締結後、ドイツ最北部のシュレースヴィヒがデンマークに併合されるかドイツにとどまるかで住民投票がなされることになり、この地域の出身者たち7名が8月26日に帰国した。その中にM.A.K.オーケストラの中心人物だったヘルマン・ハンゼンがいた。これが合同の最大の原因であると考えられる。

演奏会の曲目解説や評価も記されていた収容所新聞『ディ・バラッケ』はこの年の9月で終刊となり、エンゲル楽団などの音楽活動を扱った『エンゲル楽団の生成と発展』の記録も9月で終わっているので、12月1日のコンサートの様子については不明である。ただしこれらの史料や残されたプログラムにより、リストのオーケストラ向けの曲が幾度か取り上げられていたことがわかる。《フン族との戦い》と同じ時

(4) 二つの楽団の成員については、板東収容所の前身のひとつである徳島収容所の捕虜新聞 *Tokushima-Anzeiger*, Bd. III , Nr. 15 と Hermann Jacob, *Das Engel-Orchester. Seine Entstehung und Entwicklung. 1914 – 1919*（Bando Japan, 1919）（『エンゲル・オーケストラ その生成と発展』）の巻末で確認できる。

徳島収容所時代の徳島オーケストラ
中央右よりの日本人が高木で、ひとりおいて左側が指揮者ハンゼン。後方は収容所にあてられた県会議事堂兼公会堂。
ギュンシュマンのアルバムより（鳴門市ドイツ館蔵）

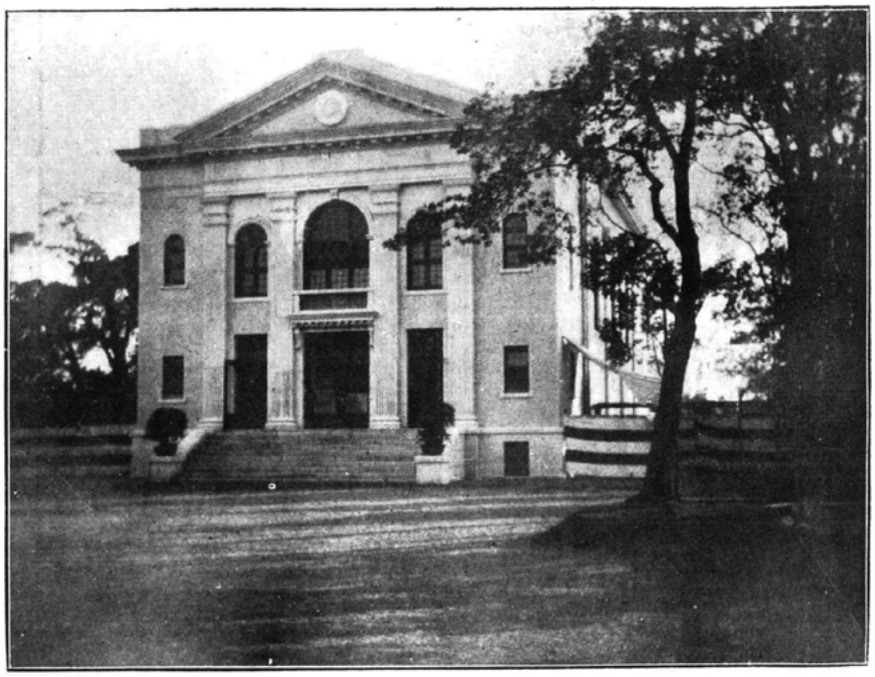
に演奏されたハンガリー狂詩曲第2番は、1917年12月9日エンゲル・オーケストラにより、また1919年2月9日にはこの楽団のメンバーからなる室内楽団「ウィーン・アンサンブル」により演奏されている。交響詩《レ・プレリュード》は、1919年1月12日M.A.K.オーケストラにより演奏されている。さらにこの曲は、同年9月28日にも同じ楽団に取り上げられているが、指揮をしたのは帰国したハンゼンに代わりマックス·ガルスター中尉であった。また、交響詩《タッソー》は、《フン族との戦い》の約20日前の1919年11月10日に第1回合同コンサートで演奏されている。

徳川頼貞が板東収容所を訪れたのは一度だけだが、この楽譜が南葵音楽文庫にあったということは、彼と板東の関係がそれ以降も続いていたことを推測させる。それを証拠立てるものはないが、彼の著書『薔庭樂話』に、このとき収容所の一大尉が徳島市まで頼貞を出迎え、その案内で汽車と自動車を乗り継いで収容所に至ったとある(5)。おそらく副所長格の高木大尉であろうが、彼は板東収容所の前身のひとつ徳島収容所（1914 ～ 1917年）において捕虜からの影響でみずからヴァイオリンを習い、楽団員とともに撮られた写真もある。気さくな人柄で捕虜たちとも親しかったから、彼らの帰国直前に楽譜を譲り受けて頼貞に連絡したことも考えられる。あるいは頼貞の方から何か音楽関係で入手可能なものはないかと収容所に問い合わせていたのかもしれない。

板東収容所で使用された楽譜はこれまで見つかっていないし、写譜に関する何らかの記録もない。今回の発見により、他の演奏会のさいにも同様のパート譜が楽団員の分担で写譜されていたと推測される。それらは捕虜の解放までに大半が破棄されたのだろう。帰国後入手可能な楽譜をわざわざ持ち帰るとは考えにくいからである。《フン族との戦い》の楽譜のみ残された理由としては、帰国間際におこなわれたコンサートのもののため偶然処分されずに残ったこと、あまり演奏されない曲のため日本の西洋音楽研究にとって希少価値を認められたことなどが考えられる。あくまで推測の域を出ないのであるが。　（井戸慶治）

(5) これについては以下の文献を参照。徳川頼貞『薔庭樂話』私家版（徳川頼貞刊 , 1941), p. 112; 復刻版 , 美山良夫校注（中央公論新社 , 2021), p. 127. 横田庄一郎『第九「初めて」物語』（朔北社 , 2002).

関連歴史資料



THE MARQUIS TOKUGAWA CONCERT HALL.
W. M. VORIES & COMPANY, Architects.

近江ミッション発行の機関紙『The Omi Mustard Seed』より

南葵音楽堂の建築について
──ヴォーリズ建築事務所に遺された建築図面──

株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所　顧問　**芹野与幸**

本紀要第1号(2018年3月)[1]において関連歴史資料の収集について述べられている中で、徳川頼貞が遺した回想記の存在が紹介されている。その遺稿集の中に頼貞が音楽資料の収集だけでなく、日本ではまだ建設されたことのない洋楽専門のホールを建てる夢を描いた経緯が述べられている。

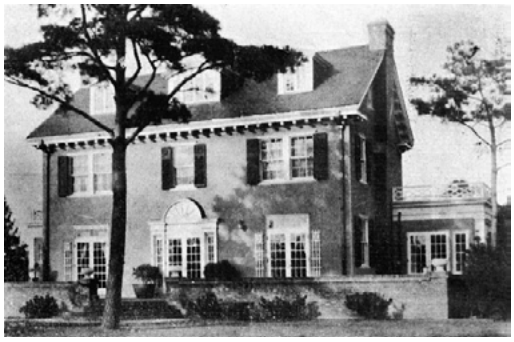
このことについては、その南葵楽堂が存在していた東京都港区において、2008年慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構（当時）が中心になり、港区の社会教育事業の助成金を受けて企画運営されていた「麻布飯倉　南葵楽堂の記憶」コンサートのプレ･イベントでも紹介され、頼貞が情熱を傾けて建築した音楽堂が関東大震災まで麻布飯倉にあったこと、またそれがどのような建物で、その建築に至った経緯などについて学ぶセミナーも開催されていた。2011年には港区の広報誌『ザ・AZABU』第17号、18号において「麻布の軌跡」と題する特集記事で、徳川家敷地内にあった「南葵文庫」と「南葵音楽堂」の建設に至った詳しい経緯が紹介されている。

先に触れた当紀要第1号に林淑姫氏と篠田大基氏が徳川頼貞著の『薈庭樂話』（1941年）『頼貞隨想』（1956年）について紹介しているが、この建物が誕生する経緯については、頼貞自身の回想として詳しく述べられている。

上記写真の説明文にW. M. Vories. & Company, Architectsとあるように、建築設計を行ったのは近江八幡に拠点を持つ米国人建築家ウイリアム･メレル･ヴォーリズWilliam Merrell Vories(1880～1964年)率いるヴォーリズ建築事務所である。

(1) 林淑姫 , 篠田大基「音楽とともに──徳川頼貞著『薈庭樂話』『頼貞隨想』」『南葵音楽文庫紀要』1号（2018.3）, p. 84-85.

頼貞は父と同様英国ケンブリッジ大学に留学し音楽を学ぶのだが、留学中の様々な見聞を経験するうち「未だ東京に一つもない純粋の音樂堂を建てゝ見たい」と思いつき、父である頼倫を説得したのであった。頼貞はこの設計を当初ロンドン社交界で知己を得た英国人建築家アルフレッド・ブルメル・トーマスに依頼。音楽堂に設置するパイプオルガンを英国のアボット・スミス社に製造を発注した。しかし、第一次世界大戦の最中でなかなか計画は進まず、トーマスからの連絡も途絶えていた。ようやく最初のオーダーから 3 年後になってやっと設計図が届いた。



『The Omi Mustard Seed』より

当初は卒業したケンブリッジ大学のチャペルをモデルにした計画をしたようだが、日本の環境や建築の事情などを勘案すると、これをそのまま実現するには難しさがあった。その時、陸軍の主計監で徳川家の財産管理に関与していた日疋信亮（ひびきのぶすけ）（1858 ～ 1940 年）が、日本在住ですでに各地での実績を持つ建築家ウイリアム・メレル・ヴォーリズの名を出し、日本の風土にもあう新しいプランをたててはどうかと提案した。頼貞はこの提案に耳を傾け、実際にヴォーリズに会うために足を運こび、東京郊外の宣教師館で出会うことになる。この時の様子を頼貞は『薔庭樂話』の中で詳しく回想して書き残している。

ヴォーリズは 1905 年に米国より来日し、当初は英語教師として滋賀県立八幡商業学校に赴任した青年だったが、来日後 2 年で教師を辞し、独自の活動を展開する中で建築設計事務所を運営していた。母体がキリスト教に基づく活動であったため、日本のキリスト教界では比較的よく知られており、自らもキリスト教信徒であった日疋信亮も聞き及んでいる人物であった。頼貞とヴォーリズは東京中野にあるヴォーリズ建築事務所が設計した宣教師館で出会うことになる [2]。

ヴォーリズのポートレート
徳川頼貞旧蔵写真より
（読売日本交響楽団蔵）

ヴォーリズ建築事務所は 1908 年に京都 YMCA 会館の建設当時に建設代理監督に携ったヴォーリズによって創業された建築監督事務所であり、彼らの活動の概要や建築に関する研究は大阪芸術大学建築学科の山形政昭教授によってなされたものが複数著作物で世に紹介されている [3]。

頼貞はヴォーリズと個人的にも非常に親しくなり、彼の活動拠点となっていた八幡を夫婦で訪ね、近江ミッションが所有していたガリラヤ丸と名付けられたクルーズ

近江八幡来訪時の
徳川頼貞夫妻
吉田悦蔵アルバムより
吉田与志也氏蔵

『The Omi Mustard Seed』より

(2) 徳川頼貞『薔庭樂話』（春陽堂 , 1943）,p. 108; 復刻版 , 美山良夫校注（中央公論新社 , 2021）, p. 137.
(3)『ヴォーリズの住宅』（住まいの図書館出版局 , 1988）、『ヴォーリズの建築』（創元社 , 1989）、『ヴォーリズの西洋館』（淡交社 , 2002）、『ヴォーリズの建築 100 年』（図録監修 創元社 , 2008）.

船に乗船する様子も記録されている。こうして頼貞は提案された音楽堂建築計画による建設の責任者にヴォーリズを指名した。

ヴォーリズ建築事務所が設計した建築物は全国各地にあり、先の山形教授の調査によると扱った案件数は戦前までで 1484 件を数えることが報告されている。太平洋戦争を挟んで一時は活動を停止せざるを得ない時期はあったものの、戦後は逆に占領軍が関与する復興施策によって再開の機会を得、ヴォーリズ自身が報告している記録では、戦後も含めると 2000 件を超えるとしている。これらの建築計画を実現するために用意された図面類は当初からヴォーリズらが主宰する近江ミッションの拠点である八幡に保管されていた。かつて近江ミッションと呼称していた組織は、建築事務所だけでなく、近江セールズという輸入事業、近江療養院という医療事業、伝道事業、教育事業を含む多岐にわたる事業体に発展していった。かつては建築設計に伴う収入が事業体を支えていたが、その後メンソレータム（現メンターム）の販売が加わり、1961（昭和 36）年に建築部門が自立することになり、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所として再出発し、ヴォーリズ建築の伝統を継承し、今日に至っている。

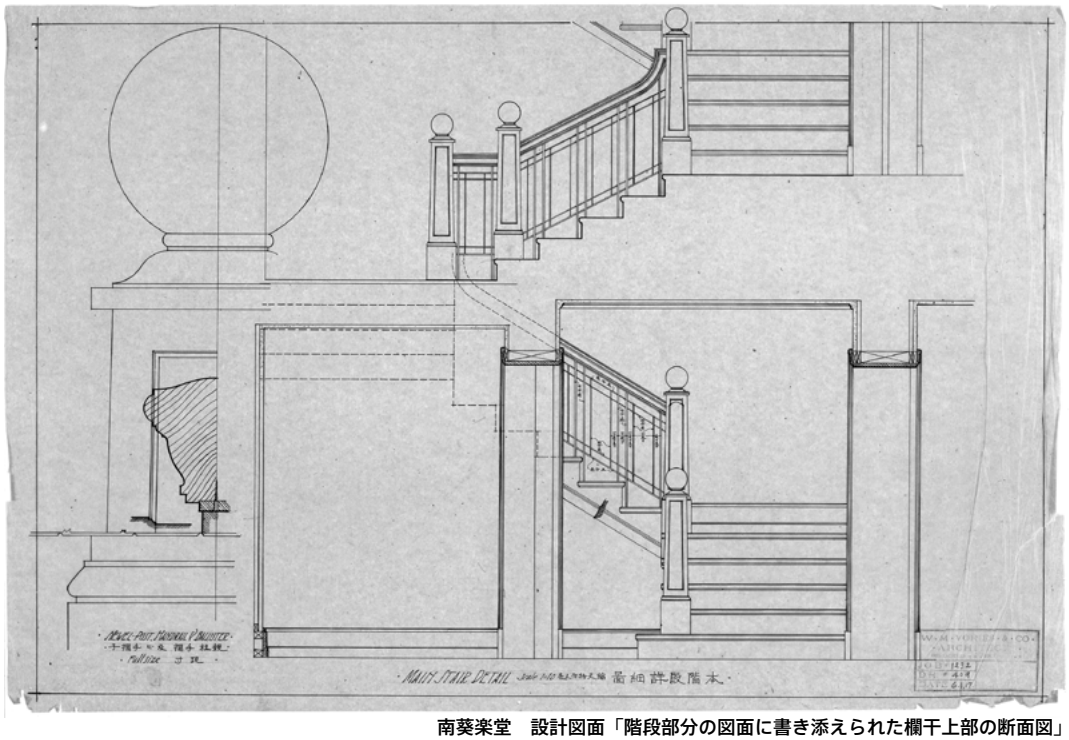
その当初、設計原図は近江八幡の近江兄弟社内に保管されていた。ある時、建物の改修に伴って、図面の移動を余儀なくされる事情が発生した。山形教授が八幡を訪れ、研究の手がかりを探っていたのがちょうどその時期で、近江兄弟社、株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所、山形氏の所属した大阪芸術大学が覚書を交わし、ヴォーリズ建築の膨大な資料は、研究に資するために大阪芸術大学の研究室に貸与されることとなった。この間、先に挙げた様々な研究成果が世に出され、役割を終えて株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所が管理する近江八幡の浅小井史料館の倉庫にすべて返還された。そこでは創業当時から伝えられる図面だけでなく、後継者である株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所の戦後以降の図面も保管管理されている。創業から 100 年を超える多くの案件の中には扱うことも困難な痛みの激しいものもあるが、すでに存在しない歴史上の建築物を含め貴重なものが多数みられる。

建築設計図面とは、施主の思いをよく理解し、それを具現化するために施工するに必要な情報を描き出して施主の同意を得、実際に現場で施工指導するためのものであるが、基本計画に始まり、敷地における配置計画、平面計画、立面展開、構造計画、設備計画、施工詳細図など多岐にわたる施工情報を書式に整えるものである。先に「ヴォーリズ建築の図面」と表現したものは、そのスタートの時点で施主に示し、詳細を詰め具体的な建設に向けていくために用意された基本計画図が多く、大きなプロジェクトではさらに詳しい各種図面が多数保管されているものある。

ヴォーリズ建築の原図には一部に興味深い表現の図面が含まれている事例が散見される。多く場合、図面は縮尺して表現されるのが通例である。しかしヴォーリズの図面の中には "Full size" すなわち原寸で表現されているものが、縮尺図面の中に一緒に表現されているケースもある。

例えば南葵楽堂の図面の中にも次のようなものがある。階段部分の図面であるが、よく見ると左側は欄干の上の断面詳細が書き添えられている。図面上で一見汚れのようにも見える太線も形状の凹凸を指示しており、現場の細工人が視覚的に理解できるよう工夫されているのがわかる。

多くは彫刻のカーブを指示するため、また部分断面を指示するためのものだが、原寸で表現することによって、現場で実際に施工する細工師が細やかに、あるいは専門教育を受けていなくても宮大工などが即座に理解できるように配慮して描かれたものだったのかもしれない。



南葵楽堂　設計図面「階段部分の図面に書き添えられた欄干上部の断面図」
株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

南葵楽堂　階段室
『The Omi Mustard Seed』より

南葵楽堂　外観
『The Omi Mustard Seed』より

以下、建物としての徳川音楽堂について紹介し、徳川頼貞が音楽資料の収集、公開にとどまらず、音楽芸術の実体験を日本にも普及しようと試みたことを振り返ることとしたい。

もともと頼貞がこの発想を抱いた経緯は先に述べた通り頼貞自身の回想記である『薈庭樂話』に以下のように記されている。

> ある時私は［略］、ブルメル・トーマス（Brumwell Thomas）といふ新進建築家に紹介された。トーマス氏はオックスフォード大學出身で、比較的若いころから、建築界にその技倆を認められた人で、私が知り合ひになる數年前、アイルランドのダブリン市の公會堂の設計に一等賞を贏［勝］ち得て一躍名聲を博し、その建物は今もなほ同市の一美觀として評判されてゐる。トーマス氏はまた大の音樂好きで、私は間もなく同氏と親しく交際をするやうになつた。［略］トーマス氏から音樂堂の話を詳しく聽いてゐるうちに、私はふと日本にも是非音樂堂がなければならないと思ひついた。［略］折角外國迄來て音樂を勉強したのであるから、その土産として歸朝の曉には、未だ東京に一つもない純粹の音樂堂を建てゝ見たいと、かう考へたのであつた。

実は頼貞の父徳川頼倫も英国留学（1896 ～ 98 年）のあと米国に渡り、図書館の活動に感銘を受け、自らの力で図書館を作って一般に公開しようという理想を掲げ「南葵文庫」を既に建てていた。そこには徳川家康の御譲本をもとにした紀州徳川家に伝わる 2 万冊にも及ぶ収蔵書があったと伝えられ、明治 41（1908）年に一般公開され、永井荷風や島崎藤村らも通ったと伝えられる [4]。残念なことに大正 12（1923）年の関東大震災で東京帝国大学図書館も大きな被害を受け、多数の蔵書が焼失したことを知った頼倫は、大正 13（1924）年に文庫を閉館し、それらを東京大学に寄贈した。

頼貞は、父がさながら眼から入る教養を得る目的で図書館を創設したのであるから、自分は耳から入る教養の機関として音楽堂を造りたいと考え、指導役であり後に慶應義塾塾長になる小泉信三に相談し、先のトーマス氏に設計を依頼したのだった。その際私案として、「規模はさし当りケンブリッヂ大學のキングス・カレッヂのチャペルを基本とし、プラットフォームには七八十人の人間が竝べるやうにして、聽衆席は四五百人を容れる程度のものにしたい」と回想している。

ところが、その待望の音楽堂は、第一次世界大戦のために大幅に遅延し、設計図どころか設計者からの便りも途絶えてしまった。それが冒頭に述べた事情に至る経緯である。

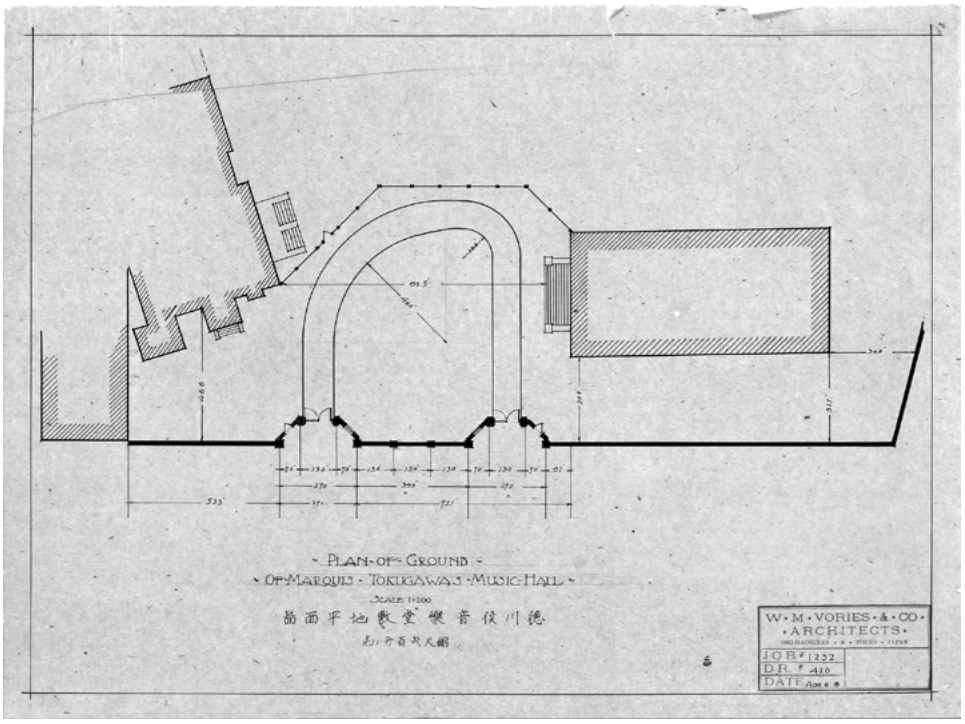
こうして日疋信亮によって頼貞はヴォーリズと出会うことになる。日疋は陸軍主計少将で、東京・富士見町教会員であり、1914 年に帝国陸軍を退官するまで各師団の監督部で経理を掌握、日露戦争では陸軍戦時経理の一切を指揮した一方、東京 YMCA との関係で満州伝道に尽力するなどした。日疋は音楽堂計画が戦争によって遅延している事情に加え、「トーマス氏は、未だ日本に來たことがないから、圖面に於ては完全なものが出來ようが、建築の實際に就て氣候風土や日本の事情に通じてゐないと、出來上つた後に實際上色々の不便が起らないとも限らない」と考え、「一層のこと日本に居る適

日疋信亮
公益財団法人近江兄弟社史料室蔵

(4)「麻布の軌跡──南葵文庫」『ザ・AZABU』17 号（2011.3）参照。東京都港区ホームページから閲覧できる。
https://www.city.minato.tokyo.jp/azabuchikusei/azabu/koho/documents/vol17-p01-p08.pdf

當な設計家に話して新しいプランを作つては如何であらう」と提案したのであった。こうして日疋を介して出会ったヴォーリズとすっかり意気投合し、二人はその後音楽堂の建設を通じて親しい友人のように接し、頼貞はヴォーリズを建設責任者に指名した[5]。☞

南葵楽堂が建設された徳川家の敷地は東京都港区麻布台一丁目、飯倉片町から飯倉交差点へと向かう外苑東通り沿いの一帯に明治から大正時代まであった。そして敷地内には父が創設した南葵文庫がすでにあり、そこに新たに音楽堂が建設されることになったのである。



配置図の左側が既存の南葵文庫であり、右側が新設されることになった音楽堂

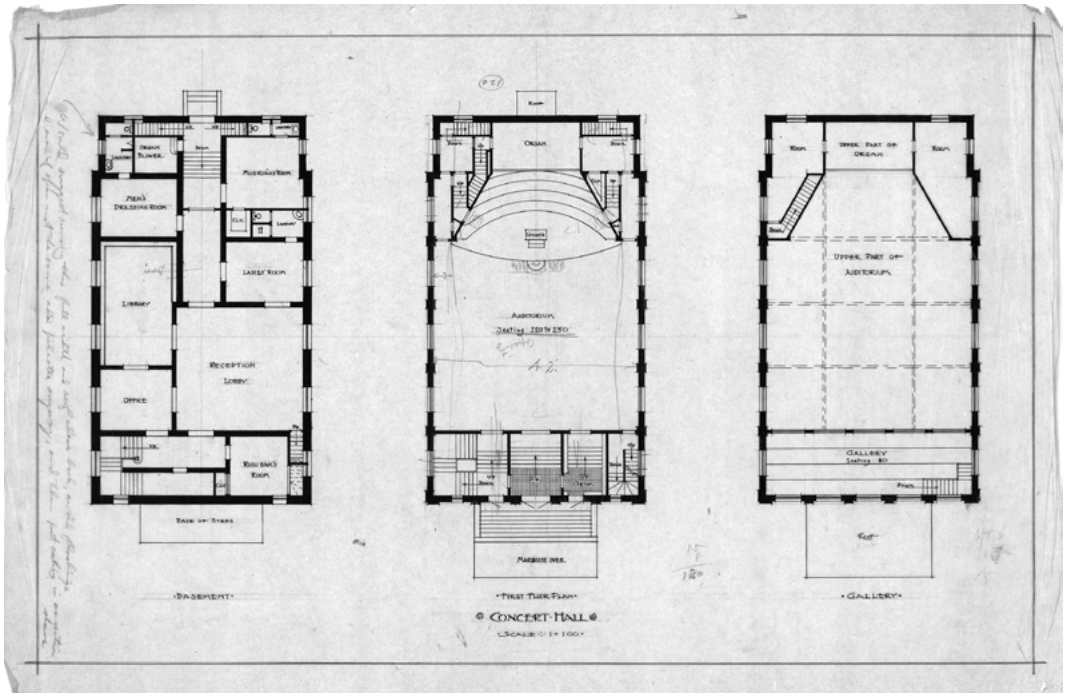
南葵楽堂　設計図面
株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

次に音楽堂の建物の三層の平面図から見ていくことにしたい（次ページ参照）。三層目の部分は二層目の吹き抜けと後部にギャラリー席があったことを示している（右図）。ステージ後ろはパイプオルガンのパイプが配置されるスペースとなっている（中図上部）。左図が半地下になっているホール下の部分で、ここに音楽文庫が収蔵されていたほか、楽団員の男女別の控え室、簡単なリハーサルも可能なスペース、事務室、売店があり、入口から一番奥（図の上部）はコンサートに際して楽団員たちが直接上階のステージに上がれる階段室がある。

中央はホールの一階部分であるが、玄関からは階段を上り、エントランスホールを経て入場することになる。図面上部のスペースが日本では初めての本格的なパイプオルガンが組み上げられた場所である。このパイプオルガンは関東大震災の被災で取り壊される際に上野にあった東京音楽学校に寄贈され、今日でもその音色を楽しむことができる。

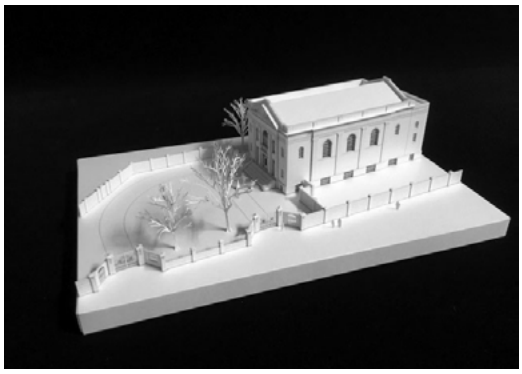
右図の下部にはギャラリー座席が数列あることが示されており、ホールが二層吹き抜けの空間が広がっていたことが読み取れる。

(5) 吉田与志也『信仰と建築の冒険』（サンライズ出版 , 2019）参照。

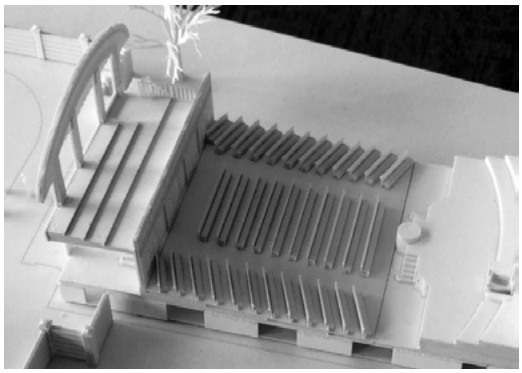


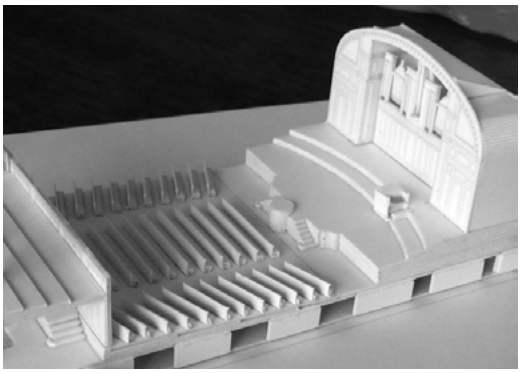
南葵楽堂　設計図面「三層の平面図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

今回保管されている設計図面をもとにした 1/300 の模型 (6) がある。写真の記録はあるが、こうした形で南葵樂堂（徳川音楽堂とも呼ばれる）はよりイメージしやすくなる。



南葵楽堂　模型写真 景観模型工房提供





南葵楽堂　模型写真 景観模型工房制作　芹野与幸撮影

(6)景観模型工房（吹田市）制作。ペーパークラフト・セット有り。http://keikan.art.coocan.jp

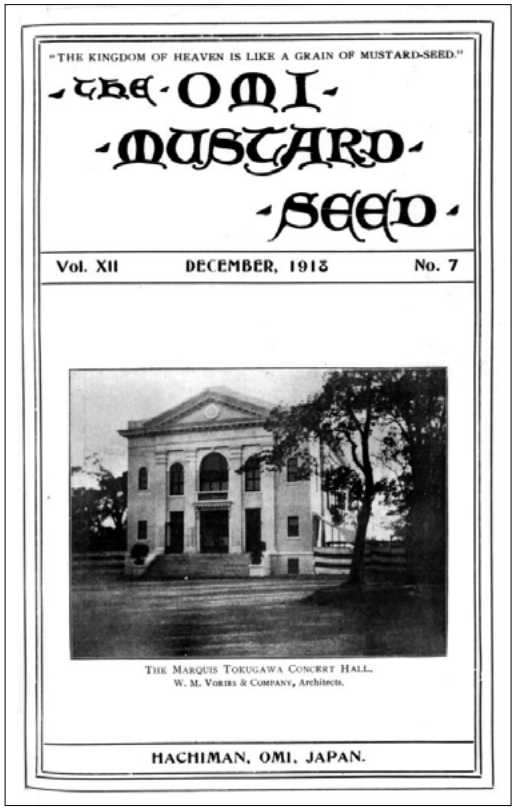
この徳川音楽堂の建築はヴォーリズ建築事務所としては従来のキリスト教関係者からのオーダーとは違い、規模や予算など格段に豪華であった。滋賀県の片田舎にある小さな設計事務所にしてみれば、この建築をきっかけに皇族だけでなく、政界、財界、教育界の人々に注目されるという機会に恵まれたことになる。近江ミッションは1907年以降英文の冊子『The Omi Mustard Seed』を年10巻、海外でヴォーリズの活動を支援してくれる団体や個人向けに発行していた。これらの90％以上は海外向けに発送されており、自らの活動だけでなく様々な論説やアピールを掲載していた。この冊子は母国で支援してくれる協力者を経て頒布されていた。1918年発行『The Omi Mustard Seed』には徳川音楽堂としてヴォーリズ自身がこの大プロジェクトに関して詳細に述べたものが掲載されている。

『The Omi Mustard Seed』表紙（1918年7月号）

施主である徳川頼貞夫妻の写真掲載など、頼貞とヴォーリズがいかに親しい関係であったかを垣間見ることもできる。

この表紙写真のある1918年12月号にはヴォーリズが音楽堂建設について以下のように詳細に報告を書いている。

> このようなホールには、音響の良さが何にも増して重要になります。加えて、コンクリートに囲まれた中で良い音響を得ることほど難しいことはありません。基本構造を形成するコンクリートの内側には、漆喰が約2インチほどの厚さで塗られています。床からフィートの高さのところに、大きな窓がいくつかはめ込まれ、その下にはオーク材の腰板が張ってあります。この腰板は、薄く、音をよく反響します。この腰板が効果的な反響板の役割を果たし、実際これがオーケストラの音に振動する。窓にかかる厚手のカーテンは濃い緑色で、窓の両側の壁を覆うほど大きくて、開けた時には柱から窓の端



『The Omi Mustard Seed』表紙（1918年12月号）

まで、閉じたときには柱と柱の間のスペースをすっぽり覆うのです。これが腰板の上方で音を柔らかく吸収する役割を果たします。音響効果を高める最後の工夫は、天井全体が４分の１インチの厚さのフェルトで覆われていることです。天井はハイリブのメタル・ラスで型枠をとり、アーチ型をしているので、このようにフェルトで覆われていないと、ひどい反響になってしまうのです。実際、音響効果は全く申し分ありません。話し声の微かなトーンの違いや楽器の非常に微妙な震えも、室内のどの位置からもはっきりと明瞭に聞こえます。このホールに入った人たちは、例外なくその照明に注目します。壁面のあちらこちらにある柱の頭部に隠れた電球からやわらかい光が漏れ、部屋全体を照らし、舞台では、上方のアーチ壁の梁の後ろに並んだ円柱形の電球が演奏者たちに強い直接光を当てますが、これは聴衆の目には当たらないようになっています。象牙色の天井のフェルトが間接的なひかりを吸収し、和らげますが、ものを読むには十分な明るさがあります。フェルトの天井の質感はとても心地よく、高さを感じさせません。家具備品類は私たちがデザインし、オーダーメイドで作られました。そうすることで、すべての設備の調和がとれます。

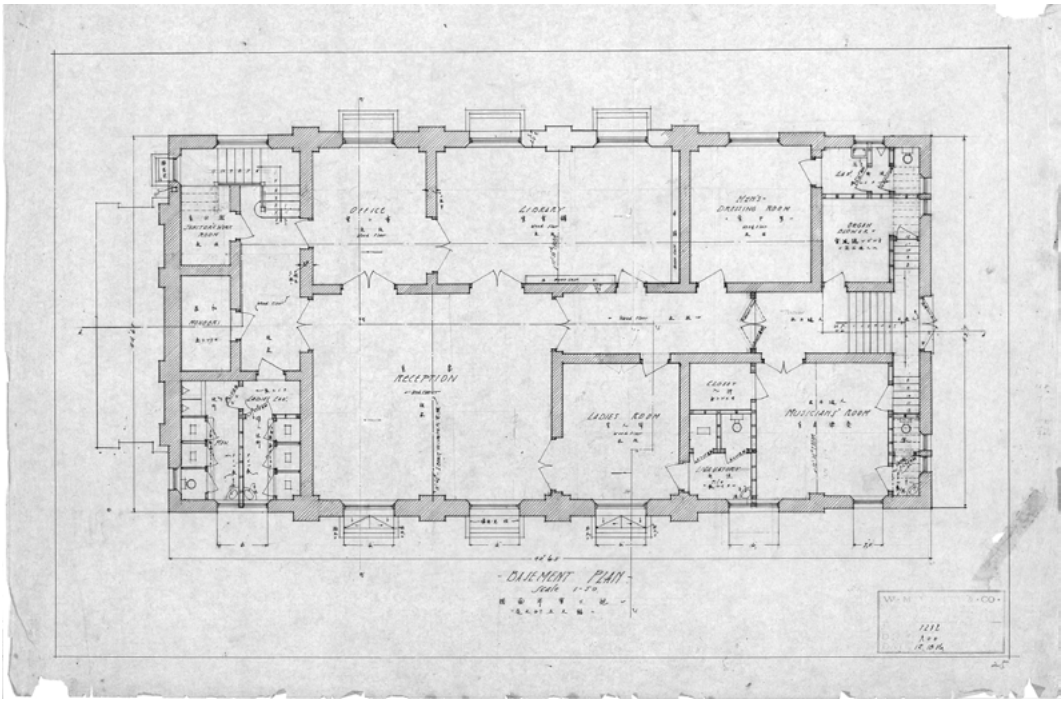
このことは、頼貞が当初設計を依頼したサー・ブルメル・トーマスも盛んにホールにおける音響環境について主張していた。建築家であると同時に幼いころから音楽に親しみ、大学時代にはパイプオルガンの奏楽など経験を持つヴォーリズにとってもこの音響に関しては特別の思いがあったことが窺える。

南葵楽堂のエントランス階段に立つヴォーリズ
公益財団法人近江兄弟社史料室蔵

以下図面を参照しながら建物の内部を観察してみたい。和歌山県立図書館で公開されている音楽文献は、この音楽堂に音楽文庫として収蔵されていた。

この図はホールの階下の平面図である。右側が入口で、この階には男女別の控え室、リハーサルなどのできるホール、音楽文庫書庫、事務室、売店などが用意され、本番には演奏家たちは左奥の階段からステージへと向かうことになる。

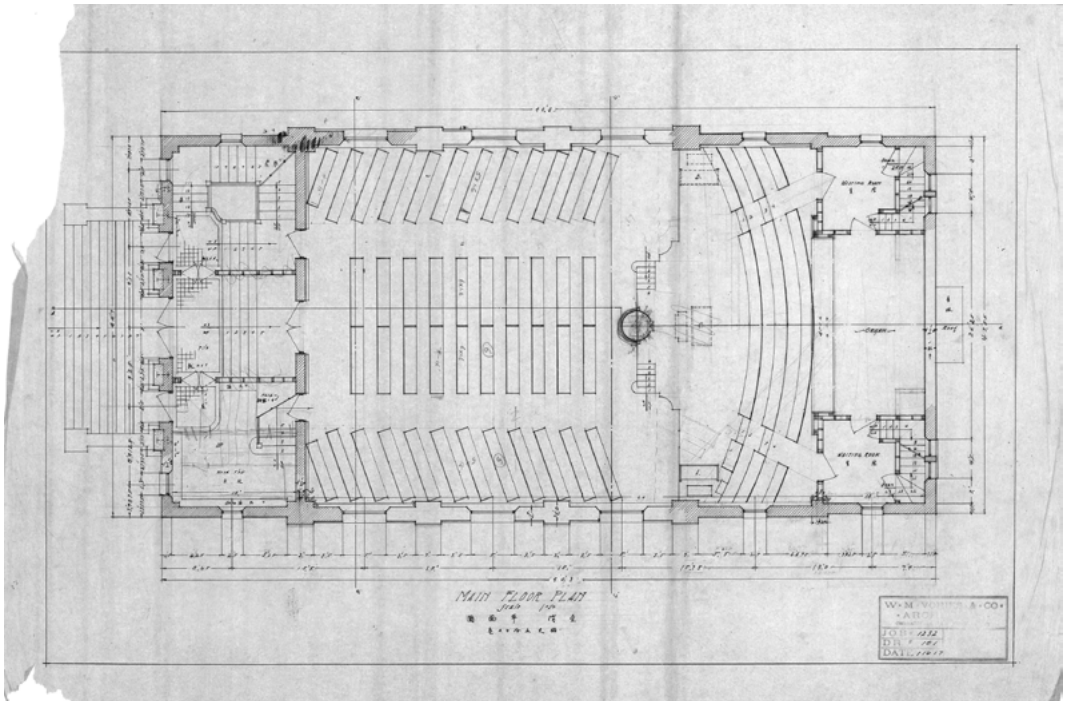
図面左側の奥にあるスペースはホールに設置されるパイプオルガンの下で送風装置などを設置するスペースとなる。南葵楽堂図書部の詳細については本紀要第２号に林淑姫氏が詳しく紹介している。特に目録カードを収納するボックスを納品した黒澤商店は、古い時代から欧米のタイプライターを扱う老舗で、こうしたものの導入は、ヴォーリズが近江セールズで海外製品の最新の商品知識を持ち合わせていたことから積極的に導入したのだろう。また、ここを半地下にすることにより、別途に楽屋を用意することなく、演奏家たちの動線も確保し、窓からの外光も取り入れる計画となっている。



南葵楽堂　設計図面「ホール階下の平面図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

その上階が次に示すメインホールである。外からの階段からエントランスホールに入り、さらに数段のステップを経て会場に入ることになる。ホール内はステージに向かって傾斜し、観客席からの視線はステージを見上げるのでなく、後部座席からも演奏家たちの姿を見ることができる。エントランスホールのちょうど上にあたる部分は、ホール内に含まれるギャラリー席となっており、そこへはエントランスホールから階段を上って入るようになっている。ステージ奥の両脇から演奏家たちがステージに登場できるよう階下の控え室からの動線が確保されている。

一番右手奥にパイプオルガンが設置され、オーケストラの編成のために広いスペースが用意されている。

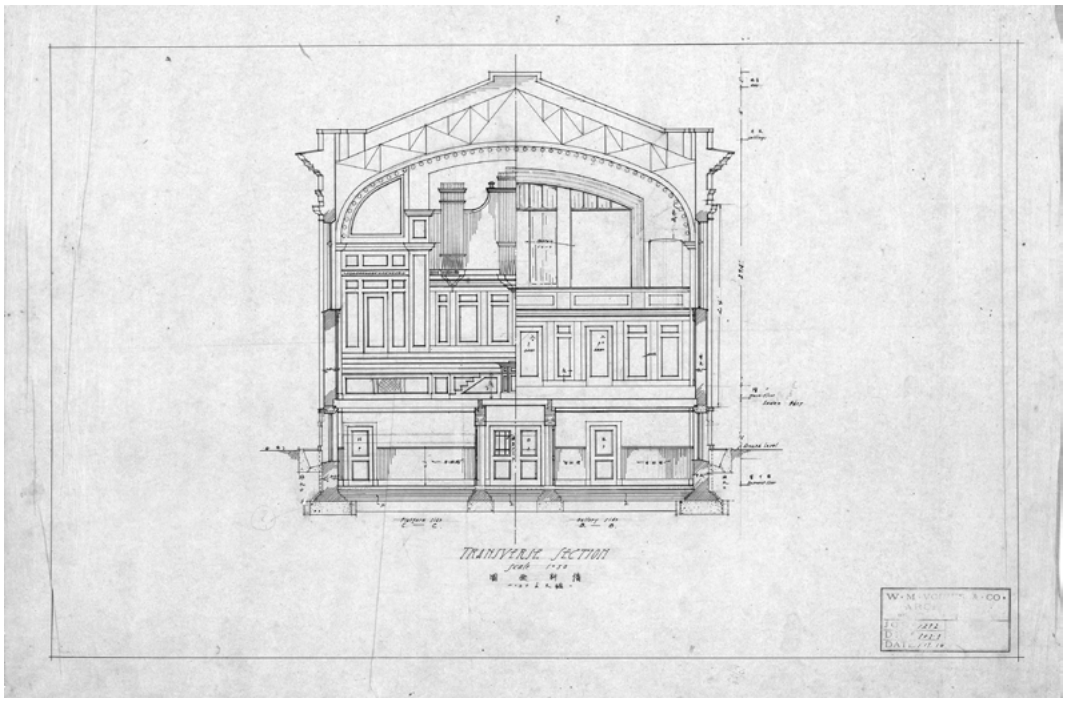


南葵楽堂　設計図面「メインホール平面図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

下はパイプオルガン設置前のリハーサル風景であろうと思われる。写真はギャラリー席からステージを見下ろしたものだろう。

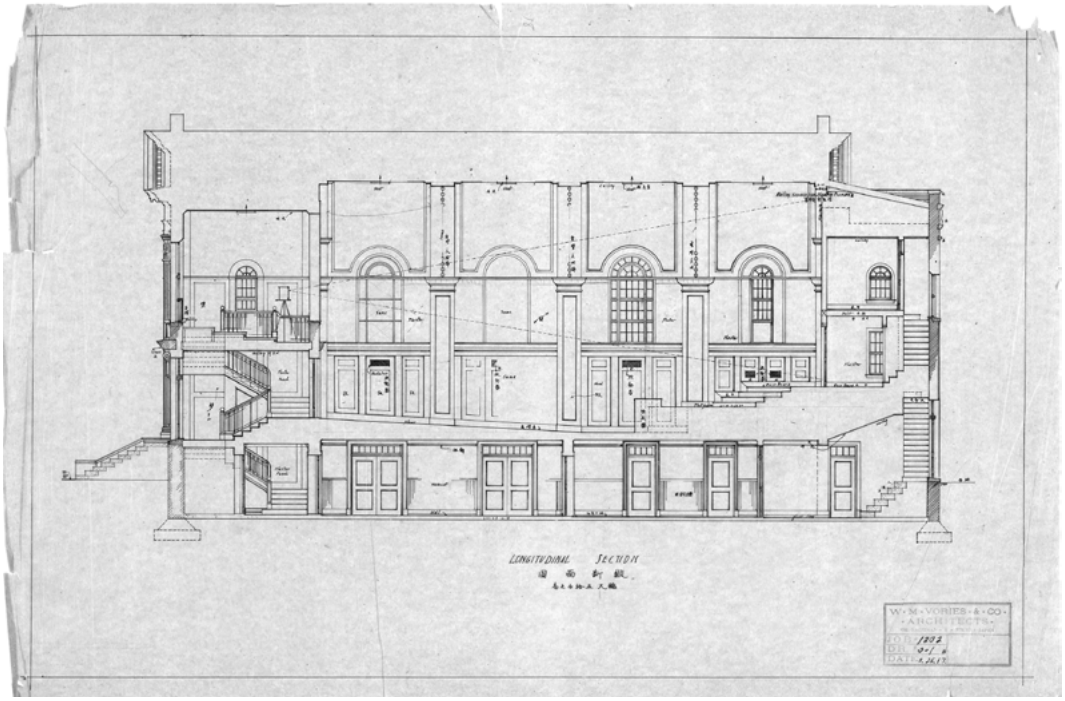
『The Omi Mustard Seed』より

この図面は所蔵されている図面の中でも特に珍しい一点である。よく見ると左側が正面のステージ側、右は後部のギャラリー側を表現している。すなわち、ホールの中央に立って、前方と後方を同時に観察したシミュレーションである。一枚の平坦な紙の上に建物を立体的に想像させる表現技法で、大変珍しいものだ。後部の上階にある大きな窓は外観写真にある正面玄関の上にある大きな窓である。



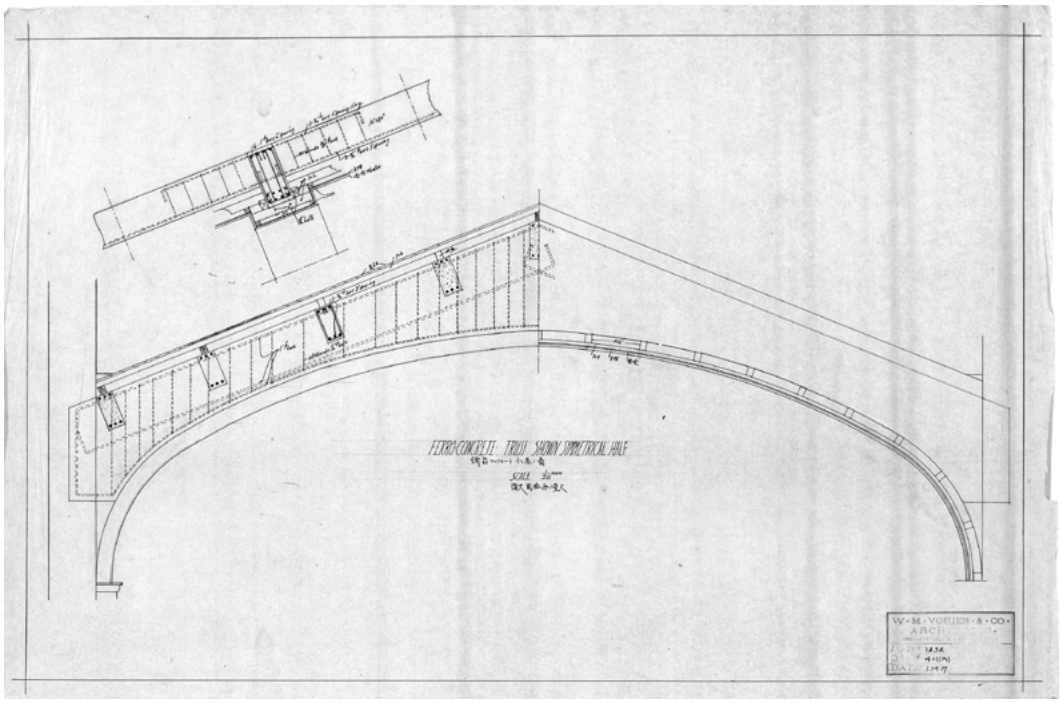
南葵楽堂　設計図面「二面が同時に描かれた横断面図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

ホールの断面図では半地下の施設、外階段からエントランスに至り、数段のステップを経て入るホール内に傾斜があること、またホールの奥行にはギャラリー席の奥まで含まれていることが見てとれる。

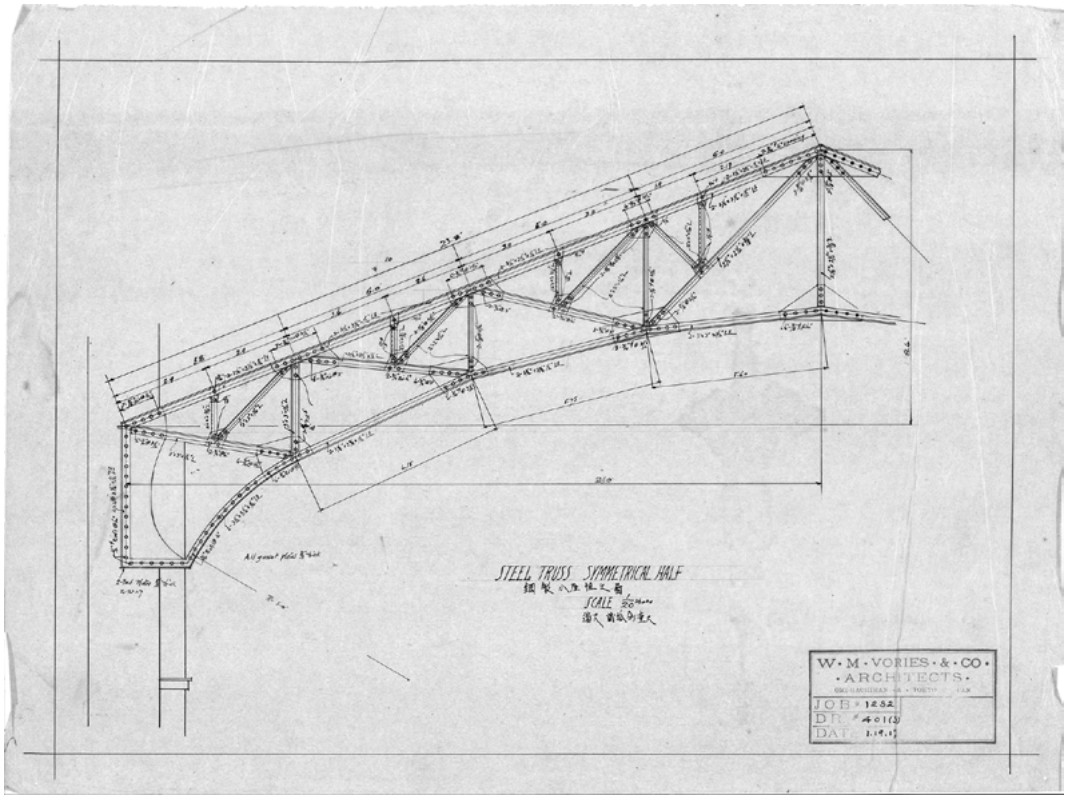


南葵楽堂　設計図面「縦断面図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

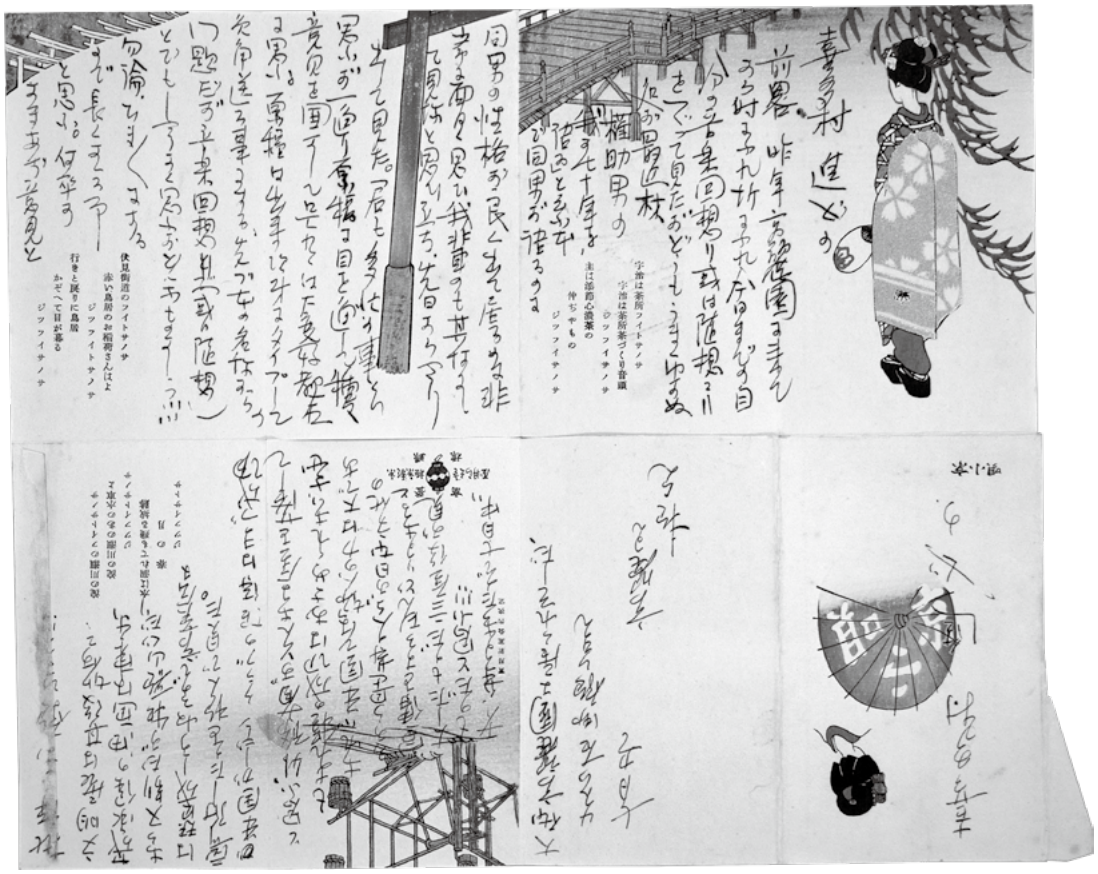
またヴォーリズ自身が述べている天井の仕組み、木による腰板壁やカーテンによる吸音、反響に関する配慮など当時としては画期的な仕様であったことがわかる。



南葵楽堂　設計図面「小屋の図」 株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵



ホール内の照明についても燈火の歴史上間接照明を用いた日本で最初の事例であった記録もあり、換気についても天井裏からの換気扇による仕組みが組み込まれている。



昭和10年７月５日付封書

喜多村進宛徳川頼貞書簡

和歌山県立博物館　竹中康彦

1. 昭和10年７月５日付封書

喜多村進どの

前畧　昨年高麗園に来てから、時にふれ折にふれ、今日までの自分の音楽回想＝或は隨想？＝をつゞって見たが、どうもうまくゆかぬ。処が、最近林権助男（男爵）の「我が七十年を語る」と云ふ本で、同男が語るのに、同男の性格が良く出て居るのに非常に面白く思ひ、吾輩のも其様にして見様と思ひ立ち、先日からやり出して見た。君も多忙の事とは思ふが、一通り原稿に目を通して種々意見を聞さして呉れゝば、大変好都合に思ふ。原稿は出来次第にタイプして、兎角送る事にする。先づ本の名称からの問題だが、音楽回想（或は隨想）とでもしやうかと思ふがどんなものかしら!!

勿論、ひまひま（暇々）にするので、長くかゝる事と思ふ。何卒（何とか構わず）かかまあず意見と批評をお願ひする!!

文明展は其後如何？茂承侯の油絵は東京なら又別だが、和歌山ぐだり（下）は賛成しかねるので、育英会に寄附したのを頼んで見た。

米国ガーデンクラブの招待はまづ成功と思ふ。外務省がそんなに金を落しても、あれ程の成功はおさめられない。さやなれば（やう）、米国では婦人の力は大であるから、是等の人々が日本文化の宣傳をするだんどり（段取）になると大したものだ。二三年後が見ものだと思ふ!!

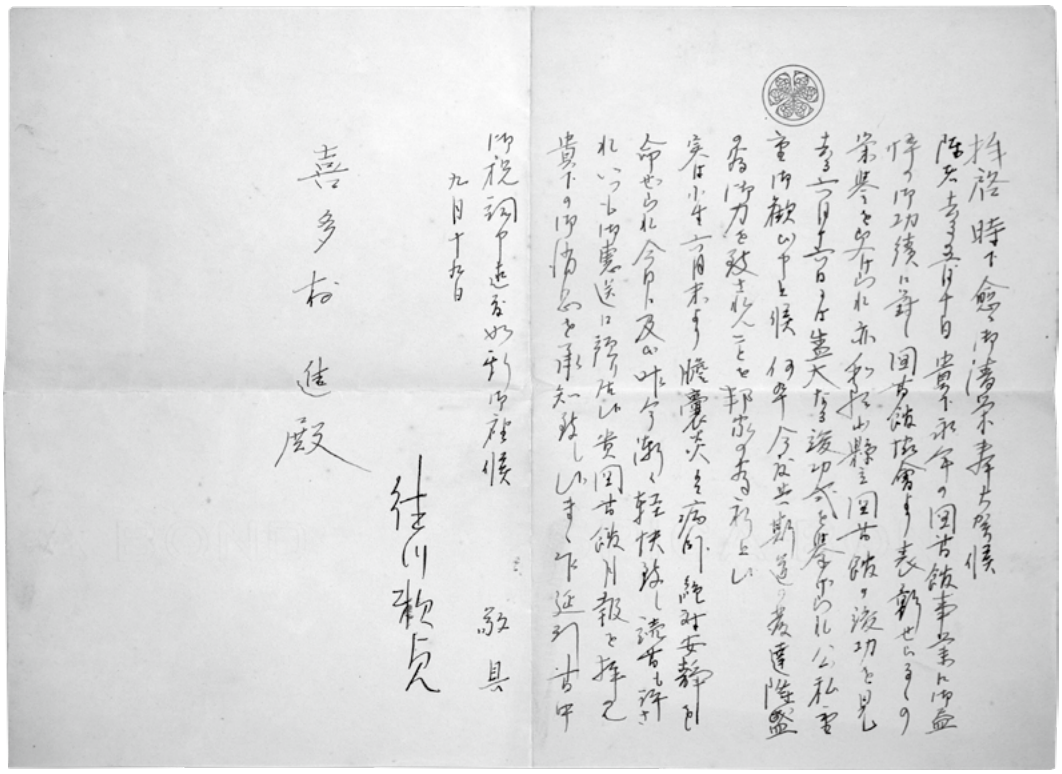
少し、楽になったので七月中は大体高麗園に居られそーだ。

先は右お願ひまで。

七月五日　　高麗えん（園）

頼貞

（＊京都・さくらい屋製の色刷挿絵入り折紙形便箋１枚を使用、洋形白封筒入り、7月6日付神奈川（以下不明）局消印、３銭切手、喜多村の住所は「和歌山市宇須南町85」、裏書なし、整理番号11）



昭和13年9月19日付封書

2. 昭和13年9月19日付封書

拝啓　時下愈々御清栄奉大賀候。

陳者、去る五月十日、貴下永年の図書館事業に御益悴の御功績に對し、図書館協會より表彰せらるゝの栄譽を受けられ、亦和歌山縣立図書館の竣功を見、去る六月十六日にて盛大なる竣功式を擧げられ、公私重重御歓び申上候。何卒、今度共斯道の発達隆盛の爲、御力を致されんことを邦家の為願上候。

実は、小生六月末より胆嚢炎にて病臥絶対安静を命ぜられ今日に及び、昨今漸く軽快致し読書も許され、いつもご恵送に預り居候貴図書館月報を拝見、貴下の御消息を承知致し候まゝ、乍延引書中御祝詞申述度、如斯御座候。　　敬具

九月十九日

徳川頼貞

喜多村進殿

(＊署名以外は代筆、紀伊徳川家の家紋入り便箋1枚を使用、洋形白封筒入り、9月19日付（局名不明）消印、4銭切手、喜多村の住所は「和歌山市関戸高松坪179」(以下ほぼ同じ)、裏書なし、整理番号1)

3. 昭和14年５月16日付封書

喜多村進殿

外務省顧問ベティー博士（Dr. Thomas Baty) ーケンブリヂ大学名誉教授にして國際法の世界の大家、日本滞在二十五年ー小生の親友、来る十九日及至(貴)廿二日、和歌山見物に参らるゝ由にて、き方万一御分りの節はよろしく御案内願ひます。

小生の和服姿御覧に入れます。

十六日夕　　頼貞

(＊「THE STUDY "MONT PARNASSE"」の絵葉書1枚を便箋として使用、和装写真同封、洋形白封筒入り、5月18日付目黒局消印、４銭切手、裏書は緑色住所印（枠付)、頼貞の住所は「東京市目黒区上目黒７丁目1118」(以下同じ)、整理番号2－1)

4. 昭和14年10月22日付封書

3）十一月五日（日）

午後五時半

日伯中央協会長として　新大阪ホテル

大阪支部発会式

高松宮両殿下台臨

と云ふ具合なので、自由の時は五日の午前から午後四時頃まで〻すなりと云ふ有様だ。万か一、其間に御目にか〻れ〻バ幸だと思って居る。泊所は新大阪ホテル。猶、小生下阪の事は、大阪新聞にも記載さる事とは思ひますが、又色々言はれるのもいやですから、余り言はないで、貴台のみ承知して置いて下さい。

十月二十二日　　頼貞

（＊赤倉観光ホテルの絵葉書1枚を便箋として使用、３の封筒に同封、前2枚分欠･封筒欠失、整理番号2－2）

5. 昭和15年1月10日付封書

喜多村進殿

新年早々、御手紙有難く候。

昨年十一月には、偶然にも和歌山駅頭にて御目にか〻る事が出来愉快でした。五年前紀州家の事件が起って後、始(初)めての歸郷でありますので、此際スタートを新しくしたいと考へ、貴志家令の同伴を依頼もした訳でして、白濱方面では同家令が右の意を体し、かなり効果的であったと思ひます。市の方面は色々な事情で、地方の様には仲々困難な事は百も承知ですが、だんだんと新地を開ひて行きたいと考へて居ます。先般の歸京に際しても、縣当局と市当局とに聯絡をとったのも其表れと思って下さい!!私共の郷里へ歸ったについてのザックバランの評般(判)をもらして下さい!!大ひに参考になります!!

世の中は所謂新体制とやらで、やかましい様ですね。然し、私には少しも理解できませんし、換(却)てマッショウ(末梢)的な事が多い様ですね。矢張り新体制の行く道は、モラールの方面でしやう。左様なれば精同と同じ運命になって消へて行くのではないでしやうか？左様は云ふもの〻、世の中が此処まで来れば、来る処まで行かなければ止みますまいよ!!其時が内外共に運命の定まる処と思ひます。

私は今、極秘に政府の方から色々の事を云って来ます。海外の或る重要なポストをオファー offerされたはかりで居ますが、自身としては、まだ決し兼ねて居ます。

徳川家の整理も、皆さんの一方ならぬ御盡力で、之亦新しいスタートで出発するまでになりましたから、之からは何か社会的に一層努力をしたいと思って居ます。

今年は吾々もSilver wedingです。ジジババになったものですね!!　　頼貞

一月十日夕

（＊薄青色罫線の白便箋4枚を使用、洋形白封筒入り、1月11日付目黒局消印、4銭切手、裏書は緑色住所印（枠なし）、整理番号3）

6. 昭和15年8月3日付封書

喜多村進殿

今夏は、東京地方は殊外暑さ厳しく平公(閉口)して居ます。貴地同様の事かと思ひますが、御変りありませんか？

さて、今月國際文化振興会主事青木節一君が縣教育会（？）の招きにより、八月十日頃勝浦地方にて文化事業の講演をなす予定にて、其歸途海南市にて文化懇談会を催す筈に聞きましたので、君への紹介状を手渡して置きましたから、何分宜しく願上ます。兼々地方の文化関係に關して居らる〻君の指導にて、青木君を中心に種々会談され〻ば有益かと考へます。猶、青木君には縣知事と学務部長へ紹介して置きました。君も御承知の事と思ひますが、青木主事は永らくジュネバ(ジュネーヴ)の國際聯盟に關係し、在外勤務が永く、文化振興会創立当時より主事をして居ります。

私達家族は、今年は山中湖畔に来ました。気候が涼しい上に、ヨットとゴルフが出来るので、頼韶は大変喜んで居ます。御影、皆丈夫です。此手紙は、今此処に番地帳を持参せず、君の高松坪の番地を忘れたので、図書館宛に差(用)し出しました。悪しからず。

私は始終要事があるので、東京へ行ったり来たりして居ます。家族は多分九月初めまで居る心算です。

八月三日　雨の音をきゝつゝ
山梨縣山中湖畔
フジ、ニューグランドホテル、ロッジ
頼貞

（＊フジ·ニューグランドホテル·ロッジの便箋3枚を使用、洋形白封筒入り、8月5日付山梨山中局消印、4銭切手、喜多村の住所は「和歌山縣和歌山市縣立図書館気付」、裏書なし、整理番号4）

7. 昭和15年8月31日付封書

喜多村進様

手紙を有難う。青木主事には色々の都合で、ゆっくり話さるゝ機会を失はれた模様。甚だ残念でした。K.B.S.（国際文化振興会）のstuffの人々は可成り多忙なのと、会務で出張する時は、前以てarrangeされてない以上、時間きりきりに行動して居ます。其事は吾々の間でつい常識になって居たので、前以て申して置なかったのは私の失敗でした。種々御配慮、有難う存じます。

先般来非常に御心配して下さった図書館問題も、貴台方の格別の御配慮に依り、円満に解決を得ました事を、心から深謝致して居ます。右については、相談役（徳川家）の人々とも相談して居て、何れ、何んとか具体的な結果を得る事となりましやう!! これも合せて御礼申します。

私の方から縣立図書館に寄贈した本も、たまりたまって可成な部數になった事と思ひます。あまり大した内容のものでなく、御恥しく思ひます。さりながら、それ等を通じて私の文化方面の活動についてなり、又図書についてなりの、貴台の關係さるゝ方面に、多少プロパガントして頂けませんでしやうか。貴地方面ては、とかく私を誤解して居る人々も多いらしく思ひますので、良い機會とも思ひます。何分、よろしく願ひます。

今度、徳川家の家令が変更されました。一色少将は一身上の都合で辞任され、新らしく主計少将貴志正雄氏が家令職に就かれました。同主計少将は貴志村の出身で、帝大の経済を出て経理学校の教官をされ、金融の事を講義されること四年、其後諸々方々を轉任され、關東軍経理部長を最後として現職を去った人で、一色少将の様に温厚な方です。徳川家としても、一色少将の様な温厚徳実な人を失ふ事は誠に残り惜しく思はれますが、同少将は大本營直營の部署につかれ多忙になられたので、今後矢張相談役として、外部より種々助力される事になりました。

一色少将にも劣らず温厚徳実な、且経理に明るい新家令を得、其上忠実其者の様な辻本家扶（元鳴神村村長）を得て、私達は益々努力して、吾々の目的をはたしたいと念願して居ます。

私共は明一日東京に歸ります。

八月卅一日　　山中湖畔　　頼貞

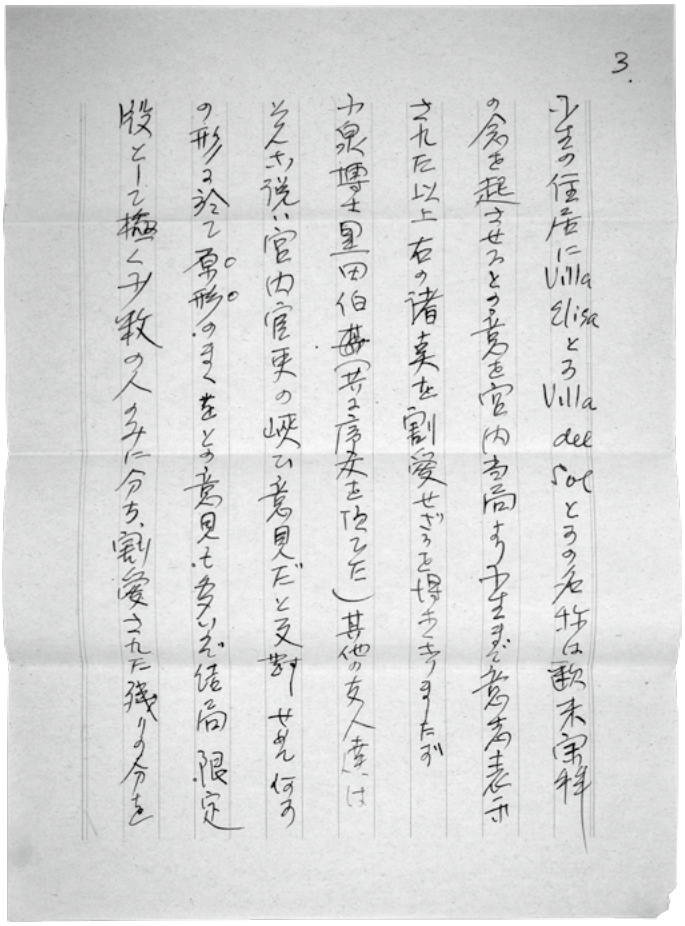
（＊フジ·ニューグランドホテル·ロッジの便箋4枚を使用、洋形白封筒入り、9月1日付静岡御殿場局消印、4銭切手、裏書なし、整理番号5）

8. 昭和17年２月７日付封書

喜多村進殿

極寒の侯、其後御体の方如何？先程、大阪花外樓にて、南海鉄道株式会社主催の宴会の席上、偶々花田先生(比露思)に御目にかゝる事を得し機会に於て、貴台の事をも依頼致して置きました。其時の言葉の中にも、体が弱いのでとの事などあり、今後充分生(静)養の上、郷土の文化発展の上に益々奮励努力されんことを切望して止みません。

さて数年前より小生の計画し、貴台の御助力をも願ひました例の「薈庭楽話」も、春陽堂主人の厚意により、愈近日世に出る様になりました。然し、初め計画したよりも或部分を割愛せざるを得ない事情が生じ、昨年十一月出版が、其為め今日まで延びし次第です。其訳は、記事中殿下方の事項が多い事は、宮内当局に於て理由如何に拘らず、発表を望まざる由にて、其他小生の住居にVilla ElisaとかVilla del Solとかの名称は、欧米崇拜の念を起させるとの意を、宮内当局より小生まで意思表示された以上、右の諸点を割愛せざるを得なくなりましたが、小泉博士(信三)・黒田伯(清)（共に序文を頂ひた）其他の友人達は、そんな説は宮内官吏の峡(狭)ひ意見だと反對し、せめて何かの形に於て、原形のまゝをとの意見も多いの



昭和17年2月7日付封書(部分)

で、結局限定版として極く少数の人のみに分ち、割愛された残りの分を普通版として世に発表することにしました。

貴台には、初めから此「薔庭楽話」には關係された事では(あ)り、又失礼だが貴台の半生を送られた仕事でもあり、共に歩んだ道の思出草として其限定版を一部進呈します。

以上申し上げた事情を御含みの上、御一読の上、御気附きの事がありましたら御知らせ下さい。又貴台の御感想を伺(へ)ひへば幸甚です。寒さの折、充分御体大切に。

皇紀二千六百〇二年

二月七日夜　　頼貞

（＊灰色罫線の白便箋4枚を使用、長形白封筒入り、2月9日付目黒局消印、4銭切手、裏書印刷、整理番号6）

9. 昭和18年8月15日封書

喜多村進殿

其後、御体の方は如何。私の南方行の事は、其後軍の複雑な事情の為め、中止して了った。但し、表面はなんとはなしに止めた事にしないと、軍事上の秘密になる。従って、年余の暑さで体も弱ったと云ふことになって居るので、左様承知して置いてもらいたい。

一ヶ年の間に、内地も色々な方面で大なる変化を示して居る。一寸田舎者になったので、又勉強しやうと思って居る。誰にも云って呉れては困るが、秋になったら和歌山の田舎の方を巡うかと思って居る。又御目にかゝれると楽んで居る。頼韶も愈この八月末に大学の卒業試験(験)で、先ず大学生活の終止符を打つことになった。

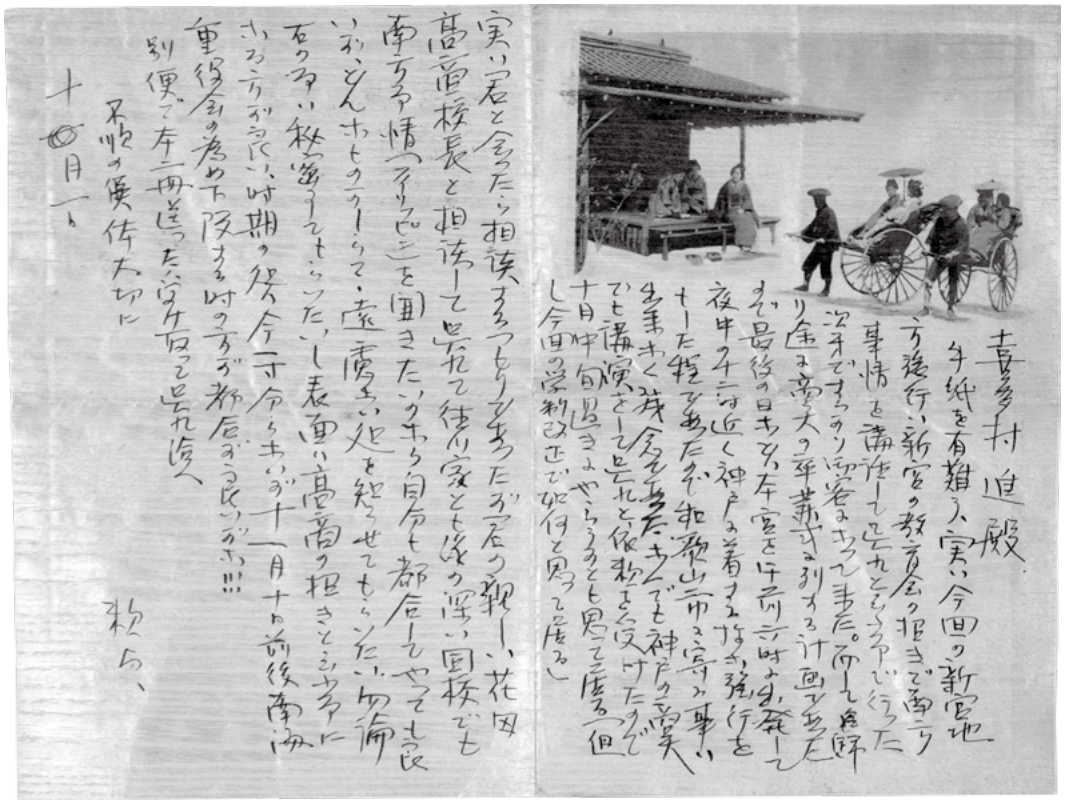
今その勉強の為め、二三日前に下神した。寶子は七月に「スイトウ（水痘）」をやって、愈く全快したらヂフテリアをやって三週間余入院、五日程前に退院、数日後に保養の為め箱根にでもやらうと思って居る。小生は例により、泰(タイ)の外相やら中華の文学者やらが来て多忙だが、少々やせたぐらいで丈夫なので安心して下さい。比島行の目的で、和歌山の川島教育会長の息（二男）俊二君を頼んだが、病気の為め辞されて、今市に帰って居る。現在は文化振興会の高野君(武郎)が秘書役をやっている。

暑さも厳しい時だし、十分体を大事に。

九月上旬には、会社の要(用)事で大阪まで行きます。其後の事は未定!!

八月十五日夜　　頼貞

（＊イタリア製絵葉書３枚（「2219 ROMA. Stanze di Raffaello San Pietro in Carcere. (Dettaglio).」「Siracusa Avanzi del Tempio di Diana」「1439. ROMA-Piramide di Caio Cestio」）を便箋として使用、封筒欠失、整理番号12）



昭和18年10月1日付封書

10. 昭和18年10月1日付封書

喜多村進殿

手紙を有難う。実は今回の新宮地方旅行は、新宮の教育会の担当で南方事情を講話して呉れと云ふ事で行った次第で、すっかり御客になって来た。而して歸り途に商大の卒業式に列する計画であったので、最後の日には本宮を午前六時に出発して、夜中の十二時近く神戸に着する様な強行をもした程であったので、和歌山市に寄る事は出来なく残念であった。なんでも神戸の商大でも講演をして呉れと依頼を受けたので、十月中旬過ぎにやらうかとも思って居る（但し今回の学制改正で、如何と思って居る）。

実は君と会ったら相談（比露思）するつもりであったが、君の親しい花田高商校長と相談して呉れて、徳川家とも縁の深い同校でも、南方事情（フィリッピン）を聞きたいのなら、自分も都合してやっても良いが、どんなものかしら？遠慮ない処を知らせてもらいたい。勿論、右の事は秘密にしてもらいたいし、表面は高商の招きと云ふ事になる方が良い。時期の処は今一寸分らないが、十一月十日前後、南海重役会の為め下阪する時の方が都合が良いがな!!

別便で、本二冊送った。受け取って呉れ給へ。

不順の侯、体大切に。　　頼貞

十月一日

（＊色刷人力車と茶店の挿絵入り金地刷毛目便箋1枚を使用、同じ意匠の洋形封筒入り、10月2日付目黒局消印、5銭切手、裏書は緑色住所印（枠なし）、整理番号７）

11. 昭和19年8月9日付封書

喜多村進殿

三日附の手紙を有難う。昨夜、箱根宮の下フジヤホテルから歸邸して落手した。有難う。和歌山の近状を知らせて呉れて有難う。降雨のないのは困ったね!!私共は、去る四日から昨八日まで宝子を連れて、フジヤホテルに出掛けて居た（頼韶は足が少しまだ悪いので留守番）。同ホテルは、イタリ・ドイツの人々の疎開者（大体大使館關係)と知名の人々で、相当客が居た。島津

忠重公夫妻・高橋是賢子爵夫妻・池田成彬氏夫妻・森村男(開作)夫妻等の顔がそろって居る。小生は十四日再びフジヤに行き、十六日の小生の誕生日を一家して箱根で送り、十八日の侯家家政相談会に出席して、多分廿日頃下和、四五日居る心算です。六三園の方の事は色々と有難う。家政婦が居なくなったことは誠に困ると思ふ。奥さんは自分でがんばるつもりで、其意気や誠に勇ましく（？）で、時節柄結構なことではあるが、何しろ夏の暑さ－特に和歌山の暑さ－には相当体も参るだろうし、何分にも子供が多いから、いくら気がはって(張)居ても、万が一体が悪くなった時には、どうにもならないことを心配する。奥さん自身は他人が居るとどうとか云ふが、本当の根底は少しでも多く小(子)供達に食事をさせてやりたいと云ふ母親らしい考へからと考へるが、もっと高所から考へて行かねばならないと私は思ふ。だから是非君の奥さんからでも説いてもらって、出来るだけ早く家政婦なりなん(何)なり、手助けを置く様に切にお願ひする!!風呂の方も、辻本老に頼んであるのだが、先生田植で多忙と見へ、仲々して呉れないから、君から恐縮だが、一方辻本老に催促して、一日も早く大工なり舟大工なりに来て直してもらい、数ヶ月振りで風呂に入れる様に手配願へまいか？万が一、其方が悪ければ、恐縮だが金森さん(誠之)の方の手まで大工を頼んでもらへまいかしら？度々辻本老には言ふのだが、君達や濵地さんとは違って、六三園の一家は和歌山の土地には少しも親しみはないのだから、全々君達を頼んで来たことだし、配級(給)はない。辻本のじいさんは見巡りに来ないとなると、心ぼそい感じを頂く様に自然なり、其結果は土地が嫌になると云ふことになると、小(子)供の教育にも及ばし、甚だよろしくないと考へる。一方、辻本老が田植の一心になって居る心持ちも分るから、其辺はすまないが、君達御両人で、出来るだけ六三園を助けてやって下さい!!御願ひします。

噂に依れば、本月末（卅一日）召集で臨時議会があるらしい。従ってそれまでは下和しても歸らねばならないので、今回は或は数日しか居られないかも知れない（但しこの点は六三園には言はないで下さい）。何れ決定次第、電報で知らせます。

八月九日朝　　目黒にて

頼貞

奥さんによろしく。

輕井澤の夏期大学に招かれたが、よしました。

（＊柱に桜花印のある原稿用紙3枚を使用、長形白封筒入り、8月9日付目黒局消印、10銭・4銭切手、裏書は印刷、東洋文化学会7月18日付案内状同封、整理番号8）

12. 昭和19年？9月5日付封書

九月三日附の速達便、昨夜（四日）宮下より歸京、拜見しました。辻本老との会見の結果については、小生が考へて居た最悪な場合に直面した様に思はれます。辻本老の辻氏(邦助)の月旦を知りたいです。辻本老は、辻氏との会見の場合、どの様な態度であったのでしやうか？辨護して呉れたのでしやうか。或は又まさか或コミットをして来たのではないでしやうね!!其辺、細く御知せ下さい。小生も、辻氏が六三園一家に對して、全面的な拒否の態度（今は表示されて居ないが、第六感でそんな気がして居る）は有る(り)得ると考慮の中に入れては居たが、辻氏も仲々細く頭の巡る人だから、仲々篤と考へて居ることゝ思ふ。我輩の辻觀をソッ直(率)に云へば、矢張り軍人でデリカシがなく、人の感情などは考へず、小心で細心で其上非常な感情家で、それだけに非常に直感的で相当頭が鋭い。（直感力は感情家の通例だ。）それを飛行機操縦で、一層強力にした感がある。　（ウラを見て下さい）

而して支那に六年居た間に、所謂大陸の大人形になりラフな態度が多い。あれだけの才能で、あれだけの大会社の社長を東京でして居たら、モットモットリファインされたのにと残念な気がして居る。其様な次第だから、可成りオーヅッパ(大雑把)に（感情的には）物をやる人と見て居る。貴台の正に云ふ様に、辻氏には相当小生の愛着の気持ちも述べて居るから、十二分に承知して居るにも抱(拘)らず、目を掩ふて居ると思はれ

る。今さら申すまでもなく、小生の態度は絶對的であるのに変りはない。そこで小生としては、背水の陣を引いてかゝるつもりだ。君だけに底意を云へば、六三園一家の為なら、場合によっては頼韶に代を譲っても良いとの決心まである。（この事は絶体(対)に他言無用）その様な次第だから、この問題に関する限りは我輩も強く出るかも知れない。元来、辻氏の考へ方は極めて消極的で小心的だと思ふ。六三園の問題は、徳川家の根本問題と切り離して考へ、小生のシデカシた事なのだから、小生のリスクに於て、小生の友人達にまかせて置けば良いと思ふ。尚六三園の問題は、小生の親友達（濵地、黒田伯、山縣公、山田君等）とも充分相談して、是等の同情ある友達の手で、先ず解決を計りたいと思ふ。

それにしても万が一辻氏が、本月廿日過ぎにでも下和して、直接六三園にでも赴かれて直接談判(パン)でもされては、大ひに困るから、それだけは辻本老と貴台と是非協力して、そんなことゝない様にチェックしてもらいたい。（朱傍線）万が一、そんな最悪の場合が起ったら、場合に依っては濵地さんを招くなり、いよいよ手がない時は止むを得ない時は、金森氏（これは万止むなき場合のみ）の力をかりても、チェックする様にして下さい。御願いします。勿論辻氏の意見の事などは、六三園の方には傳って居ないでしやうね!! 私としては、極力六三園の平和を乱したくないのです。その事は充分理解して下さって居ることゝ思ひますが…。まさか辻本老がぼけて、一寸でも辻氏の意見を洩らすことはないでしやうね!! 其辺何分よろしく願います。

九月五日　　頼貞

二伸

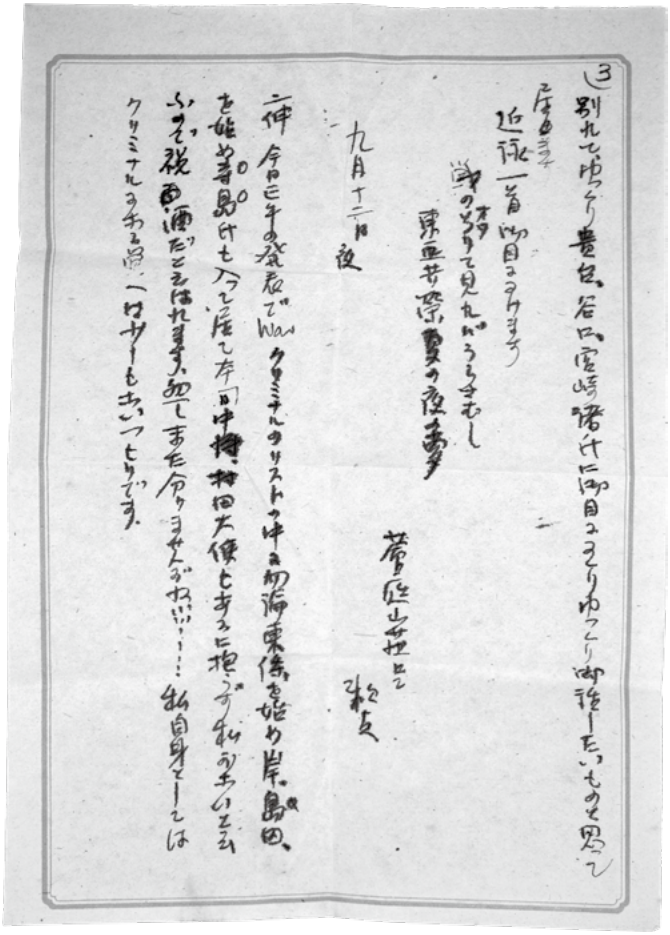
万が一、六三園の方に直接談判があった場合は（手違ひ其他で）、なんとかして六三園夫人に失望させない様に力を入れてやって下さい。六三園がどこまでもがんばって呉れなければ、なんにもならないからね。其辺表になり裏(ウラ)になって、助けてやってください。　以上

（＊柱に桜花印のある原稿用紙2枚3面を使用、洋形茶封筒入り、切手切取により消印不明、速達印、裏書は印刷、整理番号13）

13. 昭和20年9月12日付封書

喜多村進殿

九月九日附の手紙、今日（十二日）落手した。有難う。病気だった相(そう)だが、其後如何。愈図書館も元の古巣に帰った由、何より結構と喜んで居る。君の手紙の中にも有る様に、今後は比較にならぬ困難が吾々を襲ふであらうと同時に、相当米国の勢力がシュンシュンする事も事実と思ふけれど、平和



昭和20年9月12日付封書(部分)

になった今日、米国は敵ではないのだから、御互が充分に理解しやう事によってのみ新日本の発足があると私は信ずる。一方、今日まで言論の自由が許るされてなかったから当然とは思ふけれど、国民が余りに世界の情勢や世界の日本に對する思惑を知らなさすぎると思ふ。今日では日本は日本の自分自身の姿を見失っていったのだ。世の中の風は、日本人が日本で想像するよりは遥に冷たい。今の日本は何の背景もなく、支へもなく丸裸で立たされて居ることをよく了解せねばならない。当(同)時に、日本人は余りに米国人を恐れすぎで居ると思ふ。成る程、アメリカは文化面に相当発言もして居るし、又今後も発言するであらうが、何を云っても御互がよく理解し合ふ事が第一である。東京にも、十日までに二万七千の進駐軍が入り込んで居る。仲々面白シーンも出現して居る。全体として国民ががっかりしたかも知れないが、明るくなった事は事実だ。而して、考へ様によっては相手がロシアでないだけ幸だと思って居る。

長保寺の方は、先ず皆元気な様子なので安心して居る。片岡町の方は、家主の金井氏が長男が帰還するので、帰って古巣に住むとか云う話で困惑して居る。幸金森博士か同じ処に疎開して居るので、出先で相談する事に依頼したが、又宿無しになるもの面白くないので、谷口先生になんとか家はあるまいかと御願ひした。市内も大半焼けたので、仲々困難な事は百も承知の上ではあるが…。幸、谷口先生か御仲介で宮崎諦實氏が片岡町に来て呉れ、「あがら会」にも入会して呉れたので、或は同氏は相当顔も廣い事故、同氏の手でなんとかならないかと、先生にも又同氏にも御頼みしたが、何かよい家があったら谷口先生とも相談して下さい!!

私は、多分侯家の要(用)務で、今月末か来月早々下和することゝならうが、或は辻家令が同道することにならう。其時は公務云々を終へてから、辻中将と別れて、ゆっくり貴台、谷口、宮崎諸氏に御目にかゝり、ゆっくり御話したいもの思って居ます。

近詠一首御目にかけます。

戦のちり(オワ)て見たがうらさむし
東亜共栄夏の夜夢

九月十二日夜　　薈庭山荘にて
頼貞

二伸　今日正午の発表でWarクリミナルのリストの中に、勿論東條(英機)を始め岸(信介)、島田(嶋田繁太郎)を始(初)め、寺島氏(健)も入って居て、本間中将(雅晴)、村田大使(省蔵)もあるに抱(拘)らず、私がないと云ふので祝酒だと云はれます。然し、また分りませんがね!!…。私自身としては、クリミナルになる覚へは、少しもないつもりです。

(＊水色枠の便箋3枚を使用、洋形白封筒入り、切手2枚のうち1枚は6銭切手、残り1枚は離脱して消印も不明、裏書(手書)住所は「神奈川縣足柄下郡強羅1300 薈庭山荘」、整理番号9)

14. 昭和21年9月28日付葉書

其後元気に御活躍の事と存じます。小生も議会にて多忙平公(閉口)して居ます。今回松下氏・岡崎氏・田所氏三氏と協議の結果、南町も愈東京移轉と決定しました。尤も、まだ家は出来ないのです。間借りで当分やるつもり。それや之やで、去る廿五日西下、廿六日長保寺に一泊、廿七日夜行にて東上する様な始末。次回は多分十月十日頃下和しますので、その折は小生主催にて「アガラ会」でもしたいと思って居ます。谷口氏とも御相談下さい。

(＊15円官製葉書、9月30日付(局名不明)消印、差出日は9月28日、差出（手書）住所は「目黒区上目黒7－1118」、3の封筒に同封、整理番号2－3)

15. 昭和22年8月12日付葉書

暑いですが、変りない事と思ひます。例の和歌山の荷物が、U氏の不誠意から漸々と遅延して非常に困って居ましたが、二三日前にやうやく着きましたが、まだ図書館にある分が残って居て、それを出来だけ早く送り出す様に依頼してありますが、今度の荷送りも仲見(中身)を研討(検討)せずにやたらにした為、ガラスが破れ平公(閉口)して居ます。そちらの時にはせいぜい監督して、その様にない様に願ひます。特に破れものが多いので、何分よろしく御頼みします

今日まで夏物がないので、隨(随)分困(責)りましたよ。「カヤ」がない為、蚊にせめられ、

空襲以上の目にあ(遭)ひました。誠意のない程、やり切れないものはありません。今度、辻本君補助として、西川秀夫君に属託を（徳川家）頼みました。辻本も老体ですからね!!

（＊15銭官製葉書に35銭切手貼付、8月14日（局名不明）消印、差出日は8月12日、差出（手書）住所は「東京都品川区荏原7－504」、整理番号10）

【解題】

和歌山県立博物館には、和歌山市出身で南葵文庫・南葵音楽図書館や和歌山県立図書館などに司書として勤務した作家・喜多村進（1888 ～ 1958年）に関係する資料群が所蔵されている。この資料群は、喜多村が晩年に過ごした和歌山市栄谷の家に残されていたもので、1995年12月に喜多村の子息・浩氏から県立博物館に寄託され、その後2005年４月に寄贈を受けたものである。

約9000点におよぶ資料の大半(約8500点）は、喜多村がコレクションしていた絵葉書であるが、そのほかにも、喜多村が学生時代から関わってきた文芸活動についての資料も多く含まれている。田山花袋と島崎藤村に師事した喜多村の幅広い人脈が判明するにとどまらず、大正～昭和戦後期における中央・地方文壇の実態を具体的に知ることができる。

この資料群には、縦49.1㎝・横31.0㎝・厚さ11.1㎝の大きさの黒漆塗文箱が含まれている（資料No.26）。その中には、57枚の色紙と136通の書簡類（封書・葉書）が収められていた。おそらく喜多村は、重要な書簡を選別して、この文箱に収めていたと考えられるが、その中には喜多村が師事した田村花袋や島崎藤村、別所梅之助・水原秋桜子らからの書簡や、和歌山に帰郷したのちに親交を結んだ南幸夫、三浦英太郎らからの来信も多く含まれている。

とくに、南葵文庫・南葵音楽図書館に勤務していた時期から信頼を得ていた徳川頼貞からの封書・葉書は、喜多村が和歌山へ帰郷した後の、1938年から1947年までの時期のもので、南葵音楽図書館閉鎖後の頼貞の行動、とくに『薈庭樂話』の執筆・刊行や、頼貞の和歌山での活動などに喜多村が深く関与していたことがうかがわれる点が重要である。

和歌山県立博物館では、2020年8月29日～ 10月4日の会期で、企画展「喜多村進と徳川頼貞 ── 南葵音楽文庫をめぐるひとびと ──」を開催し、これらの書簡の大半を展示･公開した。ここでは、絵葉書を除く、喜多村宛の頼貞からの書簡をすべて釈読して紹介した(※)。釈読にあたっては、原文の表記を尊重したが、読みやすさをはかるために、適宜句読点および丸括弧内の傍注を追加している。また、「くの字点」は文字の繰り返しに改めた。

なお、資料の基礎調査においては、令和元年度和歌山県庁・教育庁等におけるインターンシップに参加した県立桐蔭高等学校１年（当時）の吉川由菜氏の協力を得た。記して、謝意を表したい。

（※絵葉書による来信は、拙稿「喜多村進宛絵葉書 徳川頼貞筆」（『和歌山県立博物館研究紀要』27号（2021）で紹介している）

収蔵資料　目録と紹介

南葵音楽文庫〈重要資料〉の選定

現在、南葵音楽文庫の「貴重資料」とされている資料群は、1970 年までに、当時の南葵音楽文庫に対する価値観、とりわけ西洋音楽史の研究に資する資料としての視点が強く意識されたなかで選択された。現在でも本文庫は、西洋音楽史の研究に関わる重要な資料を多数所蔵していることに変わりはない。一方で、1970 年から半世紀を経て、以下のような状況も生まれている。

(1) 音楽史研究の進展から、所蔵している研究書が、いわば古典になった。
(2) デジタル化による知の共有化が進み、資料を所蔵する意味や意義が変質した。
(3) 音楽史研究の幅が、作品・作家研究中心から、受容史、演奏史、社会史等に拡大し、新しい研究方法や手法が拓かれている。
(4) 日本における洋楽とその歴史への関心が高まり、資料の整備や研究書の公刊が進んだ。

このような環境の変化にあって、南葵音楽文庫についても、ただ西洋音楽史資料の宝庫といった視点からだけではなく、複眼的な視座から、所蔵資料の価値を見いだす必要性が生まれている。

以上をふまえ、南葵音楽文庫の『蔵書目録（貴重資料）』（1970 年）に記載されていない資料のうちから、音楽史学のみならず、音楽をめぐる社会史、演奏史、受容史、加えて南葵音楽文庫の形成につながる資料、また広く文化学術的な価値や、書誌学的に重要な資料を、新たに「重要資料」として選定する。

当面は、委託事業のなかで、研究員の推薦と合議で選定し、必要に応じて各分野の専門家に意見を伺う。複眼的な視座による選定となるため、選定にあたっては、おおまかな「ガイドライン」（下記）を設定し、「選定理由」を付記する。

重要資料選定ガイドライン

稀少性　世界的に残存例が少ない資料である。
日本においては唯一ないしそれに近い資料である。

来歴　徳川頼貞ないし紀州徳川家との繋がりが明らかな来歴がある。
当該資料にふさわしい重要な個人や団体に由来している。

手沢本　当該資料にふさわしい重要な個人による書き込みがある。
作者等による献辞などが明記され愛蔵されていた資料である。

音楽図書館　南葵音楽図書館の活動から生成された資料である。
日本の（音楽）図書館史を証す資料である。

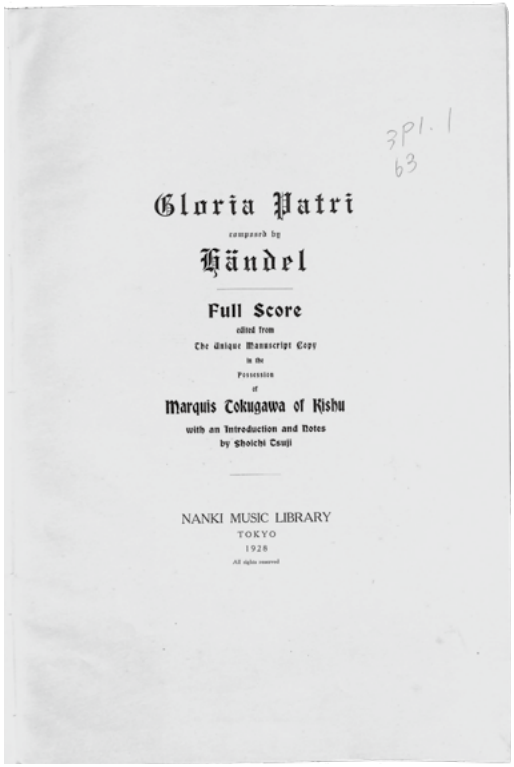
日本近代音楽　日本近代の音楽活動を伝える一次かそれに準じる資料である。
西洋音楽の受容や普及を伝える資料である。

音楽史研究　西洋音楽史研究のうえでの古典的ないし重要な業績である。
一次資料のファクシミリ版で、今日では入手困難である。

その他、保管保全上の理由を勘案する場合もある。
『蔵書目録（貴重資料）』（1970 年）記載の資料は「重要資料」の対象とはしない。
上記ガイドラインは、今後追記、変更する場合がある。

南葵音楽文庫〈重要資料〉選定結果
平成 30 ～令和 2 年度

1. ジョージ・フレデリク・ヘンデル《グロリア・パトリ（栄唱）*Gloria Patri*》（《主が建てられるのでなければ *Nisi Dominus*》より）HWV238/6 辻荘一による校訂楽譜

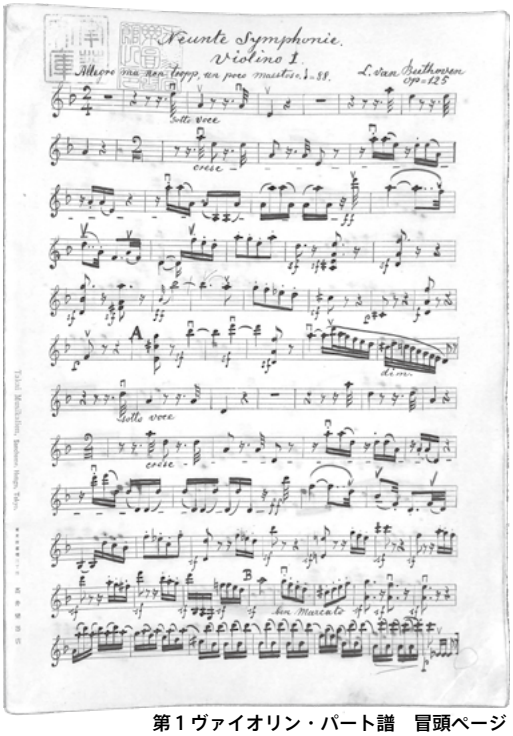


タイトルページ

Gloria Patri composed by Händel, Full Score edited from The Manuscript Copy in the Possession of Marqui Tokugawa of Kishu with an Introduction and Notes by Shoichi Tsuji, Nanki Music Library, Tokyou, 1928. 1 score (7, 15, 8 p.), facsim., 40 cm. Incl. critical notes.
(収蔵番号 3P1.1/62［図書館製本］及び 3P1.1/63［出版製本］)
日本語版 :『ヘンデル　グロリア・パトリ　總譜表』 辻荘一編 . 南葵音楽図書館 , 1928. (収蔵番号 3P1.1/64［図書館製本］)
【選定理由】音楽図書館　日本近代音楽音楽史研究

南葵音楽文庫がかつて所蔵した、カミングス文庫の筆写楽譜（自筆楽譜は 1860 年に焼失）による校訂楽譜。我が国最初の厳密な資料批判に基づく校訂報告を伴う楽譜出版（英語版と日本語版がある）であり、研究機関としての南葵音楽図書館の水準の高さを物語る。失われた手写楽譜の冒頭部分の画像の他、添付されていた旧蔵者カミングス宛書簡などが記録されている点でも貴重。詳細は、渡部恵一郎「ヘンデルの〈Gloria Patri〉の失われた筆写譜（旧南葵音楽文庫 o.52.3）について」『桐朋学園大学研究紀要』 3 集 (1977), p. 42-66 参照。

2. ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン　交響曲 第 9 番 ニ短調 作品 125 東京音楽学校演奏使用譜



第 1 ヴァイオリン・パート譜　冒頭ページ

Ludwig van Beethoven's Werke. Vollständige kritisch durchgesehene überall berechtigte Ausgabe. Mit Genehmigung aller Originalverleger. Serie 9.
総譜　Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1863]. Pl. no. B.9. 276p. 34cm.

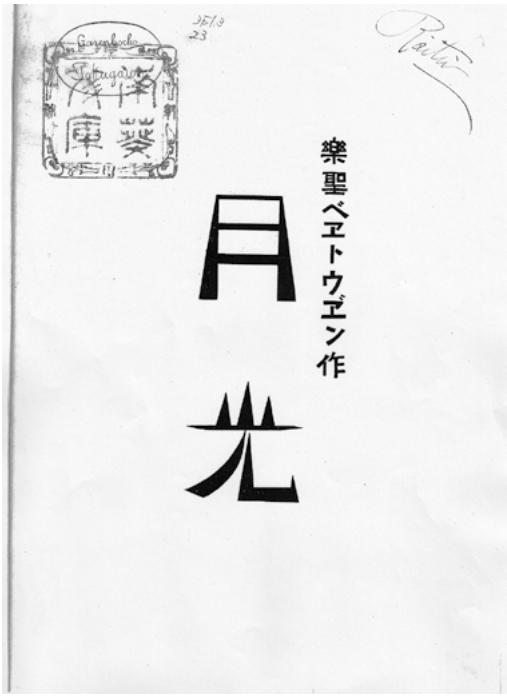
(収蔵番号 3A4.1/3)
管弦楽パート譜　n.d. 33cm.
合唱パート譜　Leipzig: Breitkopf & Härtel Chorbibliothek, n.d. Pl. no. ch.b.55b.
【選定理由】稀少性　来歴　手沢本　日本近代音楽

旧ベートーヴェン全集版の「第九」の総譜、管弦楽パート譜のセット、合唱のパート譜。管弦楽のパート譜は、不足分を国内で筆写し補充している。種々の書き込みや、パート譜の使用者の名前が記されているものがあり、実際に演奏で使用された楽譜であることは間違いない。日本人による「第九」全曲初演となった東京音楽学校による1924 年 11 月 29、30 日、12 月 6 日の演奏会のために、徳川頼貞が演奏用楽譜を提供していたことが、東京音楽学校教授・田村寛貞の著書『ベートーヴェンの第九ジュムフォニー』（岩波書店 , 1924）における記述から推測され、本資料がその楽譜一式であったと考えられる。詳細は『南葵音楽文庫紀要』2 号 , p. 60-65 参照。

3. ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン　ピアノ・ソナタ第 14 番 嬰ハ短調 作品 27-2 日本版初版譜

樂聖ベヱトウヱン作《月光》. 音楽社学術部編 . 音楽社出版部 , 明治 42（1909）年 8 月 10 日刊 . 楽譜 20, 解説 8 ＋ [1] p., 図版 (3), 32cm. 定価 説明附 35 銭 , 曲譜のみ 30 銭 . (収蔵番号 3E1.3/23)
【選定理由】稀少性　来歴　日本近代音楽

日本で最初に刊行されたベートーヴェン《月光ソナタ》の初版譜。1907（明治 40）年に雑誌『音樂』（楽友社）の綴込み附録として 5 回にわたり掲載された楽譜を 1 冊にまとめて出版。現在所在が確認されている 2 部のうちのひとつだが、付録解説に欠損のない完全本はこの 1 部のみ。頼貞が若き日に購入したもので署名「Raitei」と当時の住所「Gazenbocho ／ Tokugawa」（我善坊町／徳川）の印がある。南葵文庫印。文庫蔵書として美しく製本されているが、解説部分に乱丁がみられる。詳細は『南葵音楽文庫紀要』2 号 , p. 66-69 参照。



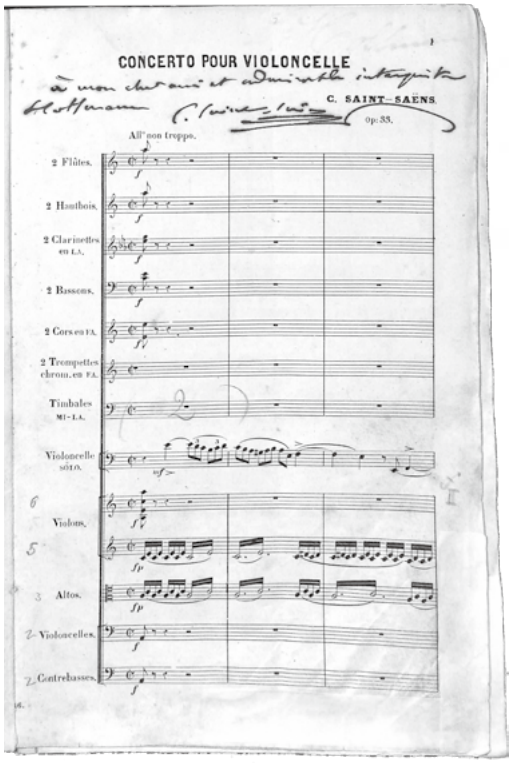
表紙

4. フランツ・リスト 《フン族との戦い》板東俘虜収容所における演奏使用譜

Liszt, Franz. *Hunnenschlacht*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, 1910. 1 score (98p.) + 38 parts. 27cm. (収蔵番号 3K2.1/16)
【選定理由】稀少性　来歴　手沢本　日本近代音楽

総譜は 1910 年に Breitkopf & Härtel から出版された Franz Liszt, *Symphonische Dichtungen für Orchester* の 一 部（p. 187-284）。パート譜のほとんどは手書きで、印刷譜は弦楽器の数部のみ。パート譜に書き込まれた人名や日付などから、徳島県の板東俘虜収容所のオーケストラが 1919 年 12 月 1 日に行った演奏会で使用された楽譜であることが判明した。南葵音楽文庫に収められた経緯は、現時点では不明であるが、収容所が閉鎖されたときに購入ないし寄贈されたものと推測される。詳細は本紀要 , p. 42-48 を参照。

5. カミーユ・サン＝サーンス　チェロ協奏曲第 1 番 イ短調 作品 33



総譜冒頭ページ

Saint-Saëns, Camille. *Concerto [No.1] pour Violoncelle*, op. 33. Paris: Durand, 1874. 1 score (72p.) 27cm + 32parts. 34cm. (収蔵番号 3K4.1/9)

【選定理由】来歴　手沢本

ホルマン文庫に収められている、ホルマンの愛奏曲のひとつ。総譜のタイトルページにはホルマンの署名があり、楽譜の最初のページには作曲者サン＝サーンスによる自筆献辞が記されている。総譜には使用した指揮者によると思われる青鉛筆による書き込みが散見され、パート譜も頻繁に使用された跡がある。詳細は『南葵音楽文庫紀要』2 号 , p. 66-69 参照。

6. エフレム・ジンバリスト 《古風な形式による組曲》より〈シシリエンヌ〉、同〈メヌエット〉、《日本の調べによる即興曲》

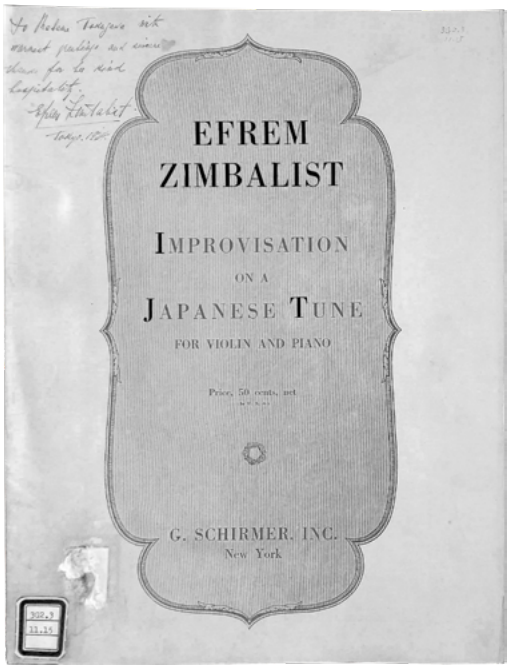
Zimbalist, Efrem. “Sicilienne” from *Suite in alter Form*. Mainz: B. Schott, 1911. 1 score (3p.) + 1 part (2p.). 34cm. (収蔵番号 3G2.4/3.2)

———. “Menuet” from *Suite in alter Form*. Mainz: B. Schott, 1911. 1 score (3p.) + 1 part (1p.). 34cm. (収蔵番号 3G2.4/3.3)

———. *Improvisation on a Japanese Tune*. New York: G. Schirmer, 1924. 1 score (7p.) + 1 part (1p.). 31cm. (収蔵番号 3G2.3/11.5)

【選定理由】来歴　手沢本

徳川頼貞と交流のあったロシア出身のヴァイオリニスト、エフレム・ジンバリストが作曲した小品の楽譜 3 点。いずれも、スコアにはジンバリストの 2 度目の来日の年である「1924 年」の記載とともに、作曲者のサインが入っており、どの曲もこの年の日本での演奏会で披露された。詳細は『南葵音楽文庫紀要』3 号 , p. 23-29 参照。



《日本の調べによる即興曲》タイトルページ

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
1	Acland, Arthur H (1811-1857)	Letters on Musical notation and the present state of musical education. By Arthur H. Dyke Acland, Esq. Reprinted from the "Educational Magazine".	London : Darton and Clark
2	Arne, Thomas Augustine (1710-1778)	Alfred the Great, an oratorio, as it is represented at the Theatre-Royal in Drury-Lane. The musick new composed by Mr. Arne.	London : printed for A. Millar
3	Arne, Thomas Augustine (1710-1778)	Artaxerxes, an English opera. As it is perfomed at the Theatre-Royal in Covent-Garden. The musick composed by Tho. Aug. Arne, Mus.Doc.	London : printed for J. and R. Tonson
4	Arne, Thomas Augustine (1710-1778)	An hospital for fools. A dramatic fable. As it is acted at the Theatre-Royal, by his Majesty's servants. To which is added the songs with their basses and symphonies, and transposed for the flute. The musick by Mr. Arne. Sung by Mrs. Clive.	London : printed for J. Watts
5	Arne, Thomas Augustine (1710-1778)	Whittington's feast : A new parody on Alexander's Feast. Written by a college wag. The overture, songs, & c. with all the grand chorusses, new composed, by Thomas Augustine Arne, Doctor of Music.	London : printed for the author
6	Avison, Charles (1709-1770)	An essay on musical expression. By Chrales Avison, organist in Newcastle. The second edition. With alterations and large additoins. To which is added, A letter to the author, concerning the music of the ancients, and some passages in classic writers, relating to that subject. Like wise, Mr. Avison's reply to the authorof remarks on the essay on musical expression. In a letter from Mr. Avison, to his friend in London.	London : printed for C. Davis
7	Avison, Charles (1709-1770)	An essay on musical expression. By Chrales Avison, organist in Newcastle. The second edition. With alterations and large additoins. To which is added, A letter to the author, concerning the music of the ancients, and some passages in classic writers, relating to that subject. Likewise, Mr. Avison's reply to the authorof remarks on the essay on musical expression. In a letter from Mr. Avison, to his friend in London.	London : printed for C. Davis
8	Bach, Carl Philipp Emanuel (1714-1788)	Exempel nebst achtzehn Probe-Stücken in sechs Sonaten zu Carl Philipp Emanuel Bachs Versuche über die wahre Art das Clavier zu spielen mit sechs neuen Clavier-Stüken vermehrt auf XXXI. Kupfer-Tafeln.	[Leipzig : Schwickert]
9	Bach, Carl Philipp Emanuel (1714-1788)	Exempel nebst achtzehn Probe-Stücken in sechs Sonaten zu Carl Philipp Emanuel Bachs Versuche über die wahrt Art das Clavier zu spielen auf XXVI. Kupfer-Tafeln.	[Berlin : G.J. Winter]
10	Baretti, Joseph (1719-1789)	A guide through the Royal Academy, by Joseph Baretti. Secretary for foreign correspondence to the Royal Academy.	London : printed by T.Cadell
11	Bemetzrieder, Anton (1739-1817)	Music made easy to every capacity, in a series of dialogues ; Being practical lessons for the harpsichord, laid down in a new method, so as to render that instrument so little difficult, that any person, with common application, may play well ; become a thorough proficient in the principles of harmony ; and will compose music, if they have a genius for it, in less than a twelvemonth. Written in French by Monsieur Bemetzieder, musick master to the Queen of France. And published at Paris, (with a preface) by the celebrated Monsieur Diderot, the whole translated, and adapted to the use of the English student, by Giffard Bernard, M.A. perused and approved of by Doctor Boyce and Doctor Howard.	London : printed by R. Ayre and G. Moore, and sold by W. Randall
12	[Betterton, Thomas (1635-1710)]	The prophetess. A tragical history. Printed in the year 1711.	[n.p.]
13	Betts, Edward (fl.1714-1767)	An introduction to the skill of musick. I. The grounds and principles of musick, according to the Gamut ; after an early method, for young beginners. II. A table showing the names, numbers, measures and propertions, of the notes. III. All the cliffs in use, and how to find your Me. IV.What flats and sharps belongs to every key now us'd. V. The different movements of time that are now us'd. VI. Of the tying notes, and other marks and characters us'd in musick. VII. Several short tunes by way of solfaing, and how to run a division, for the improvement of young practioners. VIII. A rule how to make a shake, upon the whole and galh note. IX. Several duo's by way of sofaing ; and a canon four in one to a Gloria Patria, by Dr. Blow. X. Several chants in four parts, for choir musick. XI. A rule how to express the words in a soft easie manner, with excellant anthems, compos'd by very famous authors. Anthems, hymns and psalm tunes, in several parts.	London : printed by William Pearson, sold by William Clayton and Roger Adams, Manchester
14	Bosseut, Jacques-Bénigne (1627-1704)	De tribus generibus instrumentorum, musice veterum organice. Jacobus Benignus Bosseut episcopus Meldensii in Dissert de Psalmis cap. vi. no.xxxiv.	Autograph copy by Huntingdon
15	British Museum, [ed. by] F. Madden	Catalogue of the manuscript music in the British museum.	London : G. Woodfall and Son, printed by order of the trustees
16	British Museum, [ed. by] F. Madden	Catalogue of the manuscript music in the British museum.	London : G. Woodfall and Son, printed by order of the trustees
17	Brossard, Sébastian de (1655-1730)	Dictionnaire de musique, contenant une explication des termes grecs, latins, italiens & françois les plus usitez dans la musique. A l'occasion desquels on rapporte ce qu'il y a de plus curicux & de plus necessaire à sçavoire ; Tant pour l'histoire & la theorïe, que pour la composition, & la pratique ancienne & moderne de la musique vocale, instrumentale, plaine, simple, figurèe & c. Ensemble, une table alphabetique des termes François sont dans le courps de l'ouvrage, sous les Titres Grecs, Latins & Italiens ; pour servir de supplement. Un traité de la maniere de bien prononcer, sur tout en chantant, les termes Italiens, Latins, François. Et un catalogue de plus de 900. Auteurs, qui ont écrit sur la musique, en toutes fortes de temps, de pays & de langues. Par M. Sebastien de Brossard, cy-devant prebende député & maître de chapelle de l'eglise cathedrale de Strasbourg ; maintenant grand chaplain & maître de musique de l'eglise cathedrale de Meaux. Troisieme edition.	Amsterdam : aux dépens d'Estienne Roger
18	Brown, John	A dissertation on the rise, union, and power, The progressions, separations, and corruptions, of poetry and music. To which is prefixed, the cure of Saul, a sacred ode. Written by Dr. Brown.	London : printed for L. Davis, C. Retmers

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1841	61p, 22.7 x 14.3cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Dedication signature of the author to Cipriani Potter		M-6/1	b.0/18		1
1754	39p, 20.0 x 13.0cm : 12mo	2 Exlibris of W.H.Cummings	Libretto	M-5/5	c.5/12		2
1763	47p, 20.0 x 13.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto	M-5/3	c.5/11	578	3
1739	music [3p], 28p, music [7p], 25.7 x 17.5cm (cover), 18.2 x 11.5cm (book) : 12mo	2 Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue on the book as a label		M-5/4	o.0/70	47?	4
[1776]	17p, 17.0 x 23cm		Libretto	M-5/6	c.5/21	58?	5
1753	[viii], 152, 43, 53p, 20.5 x 12.5cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of W.H.Cummings		M-1/19	c.3/6	1568	6
1753	152p, 43p, 53p, 20.5 x 12.7cm : 8vo	Exlibris of Thomas Armstrong Exlibris of W.H.Cummings	Bound with M-1/21(2)(3)(4)	M-1/21(1)	c.3/5		7
[1787]	25p, 41.5 x 26.8cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-7/1	f.11/1-b		8
[1753]	20p, 41.5 x 29.8cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Comments on the edition of this book, written by W.H.Cummings		M-7/3	f.11/1-a	205	9
1789	32p, 28.5 x 22.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings	Bound with M-3/13(2)(3)(4)	M-3/13(1)	(s.e-1)	1696	10
1778	iv, 249p, 28 x 21.3cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-2/12	b.0/11	1125	11
1711	Probabry a part of Collection of libretts, [p.2034]-p.2105, [70]p, 19.5 x 12.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Front cover "Founded on Beaumont and Fletcher by Betterton" probably written by W.H.Cummings	Libretto	M-5/9	c.4/14	614	12
1724	[xxii], music exemples 105p, 19.0 x 12.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign by W[illiam] Savage, dated in January 20th 1752		M-5/10	b.0/25	1626	13
[18c]	53p, 34.0 x 22.7cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue		M-7/9	b/1	1150	14
1842	105p, 25.5 x 16.2cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings	Same volume as M-2/10(2)	M-2/10(1)	a.4/2		15
1842	105p, 25.5 x 16.2cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings	Same volume as M-2/10(1)	M-2/10(2)	a.4/2		16
[n.d.]	388p, 20.4 x 12.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Unknown Exlibris		M-1/2	a.1/6	1628	17
1763	246p, 28.5 x 23.0cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-3/16	c.1/3		18

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
19	Callcott, John Wall (1766-1821)	A musical grammer, in four parts : I. Notation, II. Melody, III. Harmony, IV. Rhythm. By Dr. Callcott.	London : printed by B. Macmillan, for Robert Birchall
20	Catel, Charles-Simon (1773-1830)	Traité d'harmonie par Catel Membre du Conservatoire de Musique à Paris adopté par le conservatoire pour servir à l'étude dans cet établissement. Abhandrung über die Harmonie (Generalbasslehre) von Catel. Zum Gebrauch beim Untervieht in dem Conservatorium angenomen.	Leipzig : bei C.F.Peters
21	Cizzardi, Liborio Mauro (fl.1700)	Il tutto in poco, overo il segreto scoperto composto da Liborio Mauro Cizzardi. Sacerdote Parmigiano, e Residente nella Chiesa Collegiata di S. Vitale in Patria, diviso in cinque libri, ne' quali si mostra un modo facilissimo, per imparare il vero canto fermo con le guiste regole, e con alcune altre osservazioni necessarie ad un cantore. All'eminentissimo, e reverendissimo principe il Signore Cardinale Anton-Francesco San Vitale Arcivescovo d'Urbino.	Parma : per Giuseppe Rosati
22	Clifford, James (1622-1698)	The divine services and anthems usually sung in His Majesies Chappell, and in all cathedrals and collegiate choires in England and Ireland. The second edition, with large additions. Collected by J[ames].C[lifford].	London : printed by W[illiam], G[oodbid] and to be sold by Nathaniel Brooke... and Henry Brome
23	Crotch, William (1775-1847)	Substance of several courses of lectures on music. Read in the University of Oxford, and in the Metropolis. By William Crotch, Mus.D. Professor of music, Oxford ; and principal of the Royal Academy of Music, London.	London : printed for Longman, Rees, Orme, Brown & Green
24	Dryden, John (1631-1700)	King Arthur : or, the British worthy. A Masque by Mr. Dryden. As it is performed at the Theatre-Royal in Drury-Lane, by His Majesty's Company, The Music by Purcell and Dr. Arne., Libretto, 1770 music by Purcell and Dr. Arne.	London : printed for W. Strahn, L. Hawes and Co.T. Davies, T. Lownds, and W. Griffin
25	Dryden, John (1631-1700)	Amphitryon or the two Sofia's. A comedy. As it is acted at the Theatre Royal...Written by Mr. Dryden. To which is added the musick of the songs compose'd by Mr. Henry Purcell.	London : printed for J. Tonson and M. Tonson
26	Furtado, John	New elements of thorough bass, clearly and concisely demonstrated on scientific principles. By John Furtado, Mus. Prof.	London (Stoke Newington) : printed for and sold by W.J. & J. Richardson
27	Gasparini, Francesco (1661-1727)	L'armonico pratico al cimbalo. Regole, osservazioni, ed avvertimenti per ben suonare il basso, e accompagnare sopra il cimbalo, spinetta, ed organo di Francesco Gasparini Lucchese...dedicato all'illustrissimo, ed eccellentissimo signor Girolamo Ascanio Giustiniani nobile Veneto.	Venezia : appresso Antonio Bortoli
28	Gasparini, Francesco (1668-1727)	L'armonico pratico al cimbalo' regole, osservazioni, ed avvertimenti per ben suonare il basso, e accompagnare sopra il cimbalo, spinetta ed organo di Francesco Gasparini Lucchese, fu maestro di coro del Pio Ospedale della Pietà in Venezia, ed Accademico Filamonico.Quarta impressione.	Venezia : appresso Antonio Bortoli
29	Gasparini, Francesco (1661-1727)	L'armonico pratico al cembalo, regole, osservazioni, ed avvertimenti per ben suonare il basso, e accompagnare sopra il cembalo, spinetta ed organo di Francesco Gasparinii Accademico Fiilarmonico sesta impressione in caratteri moderni musicali, spurgata da moltissimi errori.	Venezia : appresso Sebastiano Valle
30	Gay, John (1685-1732)	The beggers opera. As it is acted at the Theatre-Royal in Lincolns-Inn Fields. Written by Mr. Gay. The third edition : with the ouverture in score, the songs, and the basses, (the ouverture and basses compose'd by Dr. Pepusch) curiously engrav'd on copper plates.	London : printed for John Watts
31	Gay, John (1685-1732)	Polly : An opera, being the second part of the Begger's opera. Written by Mr. Gay.	London : printed for the Author
32	Geminiani, Francesco (1687-1762)	Guida armonica o dizionario armonico, being asure guide to harmony and modulation, in which are exhibited. The various combination of sounds, consonant, and dissonant, progressions of harmony, ligatures and cadences, real and deceptive, by F. Geminiani. Opera X.	London : printed for the author by John Johnson
33	Geminiani, Francesco (1687-1762)	A supplement to the Guida Armonica, with examples. shewing it's use in composition : by F.Geminiani.	London : printed for the author by John Johnson
34	Geminiani, Francesco (1687-1762)	The art of accompaniament or a new and well digested method to learn to perform the thorough bass on the harpsichord, with propriety and elegance by F.Geminiani. Opera 11th : Part the first.	London : printed for the author by John Johnson
35	Geminiani, Francesco (1687-1762)	The art of accompaniament or a new & well digested method to learn to perform the thorough bass on the harpsichord with propriety and elegance. Opera 11th. Part the 2d. Treating of position and motion of harmony, and the preparation and resolution of discords : by F.Geminiani.	London : printed for the author by John Johnson
36	Howard, Robert (1626-1698)	Five new plays, viz. The Surprisal, a comedy ; The committee, comedy ; The Indian-Queen, Tragedy ; The vestal-virgin, tragedy ; The duke of Lerma, tragedy. As they were acted by his Majesty's servants at the Theatre-Royal. Written by the hounourable Sir Robert Howard. The second edition corrected.	London : printed fo Henry Herringman, and to be sold by Jacob Tonson, Daniel Browne, Thomas Bennet, and Richard Wellington
37	[Kloss, Georg Franz Burkhard]	Catalogue of the library of Dr. Kloss, of Franckfurt aM., Professor ; including many books with ms. annotations by Philip Melancthon. Which will be sold by auction, by Mr. Sotheby and Son, Wellingston Street, Strand, on Thursday, May 7th, and ninteen following days (Sunday excepted), at twelve o'clock each day.	London : S. Sotheby and Son
38	Loredano, Giovanni Francesco (1607-1661)	La Scala Santa : or, A scale of devotions musical and gradual : Being descants on the fifteen psalms of degrees, in metre, with conteplations and collects upon them, in prose. 1670.	London : printed by A.Godbid and J. Playford for Robert Harford
39	Manfredi, Mutio (1535-1608)	Cento madrigali di Mutio Manfredi, il fermo academico innominato, inaughito, e di Ferrara. A' Donna Vittoria Principessa di Molfetta, sua Signora, da lui dedicati. Con gli augumenti del mede fimo à ciascun madrigalo, per esser tutti di straordinari soggetti.	Mantova : appresso Francesco Osanna
40	Marbeck, John (c.1510-c.1585)	A concordāce, that is to saie, a work wherein by the ordre of the letters of the A, B, C. ye maie redely finde any worde conteigned in the whole Bible, so often as it there expressed on mencioned. Essay. xiiiij.	[London] : Richardus Grafton

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1806	xxii, 308p, 18.0 x 11.0cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/13	b.0/28	1703	19
[1802]	iv, 59p, 35.5 x 22.6cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-7/11			20
1711	[ix], 166p, indice 2p, 30.8 x 22.0cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-7/12	b.0/6	453	21
1664	[xxxviii], 431p, 14.8 x 9.0cm	Exlibris of W.H.Cummings Sign by Joseph Warren, dated "August 13th 1858" and comment written by him		M-5/16	p.0/46	460	22
1831	175p, 22.7 x 14.3cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/13	b.0/20	1740	23
1770	[iii], 49p, 21.0 x 13.7cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto	M-6/70	c.5/10		24
1691	[viii], 58p, [3p], 21.0 x 16.5cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto, composed by Henry Purcell Bound with M-5/11(2)	M-5/11(1)	o.51/90	614	25
[1798?]	19p, 20.5 x 12.7cm : 8vo		Bound with M-1/21(1)(2)(3)	M-1/21(4)	b.o (s.e-5)		26
1708	118p, tavola 2p, 22.3 17.4cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Note "Observations" written by unknown hand Sign by "Sir Jones Wright"		M-6/24	b.0/17	715	27
1745	[iv], 86p, tavola [2]p, 25.5 x 18.7cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-2/19	b.0/13	713	28
1802	[ii], lxxxvi, tavola [i], 23.0 x 15.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue		M-1/27	b.0/16	714	29
1729	[vi], 60p, music 46p, 24.0 x 18.8cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of T[homas] Jolley Pencil notes by Thomas Oliphant	Libretto Bound with M-6/68(2)	M-6/68(1)	o.1/86	718	30
1729	vii, 72p, music 31p, 24.0 x 18.8cm : 8vo		Bound with M-6/68(1)	M-6/68(2)		718	31
[1754 or shortly before]	[iii], 34p, 33.7 x 24.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings	Bound with M-7/14(2)(3)(4)	M-7/14(1)	b.2/3	724	32
[c1754 or slightly after]	[v], 10p, 33.7 x 24.5cm : folio		Bound with M-7/14(1)(3)(4)	M-7/14(2)		724	33
[1754 or shortl before]	3p, 33p, 33.7 x 24.5cm : folio		Bound with M-7/14(1)(2)(4)	M-7/14(3)	b.8/3	724	34
[1754 or shortl before]	4p, 36p, 33.7 x 24.5cm : folio		Bound with M-7/14(1)(2)(3)	M-7/14(4)	b.8/3	724	35
1700	[ix], 252p, epilogue [1], 29.5 x 18.0cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings Sign by Robert Dodge, 1730 Sign of Thomas Dodge, 1791		M-3/20	c.4/2		36
1835	xxiii, 343p, 23.5 x 15.5cm : 8vo			M-1/22	a.4/5	413	37
1681	[xxxvii], 60p, 84p, 32.5 x 20.5cm : folio	Exlibris of John Dawes Exlibris of Isaac Akerman Exlibris of W.H.Cummings	Originaly written 1656 in Italy, and render'd into English in 1665.	M-7/32	p/5	1008	38
1587	120p, 14.0 x 8.6cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Cha[les] H. Sharpe		M-5/24	c.2/28	1039	39
1550	[viii], Fol.i-xxiv, [753]p, 28.7 x 19.5cm : folio	Exlibris of Francis Freeling Exlibris of G.B. Blomfield, dated in 1870 Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of D.Dix Pasted paper in which is written on the provinance of the book by unknown hand Comments on the contents probably written by Francis Fleeling		M-6/58	i/2	1045	40

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
41	Marinati, Aurelio (-1650)	La prima parte della somma di tutte le scienze nella quale si tratta delle sette arti liberali, in modo tale che ciascuno potrà da se introdursi nella Grammatica, Rettorica, Logica, Musica, Aritmetica, Geometria, & Astrologia, di aurelio Marinati Dottore di Leggi da Ravenne. Al Santis et beatis. Sisto V. Pont. Ottimo Massimo.	Roma : appresso Barthelomeo Bonfadino
42	Marpurg, Friedrich Wilhelm (1718-1795)	Traité de la fûgue et du contrepoint ; par Marpourg. Cet ouvrage est divisé en deux prties, et suivi de 134 planches d'exemples.	Paris : Imbault, de l'imprimerie de Charles Pougens
43	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo primo Alla sacra reale cattolica Maestà Maria Barbara infanta di Portogallo, Regina delle Spagne ec. ec. ec. Umiilato, e dedicato da Fr. Giambattista Martini de'Minori Conventuli accademico nell'Instituto delle Scienze, e Filarmonico.	Bologna : per Lelio dalla Volpe Impressore dell'Instituto delle Scienze
44	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo secondo, All' altezza serenissima elettorale di Carlo Teodoro Conte Paaltino del Reno, Arcitesoriere ed Elett, del Sae. Rom. Imp., Duca di Baviera, Giuliers, Cleves, e Bergen, Preneipe di Moeurs, Marchese di Bergen Opzoom, Conte di Veldenza, Sponheim, della Marca, e Ravensberga, Signore di Cavenstein ec. ec. ec. Umiliato e didicato da Rr. Giambatista Martini de'Minori Conventuali Accademico nell' Instituto delle Scienze, e Filarm.	Bologna : per Lelio dalla Volpe Impressore dell'Instituto delle Scienze
45	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo terzo, a sua altezza reale Don Ferdinando di Borbone Infante di Spagna, Duca di Parma, Piacenza, Guastalla, &c. &c. &c. Umiliato, e dedicato da Fr. Giambattista Martini de'Minori Conventuali.	Bologna : per Lelio dalla Volpe Impressore dell'Instituto delle Scienze
46	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo primo alla sacra reale cattolica Maestà Maria Barbara infanta di Portogallo, Regina delle Spagne ec. ec. ec. Umilato, e dedicato da Fr. Giambattista Martini de' Minori Conventuali Accademico nell' Instituto delle Scienze, e Filatmonico.	Bologna : per Lelio dalla Volpe Impressore dll' Instituto delle Scienze
47	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo secondo, All' altezza serenissima elettorale di Carlo Teodoro Conte Paaltino del Reno, Arcitesoriere ed Elett, del Sae. Rom. Imp., Duca di Baviera, Giuliers, Cleves, e Bergen, Preneipe di Moeurs, Marchese di Bergen Opzoom, Conte di Veldenza, Sponheim, della Marca, e Ravensberga, Signore di Cavenstein ec. ec. ec. Umiliato e didicato da Rr. Giambatista Martini de'Minori Conventuali Accademico nell' Instituto delle Scienze, e Filarm.	Bologna : per Leito dalla Volpe Impressore dll'Instituto delle Scienze
48	Martini, Giambattista (1706-1784)	Storia della musica, tomo terzo, a sua altezza reale Don Ferdinando di Borbone Infante di Spagna, Duca di Parma, Piacenza, Guastalla, &c. &c. &c. Umiliato, e dedicato da Fr. Giambattista Martini de'Minori Conventuali.	Bologna : per Leito dalla Volpe Impressore dll'Instituto delle Scienze
49	[Mason, John] (1706-63)	[An Essay on the Power of numbers, and the principles of harmony in poetic compositions.]	[London]
50	Mason, John (1706-63)	An essay on the power and harmony of prosaic numbers. Being a sequel to one on the power of numbers, and the principles of harmony in poetic compositions.	London : printed by James Waugh, printed for Mr. Cooper
51	Mason, John (1706-63)	An essay on elocution, or, pronunciation. Intended chiefly for the assistance of those who instruct others in the art of reading, and of those who are often called to speak in publick. By John Mason, A.M. The third edition.	London : printed for R. Hett, J. Buckland, J. Waugh, M. Cooper
52	Maxwell, Francis Kelly (1729-1782) [sometimes attributed to John Maxwell]	An essay upon tune, being an attempt to free the scale of music, and the tune of instruments, from imperfection. Illustrated with plates.	London : printed for William Boag
53	Milton, John (1608-1674)	Comus, a mask : (Now adapted to the stage) As alter'd from Milton's Mask at Ludlow-Castle, which was never represented but on Michaelmas-Day, 1634 : Before the right honable the Earl of Bridgewater, Lord President of Wales...The musick was composed by Mr. Henry Lawes, who also represented the attendant spirit.	London : printed by J. Hughs, for R.Dodsley
54	Monti, Henrico de (De Monti, Hurka, 1753c-1823)	The self-taught musician : A treatese on music. Dedicated to the honourable Lady Viscontess Doune. By H. de Monti.	Edinburgh : printed by John Paterson
55	Morigi, Angelo (1725-1801)	Esempi del trattato di contrapunto fugato del Signor Angelo Morigi.	Milano : presso il negoziante di musica Gio.Ricordi
56	Morley, Thomas (1557-1602)	A plaine and easie intruductuion to practicall musicke, set downe in forme of a dialogue : Devided into three partes, the first teacheth to sing with all things necessary for the knowledge of pricksong. The second treateth of descante and to sing two parts in one upon a plainsong or ground, with other things necessary for a descanter. The third and last part entreateth of composition of three, foure, five or more parts with many profitable rules to that effect. With new songs of 2, 3, 4, and 5 parts.	London : imprinted by Peter Short

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1587	[viii], 156p (p.145-148 are wanting), 22.3 x 16.0cm : 8vo	Cutout from unknown auction catalogue as a label of the book Exlibris of W.H.Cummings		M-1/48	b.0/21	1056	41
1801	160p, music examples 137p, 27.0 x 36.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Sign of W[illiam] Crotch, dated "July, 5, 1824" Comments on the provenance written by W.H.Cummings		M-4/1	b.3.5/1		42
1757	xii, 507p, 2 fold. maps, 27.2 x 21.3cm : 4to	Exlibris of Julian Marshall Exlibris of W.H.Cummings 2 portraits are inserted, one published by "Rosaspina" 1776. An author's autograph letter to Johann Gottlieb Naumann, Dresden, is inserted. Cutout probably from unknown auction catalogue Notes on the portraits by unknown hand		M-6/110	d.1/1b	1065	43
1770	xx, 375p, 2 fold. music examples, 27.0 x 21.3cm : 4to	Exlibris of Julian Marshall Exlibris of W.H.Cummings		M-6/111	d.1/1b	1065	44
1781	xx, 457p, 27.0 x 21.3cm : 4to	Exlibris of Julian Marshall Exlibris of W.H.Cummings		M-6/112	d.1/1b	1065	45
1757	viii, 507p, 45.3 x 32.0cm : large folio	Exlibris of W.H.Cummings Comments on the edition of this book, written by W.H.Cummings	Large paper edition. Title in red and black ; initials ; viggnettes ; ornamental borders. Bibliographical foot-notes. Numerous musical illustrations.	M-7/25	d.1/1-a	1064	46
1770	viii, Prefazione xxi, 375p, 45.0 x 32.0cm : large folio	Exlibris of W.H.Cummings	Large paper edition. Title in red and black ; initials ; viggnettes ; ornamental borders. Bibliographical foot-notes. Numerous musical illustrations.	M-7/26	d.1/1-a	1064	47
1781	xx, 459p, 45.0 x 32.0cm : large folio	Exlibris of W.H.Cummings	Large paper edition. Title in red and black ; initials ; viggnettes ; ornamental borders. Bibliographical foot-notes. Numerous musical illustrations.	M-7/27	d.1/1-a	1064	48
[1749]	Title page-p.10 are wanting, 11-75p, 20.5 x 12.7cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Comments written by unknown hand	Bound with M-1/3(2)(3)	M-1/3(1)	[c.1/16]		49
1749	xii, 76p, 20.5 x 12.7cm : 12mo		Bound with M-1/3(1)(3)	M-1/3(2)	c.1/16		50
1751	43p, 20.5 x 12.7cm : 12mo		Bound with M-1/3(1)(2)	M-1/3(3)	c.1/16		51
1794	iv, 290p, corections 1p, 19 fold. plates, 21.7 x 13.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Comments on the edition, written by unknown hand		M-1/38	b.0/22	1568	52
1738	52p, 20.5 x 12.9cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto, composed by Henry Lawes	M-6/56	c.5/13		53
1796	vii, 152p, 20.5 x 12.7cm : 8vo		Bound with M-1/21(1)(3)(4)	M-1/21(2)	b.o (s.e-5)		54
[n.d.]	xvi, 23.5 x 15.4cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/62	b.3/14	1113	55
1597	[vi], 183p, [33], 28.0 x 19.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Joseph Symson Sign of Michaell Branthwaite	2 vols in 1 shelfnark	M-3/11(1)	b.0/9-a	1121	56

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
57	Morley, Thomas (1557-1602)	A plaine and easie intruductuion to practicall musicke, set downe in forme of a dialogue : Devided into three partes, the first teacheth to sing with all things necessary for the knowledge of pricksong. The second treateth of descante and to sing two parts in one upon a plainsong or ground, with other things necessary for a descanter. The third and last part entreateth of composition of three, foure, five or more parts with many profitable rules to that effect. With new songs of 2, 3, 4, and 5 parts.	London : imprinted...by Peter Short
58	Morley, Thomas (1557-1602)	A plain and easy Introduction to practical music. Set down inform of a dialogue. Divided into three parts, The first teacheth to sing, the second treateth of descant, the third treateth of composition, by Thomas Morley, batchelor of music, as printed in the year 1597.as printed in the year 1597.	London : now reprinted for William Randall successor for the late Mr. J. Walsh
59	Mozart, Leopold (1719-1787)	Leopld Mozarts Hochfürstl. Salzburgischen Vice-Capellmeisters, gründliche Violinschule, mit vier Kupfertafeln und einer Tabelle. Zweyte vermehrte Auflage.	Augsburg : gebrudt bey Johann Jacob Lotter
60	Overend, Marmaduke (c.1730-1790)	A brief account of, and introduction to, eight lectures, in the science of music, to be read as soon as fifty subscribers, at one guinea each for the course, shall have sent their address for that purpose ; in which are proposed, to be demonstrated and to be explained the radical sources of melody and harmony...by Marmaduke Overebd, organist of Isleworth, Middlesex.	London : printed for the author, and sold by Mess. Payne and son, and Mess. Thompson
61	Pearce, Thomas	A collection of anthems used in His Majesty's Chapel Royal, and most cathedral churches in England and Ireland. Published under yhe direction of Thomas Pearce, D.D. sub-dean of his Majesty's Chapel Royal.	London : printed for W. Ginger & Son, F. and C. Rivington
62	Phiharmonic Society Library, [ed. by] Joseph Calkin	Catalogue of the library, belonging to the Philharmonic Society London.	London
63	Phiharmonic Society Library, [ed. by] Joseph Calkin	Catalogue of the library, belonging to the Philharmonic Society London.	London
64	Phiharmonic Society Library, [ed. by] Joseph Calkin	Catalogue of the library, belonging to the Philharmonic Society London.	London
65	Playford, John (1623-1686/87)	The dancing master : containing directions and tunes for dancing.	[London : printed by William Pearson, sold by John Young]
66	Playford, John (1623-1686/87)	An introduction to the skill of musick : in three books. By John Playford. Containing, I. The Grounds and principles of musick according to the gamut ; being newly written, and more easie for young practitioners, according to the method now in practice, by an eminent master in that science. II. Introductions and lessons for the treble, tenor, and baß- viols ; and also for the treble-violin. III. The art of descant, or composing musick in parts ; made very plain and easie by the late Mr. Henry Purcell. The thirteenth edition.	London : printed by E. Jones, for Henry Playford
67	Playford, John (1623-1686/87)	An Introduction to the skill of musick : In three books : By John Playford. Containing I. The Grounds and Principles of musick, according to the Gamut : Inthe most easie method, for young practioners. II. Instructions and Lessons for the treble, tenor and vass-viols, and also for the treble-violin. III. The art of descant, or composing musick in parts : made very plain and easie by the late Mr. Henry Purcell. The fifteenth edition. Corrected, and done on the new ty'd-note.	London : printed by W[illiam] Pearson, printed for Henry Playford
68	Playford, John (1623-1686/87)	An introduction to the skill of musick : In three books : by John Playford. Containing I. The grouns and principle of musick, according to the Gamut : In the most easy method, for young practioners. II. Instrunctions and lessons for the treble, tenor, and bass-viols ; and also for the treble violin. III. The art of descant, or composing musick in parts : Made very plain and easy by the late Mr. Henry Purcell. The eighteenth edition. Corrected, and done on the new ty'd note.	London : printed by William Pearson, printed for John and Bnji. Sprint
69	Ploútarchos (Plutarch), English trans. By H. Bromly	ΠΕΠΙ ΜΟΓΣΙΚΗΣ or Plutarch on music translated.	Chiswick : from the press of C.Whittingham
70	Purcell, Henry (1659-1695)	The songs in Amphitryon with the musick. Composed by Mr. Henry Purcell.	London : printed by J. Heptinstall for Jack Tonson
71	Rhauo, Giorgio (Rhau, Georg) (1488-1548)	Enchiridon utrisque musice practicae a Georgio Rhauo, ex variis musicorum libris, pro pueis in Schola Vitebergensi congestium.	[Vitebergae (Wittenberg) : apud Georgium (Georg) Rhau]
72	Robinson, Thomas (1550-1609)	New citharen lessons, with perfect tunings of the same, from foure course of strings to fourteene course, even to trie the sharpest teeth of envie, with lessons of all sortes, and methodicall instructions for all professors and practioners of the citharen, by Thomas Robinson, student in all seven liveral sciences.	London : printed by William Barley, and are to be sold at his shop...
73	Sabbatini, Luigi Antonio (1732-1809)	Trattato sopra le fughe musicali di Fra Luigi Ant. Sabbatini M.C. Corredato da copiosi Saggi del suo Antecessore Padre Francesco Antonio Vallotti dello stess'ordine Maestro di Cappella nella Basilica di S. Antonio di Padova. Parte prima.	Venezia : presso Sebastiano Valle
74	Sabbatini, Luigi Antonio (1732-1809)	La vera idea delle musicali numeriche segnature deretta al Giovane Studioso dell'Armonia da Luigi Ant. Sabbatini M.C. Maestro di Cappella nella Basilica di S. Antonio di Padova.	Venezia : presso Sebastiano Valle
75	Salmon, Thomas (1648-1706)	An essay to the advancement of musick, by casting away the perplexity of different cliffs. And uniting all sort of musick : lute, viol, violin, organ, harpsechord, voice & c. In one universal character. By Thomas Salmon, Master of Arts of Trinity College in Oxford.	London : printed by J. Macock, and to sold by John Car

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1597	[iv], 183p, [35], 29.3 x 20.0cm : folio Full of disordered leaves	Exlibris of W.H.Cummings Comments quoted from "[Ch.] Burney, vol.3 pg.99", written by Mery Phillipe Sign of Mery Phillipe	2 vols in 1 shelfnark	M-3/11(2)	b.0/9-b	1123	57
1771	vi, 257p, music exemple 29p, 26.5 x 22.0cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-2/21	b.0/10	1125	58
1769	[viii], 268p, Register[8], fold. table, 22.7 x 19.5cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-2/5	h.0/3	1132	59
1781	20p, 28.5 x 22.5cm : folio		Bound with M-3/13(1)(2)(3)	M-3/13(4)	c.4/1	1696	60
1795	328p, 20.0 x 13.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings, his sign and comically depicted initial letters dated in sept.2.[18]63		M-1/18	c.2/15	1703	61
[n.d.]	44p, 25.0 x 17.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-2/9	a.4/3	413	62
[n.d.]	92p, 24.6 x 17.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	Same volume as M-2/26	M-2/23 Addeda no.1	a.4/3		63
[n.d.]	92p, 24.6 x 17.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	Same volume as M-2/23	M-2/26 Addeda no.1	a.4/3		64
1716	358p, 11.0 x 21.0cm : 12mo obl. Probably the title page in which is written "The Dancing master, or directions for dancing coutry dances...The sixteenth edition", and 6 pages of the preface and the tables are wanting.	Exlibris of W.H.Cummings "Probably the 16th edition, published by W. Pearson, and sold by John Young, London, 1716" written by W.H. Cummings Unreadable sign dated 1845 on the pages 1, 149, 201, and 239		M-5/28	a.0/10	1291	65
1697	ix, 134p, 16.2 x 10.6cm : 16mo	Exlibris of Horace Walepole Exlibris of John Cervert Exlibris of Julian Marshall Exlibris of W.H. Cummings Sign by John Cervert, dated 1841 Notes written by unknown hand		M-5/29	b.0/29-c	1268/1622	66
1703	[xxii], 180p, 17.5 x 10.5cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Edward Dawson and his comment Sign of Th[omas] Shaw 1742		M-1/26	b.0/29-b	1504	67
1724 (book I, II), 1723 (book III)	[xvi], 170p, 17.4 x 10.5cm : 16mo		Bound with M-1/34(1)	M-1/34(2)	b.0/26-c	1622	68
1822	x, 115p, 19.3 x 12.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue		M-5/30	b.0/24	1295	69
1690	13p, 21.0 x 16.5cm : 12mo	Cutout from unknown auction catalogue on the front cover	Bound with M-5/11(1)	M-5/11(2)	o.51/90	27	70
1546	[144]p, 15.4 x 10.0cm : 18mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Joseph Warren Library stamp of "Museum Britannicum" and "Duplicate for sale"		M-5/36 Addeda no.6	p/37	1431	71
1609	[xi], [84]p, 1 handwritting page, 20.7 x 16.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Unreadable sign and notes by unknown hand		M-6/72	j.11/7	1446	72
1802	[iii], 150, 16p, 29.8 x 21.7cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Edie Taylor, dated 1846		M-6/75	b.0/7	1483	73
1799	iv, clxxixp, 29.7 x 22.0cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/76	b.0/8	1483	74
1672	[xviii], 92p, 17c.0 x 11.3cm	Exlibris of W.H.Cummings Notes on the edition by unknown hand		M-5/38 Addenda no.7	b.0/30	1497	75

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
76	Salmon, Thomas (1648-1706)	A proposal to perform musick, in perfect and mathematical proportions. Containing, I. The State of musick in general. II. The principles of present practice ; according to which are, III. The table of proportions, calculated for the viol, and capable of being accommodated to all sorts of musick. By Thomas Salmon, Rector of Mepsal in the county of Bedford...Approved by both the mathematick professors of the Universuty of Oxford. With large remarls upon this whole treatise, by the reverend and learned John Wallis D.D.	London : printed for John Lawrenrence
77	Settle, Elkanah (1648-1724)	The empress of Morocco. A tragedy, with sculptures. As it is acted at the Duke's Theatre. Written by Elkanah Settle, Servant to his Majesty.	London : printed for William Cademan
78	Settle, Elkanah (1648-1724)	The world in the moon ; An opera. As it is perform'd at the Theatre in Dorset-Garden, by his Majesty's servants. By E[lkanah] S[ettel].	London : printed for Abel Roper
79	Shadwell, Tho[mas] (c.1642-1692)	Psyche : A tragedy, acted at the Dukes Theatre. Written by Tho. Shadwell.	London : printed by T. N. for Henry Herringman
80	Simpson, Christopher (1602/06-1669)	A compendium of practical musick in five parts. Teaching, by a new, and easie method, 1. The rudiments of song. 2. The principles of composition. 3. The use of dischords. 4. The form of figurate descant. 5. The contrivance of canon. Together with lessons for viols, etc. The third editio. By Christppher Simpson.	London : printed M.C. for Henry Brome
81	Simpson (Sympson), Christopher (1602/06-1669)	A compendium or introduction to practical musick. In five parts. Teaching, by a new and easy method, I. The rudiments of song. II. The principles of composition. III. The use of discords. IV. The form of figurate descant. V. The contrivance of canon. By Christopher Sympson. The seventh edition, with additions : Much more correct than any former, the examples being put in the most useful cliffs.	London : [printed for T. Astley]
82	Simpson (Sympson), Christopher (1602/06-1669)	A compendium : or introduction to practical music. In five parts. Teaching, by a new and easy method. I. The rudiments of song. II. The Principles opf composition. III. The use of discords. IV. The form of figurate descant, V. The contrivance of canon. By Christopher Sympson. The eighth edition with additions.	London : printed by W. Pearson, for Arthur Bettesworth and Carles Hitch, Samuel Bird, John Clarke, Thomas Astley, John Oswald
83	Simpson, Christopher (1602/06-1669)	The division-violist : or an itroduction to the playing upon a ground : divided into two parts. The first, directing the hand, with other preparative instructions. The second, laying open the manner and method of playing ex-tempore, or composing division to a ground. To which, are added some divisions made upon grounds for the practice of learners. By Chr. Simpson.	London : printed by William Godbid, and sold by John Playford
84	Slatyer, William (1587-1647)	The psalms of David in 4 languages and in 4 parts. Set to the tunes of our church. By W[illam].S[latyer].	London : printed by Tho[mas] Harper for George Tho[mason] & Octavian Pullen
85	Smith, Robert (1689--1768)	Harmonics or the philosophy or musical sounds. By Robert Smith, D. d, F.R.S, and master of Trinity College in the University of Cambridge... The second edition, much improved and augmented.	Cambridge : printed for T. & J. Merrill
86	Sternbold, Thomas (1500-1549), Hopkins, John (fl.1549-1562), and others	The whole booke of psalmes : collected into English meeter by Thomas Sternehold, Iohn Hopkins, and others, conferred with the Hebrew, with apt notes to sing them with all. Set forth and allowed to bee sung in all churches, of all the people together, before and after morning and evening prayer, as also before and after sermons, and moreover in private houses, for their godly solace and comfort, laying a part all ungodly songs and ballads, which tend onely to the nourishment of vice, and corrupting of youth.	London : printed for the Company of Stationers (printed by Bonbam Norton and John Bill, 1623)
87	Tansur, William (1706-1783)	A musical grammer, and dictionary, or a general introduction to the whole art of music in six parts. The whole is faithfully collected from the greatest masters, ancient and modern ; and methodically laid down for the instruction of pupils of all ages. By William Tansur, senior, Musico-Theorico ; Professor, corrector, and teacher of church music, above 50 years. Seventh edition, corrected and enlarged.	London : published by I.Y. Hinton
88	Tans'ur, William (1699?-1783)	A new musical grammer and dictionary, or a general introduction to the whole art of musick. In four books. Teaching, I. The rudiments of tones, diatonick, and semitonick ; according to the Gamut, - With rules for tuning the voice, and beating of time ; the nature of keys, and transposition ; and of all other characters used in musick. II. Containing such plain and easy directions as are necessary for tuning, and playing on, the organ, hapsichord, bass-viol, violin, hauboy, flute, bassoon, etc. - With rules for tuning of bells, and pricking of chime-barrells, &c. And the structure of an organ considered, in all its curious branches : And a feeling scale of musick for such as are blind. III. The theory of sound, from its natural causes : or, a philosophical, and mathematical differtation thereon, in a concise and easy method &. Together with the principles practical musick : Or, the most authentick rules of composition, either in 2, 3, 4, 5, 6, 7, or 8 musical parts : Shewing the allowed passages of all concords, and discords ; and the contrivance of fuge, or canon, in great variety. IV. The musicians historical, and technical dictionary ; explicating above 550 of the most useful terms that generally occur in musick ; as they are taken from the Greek, French, Latin, and Italian writers. With an account of instruments, and their inventors, &c. The whole extracted from the best authors, both ancient, and modern ; and methodically digested to every capacity. - With a preface prefactory ; and table to the whole... The third edition, with large additions. By William Tans'ur, senior, musico-theorico.	London : printed by Robert Brown, printed for James Hodges
89	Tosi, Pier Francesco (1653/54-1732), English trans. by Mr. Galliard	Observations on the florid song ; or sentiments on the ancient and modern singers, written in Italian by Pier Francesco Tosi, of the Phil-Harmonic Academy at Bologna. Translated into English by Mr. Galliard ; useful for all performers, instrumental as well as vocal. To which are added, explanatory annotations, and examples in musick.	London : printed for J. Wilcox
90	Tosi, Pier Francesco (1653/54-1732), English trans. by Mr. Galliard	Observations on the florid song ; or sentiments on the ancient and modern singers, written in Italian by Pier Francesco Tosi, of the Phil-Harmonic Academy at Bologna.Translated into English by Mr. Galliard ; useful for all performers, instrumental as well as vocal. To which are added, explanatory annotations, and examples in musick... The second edition.	London : printed for J. Wilcox
91	[Trapp, Joseph (1679-1747)]	The tragedy of King Saul. Written by a deceas'd person of honour, and now mad publick at the request of several men of quality who have highly approve'd of it.	London : printed for Henry Playford, and sold by John Nutt

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1688	[xii], 42p, [2]p, 23.4 x 17.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/78	c.4/2	1662	76
1673	[viii], 72p, 22.0 x 16.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto	M-6/90	c.4/6	1528	77
1697	[vi], 44p, 22.0 x 16.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto, composed by Jeremiah Clarke	M-6/10	c.5/7	1529	78
1675	[x], 72p, 21.7 x 16.0cm	Exlibris of W.H.Cummings	Libretto, composed by Matthew Locke with Giovanni Battista Draghi	M-6/57	o.4/8	1530	79
1678	[xii], 192p, 18.5 x 11.5cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Notes on editions of "A Compendium" written by unknown hand		M-5/42	b.0/26-a	1550	80
[1727]	[xii], 144p, 17.4 x 10.5cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Comments by W.H.Cummings with his sign	Bound with M-1/34(2)	M-1/34(1)	b.0/26-c	1622	81
1732	[xii], 144p, 17.5 x 11.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/41	b.0/26-b	1621	82
1659	[viii], 67p (pages 2-3 are missing), 30.8 x 20.7cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue		M-7/33	h.0/2	1545	83
1643	[66]p, 15.0 x 8.9cm : 18mo	Exlibris of W.H.Cummings Cutout from unknown auction catalogue		M-5/31	p/42	1557	84
1759	xx, 280p, [index 13p], 28 fold. plates, 21.7 x 13.7cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of R. Stevens, 1781		M-1/37	c.4/3	1568	85
1624	243p, 23.5 x 17.6cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-1/56	p.12-a	1319	86
1829	x, 268p, 23.2 x 14.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Sign by W.H.Cummings		M-1/54	b.0/15		87
1756	xii, table [4p], 176p, 19.5 x 13.0cm : 12mo Front cover is wanting	Sign of William Wilson, octo[ber],22[n]d, 1784		M-1/20	b.0/23	1628	88
1742	xviii, 184p, 16.5 x 10.0cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Comments written by unknown hand		M-1/41	b.0/27-a	1652	89
1743	xviii, 184p, 5 fold. plates, 18.0 x 12.9cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-1/42	b.0/27-b	1653	90
1703	[vi], 67p, [1]p, 22.7 x 16.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Notes on the edition and the author of the work by unknown hand		M-6/97	c.4/5	1656	91

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
92	Turner, William (1651-1740)	Sound anatomiz'd in a philosophical essay on musick. Wherein is explained the nature of sound, both in its essence and regulation, & c. Contrived for the use of the voice in singing, as well as for those who play on instruments.Together wit a thorough explanation of all the different moods used in musick, for regulating time in the different divisions of measures used therein. All render'd plain and easy, to the meanst capacities, by familiar similies. To which is added, a discourse, concerning the abuse of musick. To which is added, a discourse, concerning the abuse of musick by William Turner. The second edition.	London : printed by William Pearson, for the author, and sold by M. Turner
93	Vecchis, Giovanni Battista de	Compendio di contrapunto dell' antica e moderna suola di musica napolitana del signor Gio. Battista de Vecchis maestro di musica nel Real Archicemobio di Montecasino.	Napoli : Domenico Capasso
94	Walker, Joseph Cooper (1761-1810)	Historical memories of the Irish bards, interspersed with anecdotes of, and occasional observations on the music of Ireland. Inetrspersed with anecdotes of , and occational observation on, the music of Ireland. Also, an historical and descriptive account of the musical instruments of the ancient Irish. And an appendix, containing several biographical and other papers, with select Irish melodies. By Joseph C. Walker, member of the Royal Irish Academy.	Dublin : printed for the author, by Luke White
95	Wilhem, M.	Les psaumes de David, tout en musique suivis des cantiques sacrés. La musique en est rhythmée et disposée a trois parties (voix égales ou inégakes) par M. Wilhem.	Valence : imprimerie de J. Marc-Aurei
96	Young, Matthew (1750-1800)	An enquiry into the principal phaenomena of sounds and musical strings by Matthew Young, B.B. Trinity College, Dublin.	London : printed for G. Robinson
97	Zarlino, Gioseffo (1517-1590)	De tutte l'opera del R.M.Gioseffo Zarlino da chiaggia, Maestro di Cappella della Serenissima Signoria di Venetia, ch'ei scrisse in buona lingua Italiana ; già separamente poste in luce ; hora di nuovo corrette, accresciute, & migliorate, insieme ristampate. Il primo volume. Contenente L'istitutione harmoniche divise in quattro parti... De tutte l'opera del R.M.Gioseffo Zarlino da chiaggia, Maestro di Cappella della Serenissima Signoria di Venetia, ch'ei scrisse in buona lingua Italiana ; Il secondo volume, contente Le dimostrationi harmoniche divise in cinque ragionamenti... Sopplimenti musicali del Rev. M. Gioseffo Zarlino da Chioggia. Maestro di Cappella della Sereniss. Signoria di Venetia...Terzo volume. De tutte l'opera del R.M.Gioseffo Zarlino da Chiaggia, Maestro di Cappella della Serenissima Signoria di Venetia, ch'ei scrisse in buona lingua Italiana, Il quarto, & ultimo volume. Contenente Il proemio del trattato della patientia ; Discorso intorno il vero anno et il vero giorno, nel quale fu crucifisso il nostro signor Giesu Christo. Un'informatione intorno la origine della congregatione de i reverendi Frati Capuccini ; Resolutioni d'alcune dimande sopra la correttione dell'aano di Giulio Cesare.	Venezia : appresso Francesco de Franceschi Senese
98		Apollo's cabinet or the muses delight. An accurate collection of English and Italian songs, cantatas and duetts, set to music for the harpsichord, violin, german-flute, & c. With instructions for the vice, violin, harpsichord or spinet, german-flute, common-flute, hauboy, french-horn, basson, and bass-violin. Also a compleat musical dictionary, and several hundred English, Irish and Scots songs, without the music. Volume I.	Liverpool : printed and sold by John Sadler
99		Apollo's cabinet or the muses delight. An accurate collection of English and Italian songs, cantatas and duetts, set to music for the harpsichord, violin, german-flute, & c. With instructions for the vice, violin, harpsichord or spinet, german-flute, common-flute, hauboy, french-horn, basson, and bass-violin. Also a compleat musical dictionary, and several hundred English, Irish and Scots songs, without the music. Volume II.	Liverpool : printed and sold by John Sadler
100		The compleat tutor for the harpsichord or spinnet wherein is shewn the Italian manner of fingering with suits of lessons for beginners & those who are already proficients on that instrument & the organ with rules for attaining to play a thorough bass. Also rules for tuning the harpsichord or spinnet.	London : printed for & sold John Simpson
101		The compleat tutor for the harpsichord or spinnet wherein is shewn the Italian manner of fingering with suits of lessons for beginners & those who are already proficients on that instrument & the organ : with rules for a thorough bass, and tuning.	London : printed for & sold by C[harles] & S[amuel] Thompson
102		Corona di sacre canzoni, o laude spirituali di più divoti autori, di nuovo date in luce, corrette, & accresciute da Matteo Coferati sacerdote Fiorentino. Con l'aggiunta delle loro arie in musica, per renderne puì facile in canto.All'illustrias, e Benerendo, sig. canonico Ottavio Rosso.	Firenze : All'linsegna della Stella
103		Cursory remarks on tragedy, on Shakespear, and on certain French and Italian poets, principally tragedians.	London : printed for W. Owen
104		The Ear-wig or old woman's remarks on the present exhibition of pictures of the Royal Academy : Preceded by a Petet mot poyr rire, instead of a preface. Including Anecdotes of characters well known amongst the painters ; Observations on the causes of the decline of the arts ; a Description of the buildings of Somerset-House, and the apartments occupied by the Royal Acedemy.	London : printed for G. Kearsly
105		An essay on the church plain chant (1) part first, containig instructions learning the church plain song. (2) part second, containing several anthems, litanies, proses and hymn, as they are sung in the public chaples at London. (3) part thied, being a supplement of several anthmes, litanies, proses and hymns, which have been omitted in the second part yet are sung in the public chapels at London, and are added at the request of same paticular persons. (4) Antiphons which are sung whilst the blessed sacrament is exposed in the church of the English dames of st. Clare, at Aire in Artois.	London : printed by J.P. Coghlan
106		The harmonist's preceptor, or universal vocalist, containing all the new songs.	London : printed by J. Fiarburn

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
[1724]	[vi], 80p, 1 fold.plate, 7p, 22.0 x 18.0cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/98	b.0/19	1662	92
1850	139p, music exemples 118p, 26.0 x 17.8cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings		M-6/99	b.3/12		93
1786	vii, 166p, Appendix 144p, 28.0 x 23.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Oravers Adamson, dated 1824		M-3/15	d.1/2	1696	94
1850	460p, 18.5 x 11.2cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings	Bound with M-1/57(2)	M-1/57(1)	p/27		95
1784	[ii], 203p, fold. table, 21.5 x 13.7cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of Nevil Maskelyne D.D.(1732-1811) Dedication Signature of the author to Nevil Maskelyne		M-6/104	C.4/4	1740	96
1589 (vol.1, 2, 4), 1588 (vol.3)	vol.1 : xxxii, 448p vol.2 : xv, 287p vol.3 : xvi, 330p vol.4 : ii, 132p 31.0 x 23.0cm : folio	Sign of John Keeble Sign of Marcus Meibomius (c.1630-1710/11) Sign of G.S.Townley Exlibris of W.H.Cummings Comments on the provenance written by W.H.Cummings Cutout of unknown auction catalogue		M-3/3	b.0/4	1743	97
1756	[iii], 162p (p.1-162), index [2p.], 24.0 x 15.5cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	2 vols in 1 shelfnark	M-2/4(1)	o.0/84	39	98
1756	167p (p.157-323), index [5p], 24.0 x 15.7cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings	2 vols in 1 shelfmark	M-2/4(2)	o.0/84	39	99
[ca.1745]	1 fold. illustration, 36p, dictionary 4p, 24.0 x 15.3cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Notes on the edition by W.H.Cummings		M-6/11	f.11/15	485	100
[ca.1770]	1 fold. illustration, 36p, 24.2 x 16.8cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Notes on the edition by W.H.Cummings		M-6/12	f.11/14	486	101
1675	[xxvi], 479p, [13p], 15.0 x 8.7cm : 18mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/14	p/38	510	102
1774	ix, 242p, 17.0 x 11.4cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/15	c.1/23		103
1781	vii, 23p, 28.5 x 22.5cm : folio		Bound with M-3/13(1)(3)(4)	M-3/13(2)	v.1 (s.e-1)	1696	104
(1) 1782 (2) 1782 (3) 1782 (4) 1783	(1) 23p (2) xxxix (3) xvi (4) 6p, 18.0 x 11.8cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Sign of John Menzies, dated "1786" Sign of John Hausick, dated "1836" Sign of Anthon Sashane, dated "1844"		M-5/17	p.0/29		105
[n.d.]	344p, illustrations, 18.0 x 11.0cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-1/32	c.2/20		106

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
107		A letter to the king on the subject of a new proposed institution in the medical department.	London : printed for T.Becket
108		Liturgie, ou recueil de formulaires et de prières pour la célébration du service divin dans les églises réformées ; a l'usage de l'eglise de Paris.	Paris : imprimerie et librairie de E. Marc-Aurel, et chez J. Marc-Aurei
109		Modus legēndi et accē[n]tuandi epistolas et evangelia : scd's ritū ecclesie Ratisponensis. Forma intonandi psalmos et cantica : super quatliber preinceptas añ.	[Straßburg : Johann Prüss (1447?-1510)]
110		Melody, the soul of music : An essay towards the improvement of the musical art: With an appendix, cantaining account of an invention.	Glasgow : printed in The Courier office
111		Psalmy Dawidowe. Przekładánia X. Máciejá Rybinskiego. (Psalmy Dawidowe)	Gdansku (Dantzig) : Drukował Andrzyi Hünefeldt (Andreas Hünefeldt)
112		Les pseaumes de David, a qutre parties, avec les cantiones sacrés, pour les principales solennités des Chrétiens. Nouvelle edition, exactement corrigée.	Lausanne : chez Henri Vincent
113		Les psaumes de David, mis en vers François, revus et aprouvez, par les pasteurs et professeurs de l'eglise et de L'Academie de Geneve. Nouvelle edition, où le premier verset est musique, trèsexactement corrigée.	Geneve : chez P. Pellet
114		Les psaumes de David, mis en vers françoise, revus et approuvez par le synode Walon des Provices-Unies. Nouvelle edition.	Amsterdam : auz dépens de l'Eglise Françoise de Londres
115		Les psaumes en vers françoise, retouchez sur l'ancienne version de Cl. Marot & Th. de Baze. Par feu M.V.Conrart Conseiller & Secretaire du Roy, etc.	Paris : par Antoine Cellier
116		Recuil des opera, des balets, & des plus belles pieces en musique, qui ont eté représentées depuise dix ou douse-ans jusques à présent devant Sa majesté tres-chrétienne. Tomo premier.	Amsterdam : chez Abraham Wolfgang
117		Recuil des opera, des balets, & des plus belles pieces en musique, qui ont eté représentées depuise dix ou douse-ans jusques à présent devant Sa majesté tres-chrétienne. Tomo second.	Amsterdam : chez Abraham Wolfgang
118		Recuil des opera, des balets, & des plus belles pieces en musique, qui ont eté représentées depuise dix ou douse-ans jusques à présent devant Sa majesté tres-chrétienne. Tomo troisiéme.	Amsterdam : chez Abraham Wolfgang
119		Recuil des opera, des balets, & des plus belles pieces en musique, qui ont eté représentées depuise dix ou douse-ans jusques à présent devant Sa majesté tres-chrétienne. Tomo quatriéme.	Amsterdam : chez Abraham Wolfgang
120		Scrap book "Life of Handel" An assemblage of cuttings, playbills, engravings, etc. Ms notes by Dr. Rimbault etc.	
121		Youths recreation, or the ladies delight, on the flagelet ; with variety of new lessons. The third edition, with several new tunes.	London : printed by T. Moore, for Humphry Salter
122		Cock's musical miscellany [a journal of music and musical literature]	London

"Catalogue of the W.H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library"(1925) に記載はあるが、現在所在が確認できない「音楽書」資料

	著者·編者など Composer etc	タイトル Title	出版地：出版社（者） Publication : Place, Publisher
123	Alstedius, Johannes Henricus (1588-1638)	Templum musicum, or the musical synopsis of J. H. Alstedius, being a compendium of the rudiments,both of the mathematical and practical part of musick. Trans[lated] by J. Birchensha.	London :Peter Dering
124	Boetius, Anicius M. Severinu (c.477-524)	Hec sunt opera Boetii, que in hoc volumine Continentur in porphyrii isagogen a victori, etc	Venezia
125	Bohn, Emil	Bibliographie de Musik-druckwerke bis 1700, welche in Breslau aufbewahrt werden.	Berlin
126	Cizzardi, Liborio Mauro (fl.1700)	Il tutto in poco, ovelo il segreto per imparare il vero canto fermo, etc.	Parma : Giseppe Raosati
127	Donado, Giovanni Battista (1627-1699)	Della letterature de' Turchi.	Venezia : Andrea Poletti
128	Handel, George Frideric (1685-1759)	Collection of twenty-four operas.	London
129	Locke, Matthew (c.1621-1677)	The present practise of musick, vindicated against the exceptions and new way of attaining musick.	London : N. Brooke
130	Magius, Hieronymus (c.1523-1572)	De tintinabulis	Amsterdam : H. Westenius
131	Pepusch, Johan Christoph (1667-1752)	A treatise of harmony, containing the chief rules for composing in two, three, and four parts, 2nd ed.	London : Pr[inted] by Pearson
132	Playford, John (1623-1686/87)	An introduction to the skill of musick. 6th ed.	London : John Playford
133	Playford, John (1623-1686/87)	An introduction to the skill of musick. 7th ed.	London : John Playford
134	Playford, John (1623-1686/87)	An introduction to the skill of musick. 13th ed.	London : Henry Playford
135	Simpson, Christopher (1602/06-1669)	A compendium of practical musick in five parts.	London : Henry Brome
136		Agenda ecclesie moguntinensis. (Agenda moguntinensis)	Straßburg : Johanne Prüss

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1781	vi, 30p, 28.5 x 22.5cm : folio		Bound with M-3/13(1)(2)(4)	M-3/13(3)	(s.e-1)	1696	107
1845	43p, 18.5 x 11.2cm : 12mo		Bound with M-1/57(1)	M-1/57(2)			108
[ca.1505] or [ca.1500, Passau : Johann Petri]	[45]p, 20.1 x 14.3cm : 8vo	Exlibris of W.H.Cummings Pasted paper, written on the edition of the book by W.H.C[ummings]		M-6/61	p/19	1110	109
1798	82p, 20.5 x 12.7cm : 8vo		Bound with M-1/21(1)(2)(4)	M-1/21(3)			110
1632?	77p, 9, 18.5 x 12.5cm : 12mo	Exlibris of W.H.Cummings Comments probably written by W.H.Cummings "Polish Language. Psalms of David. At Dantzig. Printed by Andreas Húnefeldt, circa 1619"		M-5/32 Addeda no.2	p/28	710?	111
1824	696p, 17.7 x 10.2cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings and his sign		M-5/33 Addeda no.3	p/32	1341	112
1757	503p, table 24p, 14.5 x 9.8cm : mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-1/23	p/45	1340	113
1729	viii, 679p, 15.8 x 9.7cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/34 Addeda no.4	p/36	1340	114
1679	[498]p, 15.4 x 9.0cm : 18mo	Exlibris of W.H.Cummings		M-5/35 Addeda no.5	p/43	1341	115
1690	[xvi], 397(45+60+64+68+81+79)p, 13.5 x 8.0cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of Julian Marshall Exlibris of "Duke of Bedford" Sticker of Woburn Abby (no.2332)	1st vol. of 4 vols in 1 shelfnark	M-2/7(1)	c.5/26	1422	116
1690	366(69+60+72+47+60+58)p, 13.5 x 8.0cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings	2nd vol. of 4 vols in 1 shelfnark	M-2/7(2)	c.5/26	1422	117
1688	348(60+69+59+36+24+43+57)p, 13.5 x 8.0cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of Julian Marshall [Sticker of Woburn Abby (no.2332)]	3rd vol. of 4 vols in 1 shelfnark	M-2/7(3)	c.5/26	1422	118
1693	362(47+24+60+48+57+36+46+44)p, 13.5 x 8.0cm : 16mo	Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of Julian Marshall Sticker of Woburn Abby (no.2332)	4th vol. of 4 vols in 1 shelfnark	M-2/7(4)	c.5/26	1422	119
	31.0 x 24.5cm : folio	Exlibris of W.H.Cummings		M-3/22	d.2/1	822	120
1685	[14], 42p, music exemples 87p (full of disorder, last 31p are handwriting) , 6.8 x 16.0cm : 16mo obl	Exlibris of W.H.Cummings Exlibris of Julian Marshall		M-5/48 Addenda no.10	k.11/5	1738	121
1852-53	27.5 x 22.2cm : 4to	Exlibris of W.H.Cummings and his sign	Periodical	ナ/760.5/C01 35016767-2	a.5/1		122

刊年 Year	ページ数、サイズ Pages, Size	注記 1 Notes 1	注記 2 Notes 2	請求記号 Call number	旧資料番号 (1925)	競売目録番号 Auction catalogue (1917) lot. no.	
1664	16mo		lost		b.0/32	14	123
1492	folio		lost		b.0/2	319	124
1883	8vo		lost		a.4/4	291	125
1711	folio		lost		b.0/5	452	126
1688	16mo		lost		c.6/25		127
1711-29	12mo		lost		c.5/19	733	128
1673	16mo		lost		b.0/31	1000	129
1689	16mo		lost		d.1/4	1032	130
1731	12mo obl		lost		b.2/33	1733	131
1672	16mo	With "The art of descant" by Dr. P. Campion	lost		b.0/29-a	1263	132
1764	16mo	With "The art of descant" by Dr. P. Campion	lost		b.0/26-d	1549/1264	133
1697	16mo		lost		b.0/29-c	1267	134
1667	16mo		lost		b.0/26-d	1548	135
c.1492			lost		p/8	8	136

南葵音楽文庫　活動の記録　※会場名の「県立」は特記なき場合すべて和歌山県立

2017（平成29）年

12月3日

〈南葵音楽文庫プレオープン〉

公開記念式典

会場：県立図書館

公開記念講演会「南葵音楽文庫に宿る『魂』」

会場：県立図書館 メディア・アート・ホール

講師：美山良夫

公開記念演奏会「日韓フレンドシップ・コンサート」

会場：県立図書館 メディア・アート・ホール

出演：澤和樹（ヴァイオリン、ヴィオラ）、ヤン・ソンウォン（チェロ）、他

プレオープン記念式典テープカット

12月3日～1月21日

企画展「南葵音楽文庫 音楽の殿様・頼貞の楽譜コレクション」

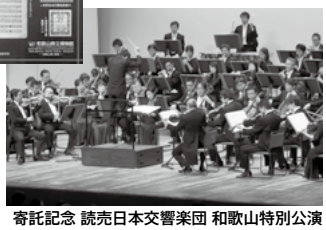
会場：県立博物館

12月6日

南葵音楽文庫寄託記念 読売日本交響楽団和歌山特別公演

会場：県民文化会館 大ホール

出演：川瀬賢太郎（指揮）、仲道郁代（ピアノ）、読売日本交響楽団



寄託記念 読売日本交響楽団 和歌山特別公演

12月9日

南葵ミニレクチャー開始

会場：県立図書館 南葵音楽文庫閲覧室

2020年2月22日までに109回実施

（2020年3月は新型コロナウイルス感染症予防のため5回開催とりやめ）

南葵ミニレクチャーのひとコマ

2018（平成30）年

1月21日

南葵音楽文庫定期講座　2017年度第1回

会場：県立図書館 講義・研修室

「徳川侯爵交遊録　大音楽家と出会った日本人 プロコフィエフ：（1）日本滞在の真実、（2）幻のソナタ」

講師：近藤秀樹、篠田大基

3月4日

南葵音楽文庫定期講座　2017年度第2回

会場：県立図書館 講義・研修室

◎「ミュージックライブラリーの夢 徳川頼貞と南葵音楽図書館」

講師：林淑姫

◎「W. H. カミングスが愛した音楽」

講師：佐々木勉

3月19日

『南葵音楽文庫紀要』第1号発行

4月1日～翌3月31日

コーナー展示「南葵音楽文庫の貴重資料」

会場：県立博物館

6月2日

南葵音楽文庫定期講座　2018年度第1回

会場：県立図書館 メディア・アート・ホール

「南葵に響く日本とフランスの歌 ―スナール室内楽シリーズより―」

講師：近藤秀樹、演奏協力：水谷雅男、仙波治代

6月3日

南葵音楽文庫定期講座　2018年度第2回

会場：県立図書館 講義研修室

「徳川頼貞と『第九』 ―100年前、日本に響いた『歓喜の歌』―」

講師：篠田大基

プレオープン当初の閲覧室

9月2日　**南葵音楽文庫紀南講演会＆演奏会**

会場：紀南文化会館 小ホール
◎第１部「南葵音楽文庫に宿る『魂』」
講師：美山良夫
◎第２部「いま蘇る南葵楽堂 伝説の演奏会」
出演：渡部玄一（チェロ）、桑生美千佳（ピアノ）

9月9日　**南葵音楽文庫定期講座　2018年度第３回**

会場：県立情報交流センター Big・U 研修室１
◎「南葵文庫と南葵音楽図書館　―徳川頼倫から頼貞へ―」
講師：林淑姫
◎「南葵音楽文庫とその貴重資料　―徳川頼貞の楽譜コレクション―」
講師：佐々木勉

9月15日　**シンポジウム「南葵音楽文庫　―楽しみと学び―」**

会場：県立図書館 メディア・アート・ホール
◎第１部「いま蘇る南葵楽堂 伝説の演奏会」
出演：渡部玄一（チェロ）、江上菜々子（ピアノ）
◎第２部　パネルディスカッション
パネリスト：徳川宜子、林淑姫、泉健、曽野洋
コーディネーター（兼パネリスト）：美山良夫

9月15日～10月21日　**特別展「お殿様の宝箱**
南葵文庫と紀州徳川家伝来の美術」

会場：和歌山市立博物館

12月1日　**南葵音楽文庫定期講座　2018年度第４回**

会場：県立図書館 講義・研修室
「W. H. カミングスが愛した音楽　その２
蔵書蒐集と『国立音楽図書館』設立の夢」
講師：佐々木勉

12月2日　**南葵音楽文庫定期講座　2018年度第４回**

会場：県立図書館 講義・研修室
「徳川侯爵交遊録　大音楽家と出会った日本人
プッチーニ：届かなかった楽譜」
講師：篠田大基

12月15日　**高校生のための和歌山未来塾**

会場：県立図書館 メディア・アート・ホール
講師：美山良夫

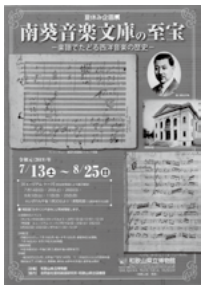
2019（令和元）年

3月27日　**ネイラー　序曲《徳川頼貞》**
吹奏楽版（大橋晃一編曲）楽譜発行

県警音楽隊による「序曲《徳川頼貞》」の演奏
和歌山県立近代美術館・博物館エントランス広場にて
（2019.7.12）

3月31日　**『南葵音楽文庫紀要』第２号発行**

6月1日　**南葵音楽文庫定期講座　2019年度第１回**
会場：新宮市福祉センター 集会室
◎「南葵音楽文庫の楽しみ方「カミングス文庫」は面白い！！！」
講師：佐々木勉
◎「『図書館』を創る！　―徳川頼倫、頼貞父子が選んだ道―」
講師：林淑姫



7月13日～8月28日　**夏休み企画展**
「南葵音楽文庫の至宝　―楽譜でたどる西洋音楽の歴史―」
会場：県立博物館

9月28日　**南葵音楽文庫グランドオープン企画**
読売日本交響楽団和歌山公演2019
会場：県民文化会館 大ホール
出演：鈴木優人（指揮）、阪田知樹（ピアノ）、読売日本交響楽団

9月29日　**南葵音楽文庫定期講座　2019年度第２回**
会場：橋本市教育文化体育館 第１研修室
◎「徳川頼貞　音楽への愛と使命、いま和歌山で蘇る」
講師：美山良夫
◎「南葵音楽文庫　『夢の多い子供』が創った音楽の聖地」
講師：佐々木勉

12月　**〈南葵音楽文庫グランドオープン〉**

2020（令和2）年

2月22日　**南葵音楽文庫定期講座　2019年度第３回**
会場：県立図書館 講義・研修室
◎シンポジウム「南葵音楽文庫のいま」
パネリスト：近藤秀樹（司会）、
佐々木勉、篠田大基、美山良夫、林淑姫
◎講演「徳川侯爵交遊録　大音楽家と出会った日本人
サン＝サーンス, ホルマン, クライスラー」
講師：篠田大基

2月23日　**南葵音楽文庫定期講座　2019年度第４回**
会場：県立図書館 講義・研修室
◎報告会「南葵音楽文庫のこれから」
パネリスト：近藤秀樹（司会）、
佐々木勉、美山良夫、林淑姫

3月11日　**ネイラー　序曲《徳川頼貞》吹奏楽版（大橋晃一編曲）音源配布開始**

3月31日　**『南葵音楽文庫紀要』第３号発行**
3月31日　**南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』創刊準備号発行**

南葵音楽文庫　ミニレクチャー【一覧】2017年12月～2020年3月

担当講師　美山良夫	
南葵音楽文庫を知る：基本の基本	2017.12.09
徳川頼貞　学生時代の本と楽譜	2017.12.23
紀州徳川家と音楽　吉宗から明治まで	2018.01.06
大きな楽譜 美しい楽譜　丈夫な楽譜	2018.04.21
南葵に残る「第九」資料さまざま	2018.05.19
楽譜が語り出す「物語」ドイツからアメリカ・日本へ	2018.06.23
南葵音楽文庫：２つの世界大戦とその狭間で	2018.08.18
チェロの名手ホルマンの来日	2018.09.15
愛書家憧れのインキュナブラ（揺籃期活版印刷本）	2018.10.12
南葵音楽文庫を知る－基本の基本－１．頼貞の『思い』	2018.12.07
同２．デジタル	2019.01.11
同３．数奇な運命	2019.02.08
同４．魅力の核心「手沢本」	2019.02.23
同５．「書票」とは	2019.05.05
同６．書物の装幀	2019.06.07
博物館「南葵音楽文庫の至宝」展 見方、読み方、楽しみ方	2019.08.09
同７．オークション	2019.08.24
同８．楽譜印刷万華鏡	2019.09.28
同９．失われた貴重書	2019.10.19
同 10．演奏会プログラム	2019.12.21
船、宿、列車＝旅する頼貞が求めたもの	2020.02.02
「赤貧、洗うがごとし」－池永孟と徳川頼貞	2020.03.01
南葵音楽文庫に宿る「魂」	2020.03.28
担当講師　林淑姫	
徳川頼貞と明治のうた	2018.01.13
ケーベル先生と徳川頼貞	2018.02.10
ロンドン・音楽・1914 年	2018.03.03
大田黒元雄と徳川頼貞	2018.03.10
明治の来日オペラ団と徳川頼貞	2018.04.07
明治のオーケストラと徳川頼貞	2018.05.05
南葵音楽文庫と日本人作曲家の楽譜	2018.06.09
父・徳川頼倫のこと～頼貞の回想から	2018.09.01
頼貞の恩師シリル・ルーサム	2018.09.22
南葵楽堂開館 100 年記念！	2018.10.27
徳川頼貞と武井守成のプレクトラム合奏団	2018.11.17
徳川頼貞と本居長世	2018.12.22
頼貞の恩師チャールズ・ヴィリアーズ・スタンフォード	2019.01.26
徳川頼貞の恩師チャールズ・ウッド	2019.03.08
徳川頼貞と兼常清佐	2019.03.30
本居長世　人と作品	2019.04.20
指揮者ヘンリー・ウッド	2019.05.18
上海工部局交響楽団－徳川頼貞による招聘計画の顛末	2019.06.29
『えりざのまどゐ』と徳川頼貞の小説「麗日記」	2019.07.07
橘井清五郎－南葵文庫が育てたもうひとりのライブラリアン	2019.08.17
南葵音楽図書館と遠藤宏	2019.09.14
瀧廉太郎と東くめ - 遠藤宏の研究資料から	2019.10.11
日本オルガン界の泰斗木岡英三郎－南葵主任オルガニスト時代	2019.11.03
唱歌の和歌山－教材としての唱歌、愛唱歌としての唱歌	2019.12.06
佐藤春夫の詩と音楽	2020.01.18
和歌山をうたう－万葉のうた、民謡、唱歌、近代詩、歌曲	2020.02.15
和歌山の音楽家たち	2020.03.14
担当講師　佐々木勉	
録音技術誕生以前の家庭での音楽の楽しみ方	2017.12.16
18 世紀ロンドン市民の音楽の楽しみ方	2018.02.03
17～18 世紀のイギリス紳士のたしなみ	2018.02.24
愛鳥家の楽しみ	2018.03.31
エリザベス１世女王とマドリガル集《オリアンナの勝利》	2018.04.28
イギリス・ルネサンス期の音楽理論書を読む	2018.06.02
ヘンデルの失脚と J.Chr. ペープシュ《乞食オペラ》	2018.06.30
1695 年 11 月 21 日、イギリスは泣いた	2018.07.28
レッスンという名の優雅な傑作：パーセルのチェンバロ作品	2018.08.04
イギリス人は踊り好き？	2018.08.25
H. パーセル《音楽はほんのひと時であっても》	2018.09.29
楽譜出版業者の販売戦略１　ヘンデル：オルガン協奏曲	2018.10.20
同２「予約出版」というビジネスモデル	2018.11.24
誤植？は語る　ヘンデル《「リナルド」からの歌曲集》	2018.12.15
楽譜出版業者の販売戦略３　常識に縛られるな	2019.01.19
同４　顧客のニーズを探れ	2019.02.16
同５　売れ筋の楽譜は再販せよ	2019.03.16
南葵音楽文庫で学ぶ西洋音楽史（1）「グレゴリオ聖歌」	2019.04.12
同（2）中世ヨーロッパの音楽「ドレミの起源」	2019.05.10
同（3）　同「楽譜の誕生と発展」	2019.06.15
同（4）　同「多声音楽の出現と展開」	2019.07.12
同（5）ルネサンス期の音楽「ミサ曲の発展」	2019.08.04
同（6）　同「宗教改革と教会音楽の展開」	2019.09.06
同（7）バロック期の音楽「通奏低音」	2019.10.06
同（8）　同「モノディ様式の新しい歌」	2019.11.03
同（9）　同「モノディ様式による声楽ジャンル」	2019.12.01
同（10）　同「器楽の発展」その１	2020.01.10
同（11）　同「器楽の発展」その２　協奏曲	2020.02.07
同（12）　同「器楽の発展」その３　組曲	2020.03.06
担当講師　近藤秀樹	
仏蘭西で聴く日本の歌	2018.01.20
機関車の音楽	2018.02.10
ゾウさんの子守唄～こどもたちのための音楽（1）	2018.03.17
こどもたちのための音楽（2）ラヴェル《子どもと魔法》	2018.04.14
海の音楽～スナール室内楽コレクションより（3）	2018.05.12
プロコフィエフ、再び～スケルツォと行進曲	2018.06.15
ラヴェルと日本とフォックストロット	2018.07.14
ダルクローズとケクラン～スナール室内楽シリーズより	2018.08.11
頼貞が会った音楽家たち（1）ゴドフスキー	2018.09.08
ピアノの詩人、モンポウ～スナール室内楽シリーズから	2018.10.07
『ルバイヤート』を歌う～スナール室内楽シリーズから	2018.11.04
ロシア音楽と和歌～プロコフィエフとその周辺	2018.12.02
頼貞が会った音楽家たち（2）ヴァンサン・ダンディ	2019.01.06
松山芳野里《5つの日本的な歌》ふたたび～パリでの初演	2019.02.03
オネゲルと堀口大學～スナール室内楽シリーズより～	2019.03.03
1921 年５月・巴里の頼貞	2019.04.20
オネゲルとスナール～ピアノ曲を中心に	2019.06.02
音楽の温故知新～スナール室内楽シリーズから	2019.06.22
プロコフィエフ、《展覧会の絵》を弾く！？	2019.07.20
オネゲルとスナール（3）《ユディト》	2019.09.01
第一次大戦の影～ルイ・ヴィエルヌの音楽を聴く	2019.09.21
旅する音楽家～アルベニス《スペイン風セレナーデ》	2019.10.26
《人生への別れ》～カゼッラと南葵音楽文庫	2019.11.16
少年作曲家 J・フランセ～スナール室内楽シリーズから	2019.12.14
頼貞が会った音楽家たち～シャルル・マリー・ヴィドール	2020.01.25
フランスとスペインのはざまで《カスティーリャ民謡集》	2020.02.22
音楽になったスポーツ？オネゲルの《ラグビー》を聴く～	2020.03.21
担当講師　篠田大基	
ドイツ歌曲になった和歌　ワインガルトナー《日本の歌》	2019.03.23
南葵楽堂開堂記念委嘱作品 E.W. ネイラー 序曲《徳川頼貞》	2019.04.07
E. ジンバリスト《日本の調べによる即興曲》	2019.07.27
担当講師　泉　健	
世紀転換期のベルリン	2018.01.27
学習院時代の友人たち	2018.03.24
頼貞・ケンブリッジ大学入学試験	2018.07.21
露西亜救済慈善音楽会　ドビュッシー「放蕩息子」	2018.11.09
ベルリンの頼貞	2019.05.25

※スペースの関係で副題等一部を省略した場合があります。
　グレー表示は、感染症予防のため開催が中止になった回です。

※各レクチャーのレジュメ（配布資料）を和歌山県立図書館「南葵音楽文庫」のウェブサイトでご覧いただけます。

https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/minilec/

南葵音楽文庫　紀要　第４号

令和3年3月31日発行
令和4年7月12日改訂

発　　行　和歌山県立図書館
〒641-0051　和歌山県和歌山市西高松一丁目7番38号
電話　073-436-9500
https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/

編集協力　有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒531-0071　大阪市北区中津七丁目３番２号１階
https://www.ttdesign.co.jp/

印刷製本　株式会社 協和
〒642-0017　和歌山県海南市南赤坂五丁目3番
http://www.kk-kyowa.jp/

©2021-2022 Wakayama Prefectural Library

本紀要には、地球環境を考慮した
植物油インキを使用しています。